とられてたまるものか、所で、あなたは、ミハエルの本心を御存じですか？」

「そんなことを仰有つて……若し、わたくしが太公に言ひつけたら？——」と、彼女が言ふ。

「よござんす。」と、ルバートは氣にも留めずに答へた。そして、夫人が目を逸らした隙を覗ひ、飛び懸るが早いか、カラ〳〵と笑つて接吻した。

「これも言ひつけて下さいね。」

若し、私がピストルを持つてゐたら、屹度、射つたに違ひない。が、心を靜めてゐる間に彼の言葉を聞き逃して了つた。もう一度耳を澄した時には、かう語つてゐた。

「でも、實を言へば、」とルバートは言ふ。「そんなこと、ミハエルは少しも氣にしやしないんです。御存じの通り、彼奴はフラビア姫に逆上せて、河原乞食のルドルフの首を切ることばかり、口走しつてゐるんですよ。ところで、私がルドルフの首を切つてやつたら、私に何を呉れるつて約束したと思ひます？」

女は頭を兩手の間に埋めた。祈るやうに、絶望したやうに。

「私はその約束を待つてはをれないのです。」とルバートは言つて、再び彼女の體に觸れようとした。その時、窓の開いた此の室に、戸の音と荒々しい聲が響いた。

「何をしてゐるんだ？」

ルバートは窓を後に振り返つて、低く禮をした。そして彈んだ、愉快さうな調子で言つた。

「お留守中に失禮いたしました。然し、御婦人を只一人、殘して行くに忍びませうか？」

今入つて來たのは黒のミハエルに違ひない。彼が窓の方に寄つて來ると、姿は眞直に見えて來た。彼はルバートの腕を摑んだ。

「貴樣も王樣と同じく濠へ投げ込んでやるぞ！」と言つて、物を投げるやうな身振りをした。

「私を脅迫なさるのですか？」と、ルバートが嘲弄的に訊いた。

「脅かされたら、少しは藥も效くかも知れぬ。」

「然し、」と彼は屈せず答へた。「ルドルフ・ラッセンダルは、隨分脅かされましたが、まだ生きてゐますよ。」

「下郎がへまをやつたからとて、俺まで失敗したとは云はれまい？」と、今度はミハエルが嘲笑的に反問した。

「殿下はまだ、へまをやるやうな危險な目にお逢ひになつた事はございませんからねえ。」と、ルバートは皮肉る。

私も嘗て人の噂を聞いた事がある。卽ち、身に危險が及ぶと見れば、太公は何時もそれを避けるといふのだつた。

黒のミハエルは、このルバートの嘲弄を聞いてもはしてゐたが——返事は平靜な冷かな聲で、自制心を失はなかつた。確かに不機嫌さうな顏

「もう、いゝ。口爭ひは止さう、ねえルバート。時にデチャードとベルソンは王の監視をしてゐるかナ？」

「え、、して、をります。」

「もう用事はない。お前は休むがいゝ。」

「いや、私は別に、疲れても居りません。」と、ルバートは言つた。

「まあ、彼方へ去つてくれ。」と、ミハエルは我慢しきれずに言つた。「あと十分も經つと橋が引かれてしまふ。まさか、お前も濠を游いで寢床へ行かうとは思ふまい……？」

ルバートの姿は消えた。戸が開いて、また閉る音がした。室には、ミハエルとアントワネット・ドモーバンの二人限りになつた。殘念なことに、太公は窓を閉めてしまつた。彼は一二分間、立つたまゝ、アントネワットと話してゐた。女は首を横に振つたので、彼はくるり彼方を向いて行つた。女も窓を離れた。再び戸の音がしてから、黒のミハエルは鎧戸を閉ざした。

「おーい。ド・ゴーテ。ド・ゴーテ。」と、橋の上から人の叫び聲がした。「寢る前に、湯に入らないのなら、やつて來い。」

それは釣橋のたもとから響いて來るルバートの聲だつた。間もなく、彼とド・ゴーテの姿が橋の上に現れた。二人は腕組みしてゐた。橋の眞中まで來ると、彼はド・ゴーテを待たして置いて、欄干から下を覗き込んだ。私はびつくりして、ヤコブの梯子の蔭に身を沈めた。

それから、ルバートは面白い惡戯をして見せた。彼はド・ゴーテの持つてゐた壜を受け取つて、口へ當てた。

「一つ滴しもありやしない！」と、不平さうに叫んで、それを濠の中へ投げ棄てた。その壜は、水音と波紋から察すると、十管から一碼以内の場所に落ちたらしい、するとルバートはピストルを取り出し、壜を狙つて射ち出した。最初の二彈は壜を逸れて十管に當つた。三發目のが微塵に壜を碎いた。私は此の亂暴者がい、加減に惡戯を止めてくれゝばよいと思つたが、今度は十管を狙つた。私が十管の向側にうづくまらうとして動いた時、彈丸は私の髪を掠めて飛び去つた。

「橋を引くぞ！」と叫ぶ聲。私はホッと安心した。叫びながら橋を走り渡つた。橋が釣り上げられると萬象忽ち靜寂の中に沈んでしまつた。時計は一時十五分を打つ。私は立ち上つて、脊伸びしながら欠伸をした。

それから約十分も經つた頃、右手に當つて、私は幽かな物音を聞いた。透し見れば、橋に通ずる入口のところに、黒い人影が動いてゐる。それは男だつた。輕快で、優雅な容子から察してもルバートらしい。彼は劍を手にしたまゝ、一二分間みじろぎもせずに突つ立つてゐるんだらう？　やがてルバートはニが、私の肉體を流れた。今、あの若い惡魔は何をしようとしてゐるヤリと笑つた。そして石垣をキッと眺めて、こちらへ向つて歩み寄つたが、直ぐ石垣を下り始めた。石垣には階段が造られてあつたのだ。それは十八吋位の間隔で、石垣に刻まれてゐるのらしい。ル

ベートは下まで降りきつた。そこで劍を咬へ、周圍を見廻して、音のせぬやう身を水中に投したら若し自分一個の身體なら私は彼のところに游いで行つて、思ふ存分劍を交へて、澄み切つた夜を、邪魔立てする人もなく、戰ひ拔いたに違ひない。さう思つて、私は逸る心を抑へつゝ熱心にその姿を見まもつた。

彼は、緩やかに、靜かに、濠を橫切つた。向岸の石垣にも矢張り階段があると見え、それをルベートは攀ぢ上つてゆく。入口まで出ると釣上げられた橋の上に突つ立つて、ポケットを探ぐりながら何か取り出す氣配。やがて戸の錠が開く音がしたが、閉まる音は聞えぬ。彼の姿は消えて了つた。

私は持つて來た梯子をそこに棄てて——橋の向う岸へ游ぎ渡り、階段の半ばまで攀ぢ上つた。そこで、劍を握りしめながら耳を澄して覗つた。太公の室には鎧戸が下りて、中ば暗かつた。橋の向側の窓から、一條の光りが洩れてゐた。ヒツソリと靜まり返つた中に、塔の大時計は一時半を打つた。

かうして、その夜、城內には、私の計畫と全く別の計畫が、もくろまれてゐたのだつた。

第十八章　陷穽

私の立つてゐる場所は、いゝ場所らしくは思へなかつたけれど、直ぐに其の良さが分つた。いゝ處に陣取つたナ、と私は獨り呟いた。ルバート・ヘンツオウにはどんな目的があり、また、どんな惡事を働かうとしてゐるのか、そんな事は問題ではなかつた。とにかく、私は儲け物をしたのだつた。ルバートは王樣とは濠を隔てた向岸にゐた。が、たとへ彼が濠を越して、また王樣のいらつしやる方へ行つたにしても、それは私のせゐではない。私は殘る二人を片づけなければならぬ、見張りの二人と、寢んでゐるド・ゴーテとを。あゝ、鍵さへ私の手中にあつたなら！　私はルバートが來ない中に、凡ゆる冒險をしてデチヤードとバーソニンを襲つて了うたに違ひない。然し私には何の力もなかつた。私は味方が攻め寄せて來て、鍵を持つてゐる敵兵をおびき出して釣橋を渡らせるのを待つより他はなかつた。そして私は、高速度劇の次の幕が演じ出されるまで、約五分間位の幕合を、三十分間も待たされるやうな感じで、待つてゐた。

對岸はひつそりとしてゐた。太公の室は鎧戸に閉されて、依然不可解のまゝである。ド・モーバン夫人の窓の光りは絕えず輝いてゐた。その時、私は極く幽かな響を聞いた。それは對岸の釣橋に續く扉の蔭から響いて來た。私の耳に聞えるか聞えぬ程の幽かさではあつたが、私にはその物音がよく分つた。それは注意深く、ゆるやかに廻される鍵の音だつた。誰が開けてゐるのだらう？　また、どの室の鍵が開けられるのだらう？　私の眼の前には劍と鍵を兩手に持つて、邪惡な笑ひを浮べたルバートの姿が浮んで來た。然し、それがどの扉なのか、それから又こんな夜更けを物ともせず、ルバートに追はれる人は誰なのか、皆目見當がつかなかつた。

然し、それもすぐに解つた。といふのは、次の瞬間——つまり、番人のヨハンが私と約束の仕事を敢行しないうちに、窓に燈の灯つてゐた室から、突然

物の碎ける音が聞えて來た。何かランプを蹴飛ばしたやうな物音である、と思ふと窓は急に眞暗になつて、忽ち叫喚の聲が夜の靜けさを破つた。「あれ——助けて——ミハエル樣、助けて下さい。——」それに續いて恐怖の悲鳴。

私は身體中の神經に痛みを感じた。私は右手で門の閾にしがみつき、劍を左手に握つたまゝ、爪立ちして樣子を覗がつた。すると意外にも、入口が橋よりも廣くなつてゐるのを知つた。向う側の暗がりに、人一人を入れる位の餘裕がある。私は脫兎の如く道を突つ切り、そこに立つた。此處に據つたからは、私は關門を扼したも同然だつた。私が斃れぬ以上、鼠一匹、離宮とその古城との往來は出來ないのだ。

再び、別な叫び聲が聞えた、やがて扉が勢よく開いて、ガタンと壁に跳ね返つたと思ふと、すぐ扉の把手を荒々しく、揉ぢ廻す音がした。

「開けろ！　えゝ畜生！　どうしたんだ？」と叫ぶ聲。確かにミハエルの聲である。

すると、私がド・モーバン夫人にやつた手紙の文句そのまゝに、

「助けて、ミハエルさま——、ヘンツオウさん！」

太公は惡鬼の聲を放つと、エイツと一聲、身體を扉に打ちつけた。その刹那、頭の上の窓が開いて「何事だ？」と、呟く聲がして、忙しげな跫音がする。私は思はず劍を握つた。若しド・ゴーテがここに差しかゝらうものなら六人組は又一人減るであらう。

續いて、劍戟の響き、騷然たる跫音——何もかも一緒に起つたかと思はれたが、其の時の事は迚も一息では述べられぬ。夫人の室からは、憤怒に燃えた叫喚が起る、と負傷者の悲鳴が響く。窓はガタと開けられて、ルバートが劍片手にぬツと現はれた。くるりと後を振り向いて突込んで行つた。

「ヨハンが來たのか！　いざ來い、ミハエル！」

察するにヨハンは太公を助けに此處に來てゐたものらしい。一體如何して私に戸を開けてくれるのだらう。ルバートに殺されはせぬかと氣になつた。

「助けてくれ——」と、太公の嗄がれた弱い聲が聞える。

頭上の階段に跫音がした。足許の王樣の獄室に當つて、動搖の起つた音だ。だが、此方岸にはまだ何事も起らない、夫人の室の窓には、ルバートを取り圍んで數人の寄せ手の姿が、くつきりと見えてゐる。三四回、彼は銳く、前に突きまくつた。しばし、寄せ手が後へ退いてルバートを遠卷きにすると、彼は窓の手すりに跳び上り、からゝゝと打ち笑つて劍を振廻した、血みどろになつて、もう一度カラゝゝと哄笑すると見るや、サツと身を躍らして、濠の中へ飛び込んでしまつた。

ルバートはどうなつたのだらう？　それを見極める餘裕もあらばこそ、ド・ゴーテの細そりした顏が、戸越しに現はれた。私は有無を言はさず、渾身の力をこめて跳びかゝる。ド・ゴーテは聲も立てずに後へドウと打ち倒れた。私は彼の側に膝をついた。鍵は何處にあるんだらう。「鍵だ、鍵だ？」と私は呟いた、彼がまだ生きてゐるかのやうに。然し到頭鍵が見つからなかつたので、私は此の死人の

顏を引つ叩いて了つた。

だが、遂ひに見つかつた。鍵は三つあつた。私は中でも一番大きいのを、王様の室の鍵穴に手探りで入れた。占めた！　錠はうまく合つて廻つた。私は出來るだけ靜かに戸を後に引き、鍵をポケットに入れた。

私は石の階段の頂上に出た。石油ランプが棚の上にボンヤリ燈つてゐる。私はそれを下ろして、手に持つたまゝ、突つ立つて、耳を澄した。

「何だらう？」

聲は階段の下に見える、扉の影から洩れて來るのだつた。

そして、それに相手が答へた。

「王様を殺らしてしまはふか？」

私は神經を緊張させて、次の返事を待つた。が、デチャードの押しひしがれた冷たい聲を聞いた時は胸なで下ろしてホッとした。

「一寸待て！　早まると大變だぞ。」

一寸沈默とした。それから用心深く扉の閂が拔かれる音。素早く私は手にした燈を吹き消して、再び以前の棚の上に置いた。

「暗いなア。ランプが消えてゐるよ。そこに燈はないか？」と別な聲。それはベルソニン。

確かに燈はあるらしいが、それを點けられては大變だ。危機一髪と思つたから、私は一と飛びに階段を馳け下り、扉に嫌といふ程身體を打ちつけた。ベルソニンに閂を拔かれた扉は、一とたまりもなく、サッと私の前に道を開いた。ベルソニンは劍を手にして立つてゐた。デチャードは、室の向うの寢椅子に腰を下ろしてゐた。私の姿に驚いたベルソニンは、後に身を引く、デチャードは、ハッとして劍に手をかけた。私は狂氣の如くベルソニンに跳びかゝつた。彼は身を退いて壁際まで押しつけられて了つた。彼は勇戰したものの、悲しむべし劍客ではなかつたから、忽ち私に斬り倒されて了つた。今度はデチャードをと身を飜がへして見れば、彼の姿は消えてゐる。さては、兼て手筈の通り、私を尻目にかけて、王様の室の戸口にかけつけ、中から固く錠を下ろしたに違ひはないのだ。そして、今頃はその中で、悠々と仕事をしてゐるのだ。

然し、此の時王様のために、自分の生命を捧げてくれた一人の男がなかつたなら、王様も又私も、恐らくは犬死してゐたに違ひない。といふのは、戸口に飛んで來た私は、次のやうな光景を見たからである。

王様は室の片隅に立つて居られた。病ひに窶れて、氣力なく、手枷をはめた手を空しく上下させながら半ば狂つてニヤリ〳〵と笑つて居られた。デチャードは醫者と室の眞中で摑み合つてゐた。私が入つて行くとデチャードは身をくねらせて、力の弱い醫者の手を振りもぎり、何の苦もなく相手を一突きに刺してしまつた。そして私に向つて叫んだ。

「いざ、尋常に！」

二人は互ひに切り結ぶ。幸ひなるかなデチャードも、ベルソニンも共にピストルを帯びてゐなかつた。後になつて知つたのだが、それは裝彈されて、表の室の煖爐棚の上に置かれ、扉に遮へぎられてゐたので、彼等の手には觸れ難かつた。その上私の不意の突撃に膽を冷した彼等は、それを取るだけの餘裕も持たなかつたのだ。

今や我々二人は、武器と武器との戰ひでなく、人と人との一騎打ちを始めた。默々として、烈しく火花を散らして渡り合つた。接戰中の事は一切夢中で、何事も記憶に殘らないが、只、彼は劍をとらせては、相手にとつて不足なき士だつたことを覺えてゐる。否、彼は駈引きを知つてゐる點で、多少勝つてさへゐたのだ。私は斬りまくられて次第々々にヤコブの梯子に面した壁際に追ひつめられた。

すると彼は悠々と笑ひを浮べて、私の左腕に切り込んだ。

此の戰ひに私は何一つ手柄を立てなかつた、順當に行つたら、彼は私を斬り伏せて、悠々と止めをさしたに違ひない。それ程、彼は傑れた劍客だつた。だが、彼が懸命に私を追ひつめて來る間にも、半ば氣も狂つて、痩せ衰へ、顏色蒼白になつた王樣は、夢中になつて歡呼しながら、室の片隅で躍り上がつて居られた。「やア、從弟のルドルフだー　ルドルフ！　助けてやるぞ！」と、呼びながら、椅子を摑んで、（彼は漸くのことで床から持ち上げて、ふら〳〵してゐるだけであつたが——）我々の方に寄つて來られた。私は元氣づいた。

「しつかり！　しつかりして下さい、此奴の足許に投げつけて下さい。」と私は叫んだ。

デチャードは猛烈な突きを入れた。

「しつかり！　二人でかゝりませう。」と私が叫ぶと、王樣は嬉しさうに笑つて、椅子を前に差し出して來た。

エヤツと一聲、デチャードは後ざまに飛び退り、目にも止まらぬ早業で、王樣に劍を突きつけた。そして鋭い一太刀浴びせるよと見れば、王は無殘にも悲鳴をあげて、パッタリと下に打ち倒れてしまつた。

相手は手強く、再び私に刃向つて來たが、そこには彼の自滅が待つてゐた。といふのは、彼が此方へ振り向くはずみに足を醫者の死骸から流れ出た血の溜りに踏み込んだ。デチャードはツルリと滑つて打ち倒れた。飛鳥の如く私は彼に跳びかゝつて、しつかと首を押へつけ、起き上る隙を與へもせず、グサとばかりに首を突き刺した。デチャードは斷末魔の叫びを上げ、自ら手に掛けた醫者の死體に折り重つて、死んで了つた。

王樣はおかくれになつたのかしら？　最初に心に浮んだ事は、これだつた。私は王樣の側に馳け寄つた。あゝ、王樣は前額に大きな深傷を負うて、まるで死人のやう、床の上に身動きもせず、醜い塊のやうに倒れて居られた。私は、側に膝をついて、耳を押しあて、呼吸はあるかと注意してみた。まだはつきりと確めぬ間に、外にガラ〳〵と言ふ騷がしい物音がした。それは釣橋の渡される音であ

つた。間もなく、強か此方岸の石垣にドシンと突き當つた。あゝ、王樣はまだ生きていらつしやるにせよ、私諸共罠の中に捕へられるのだ。かうなつては、王樣の生死は天に任せるより外はない。私は劍を引つ攫んで表の室にとびこんだ。一體誰が釣橋を渡したのだらう？　味方か？　果してそれなら萬事好都合に行つたのだ。私の目は思はず二つのピストルに注がれた。その一つを握つて、そのまゝ室の戸口に立つて、外部の物音に耳を澄ました。そして、左手の淋漓と血の流れる傷口を繃帶するために、シャツを引裂いて、また耳を澄ました。私は次に聞える物音が、どうぞサブトの聲であれ！　と如何に祈つたことであらう。私は氣息奄々として、精根を消耗させ疲勞し切つてゐた。だが、城の中には、恐らく精悍山猫の如きルパートが潛んでゐるに違ひない。私は廣い出口に出るよりも、階段の上の狹い戸を防禦した方が、容易であると考へたので、私は階段を上り、戸の蔭にかくれて、依然ヂッと聞き入つた。

何の音だらう？　この時刻、此の場所に、再び不思議な音がした。氣輕な嘲弄的な、而かも快活な笑聲——ルパートの笑聲であつた。私には、それが正氣の笑聲とは、殆ど信ずることが出來なかつた。いや、その笑ひ聲は、全く味方が到着しなかつた事を、雄辯に語つてゐるものであつた。若し來たものなら、ルパートは當然射殺されて、今頃あゝして傍若無人な笑聲など立てゝをらるべき譯はない。而かも時計は二時を打つた！　扉は開かぬ。味方は濠の堤に行く。其處に私の姿が見えぬとしたら、今頃味方は王樣と私の死報を齎らして、ターレンハイムに歸還してゐるだらう。味方がターレンハイムに着かないうちに、恐らく私は殺されて了ふだらう。事實あの通り、ルパートは勝ち誇つて、哄笑してゐるではないか？

一瞬間、私は扉に凭りかゝつたまゝ、喪心したものゝやうに、身を折崩してゐた。そして、再び嘲笑的なルパートの聲に驚かされて立ち上つたのだつた。

「おおい、橋は架つてゐるぞ！　渡つて來い！　黒のミハエル！　女の勝負をつけに來いッ！」

私は、扉に錠を下ろして、外を眺めた。

第十九章　決戰

一瞬間、橋の向側から照らす提灯と松明の光りに、私は眼がくらんで、何も見ることが出來なかつた。けれども、すぐに一切の光景が明瞭になつた。これは變つた光景であつた。橋はかけ渡されてゐた。橋の向袂には、太公の召使が數人團まつてゐた。その中に二三人は、私の眼を眩ました灯を手にし、他の二三人は槍を持つてゐた。彼等は互ひにひしめき合ひながら、武器を突き出してゐる。その顏はいづれも靑ざめて、恐怖に戰いてゐた。そして、劍を片手に橋の眞中に突立つてゐる一人の男を嘖めてゐた。ルパート・ヘンツオウは、ヅボンとシャツは鮮血に染つてゐたが、その潑剌たる姿には、彼がかすり傷さへ受けてゐないことが察せられた。彼は

橋を後にして、掛つて來いと身構へながら、ミハエルを出せと叫んでゐた。召使には一丁の銃もなかつたから、一同すつかり畏縮して、此の死物狂の男めがけて打つてかゝる者は一人もなかつた。彼等は手を束ねて互ひに囁き合ふばかり。その最後の列には、見覺えのあるヨハンがゐた。彼は戸口に凭りかゝつて、頬の傷口にハンケチを當てゝ、立つてゐるだけであつた。

このお蔭で、私は全く助つた。臆病な敵はもう、ルバートに對する以上の反抗を私に示すやうなこともあるまい。私は今は只ピストルを擧げて、罪惡の當然の報いにルバートの頭に一彈を見舞へばいいのだ。ルバートは此處に私がゐやうなどとは、少しも知つてはゐなかつた。だが、私は何もしなかつた。——それは何故か、今日に至るまで私にも解らない。その晩、私は一人の敵を密かに片附けたそして又別に一人、僥倖によつて斃すことが出來た。だからと言つて、たとへルバートが手強い敵であつたにせよ、下郎共と一緒に、彼を斃してしまふやうな卑劣さは、私には堪へられぬ所であつた。然し、かうした壓迫感よりは、一層強い好奇心に捉らへられて、私は次に起る光景を注視してゐた。

「ミハエルの犬奴！　相手になるならかゝつて來い！」と罵りながらルバートが一歩前に踏み出せばその勢ひに辟易して、寄せ手はたじ〳〵と、後に退る。「ミハエルの惡黨奴！　さあ來い！」

するとその罵聲に應じたのは荒々しい女の聲であつた。

「ミハエルは死んだわ！　死んぢやつたわ！」

「死んだ？」と、ルバートは叫んだ。「案外、俺の一擊が利いたんだナ！」と、勝ち誇つてにつこりして、「武器を棄てろ、今度は俺が御主人だぞ！」

私は、召使共が屈服すると思つてゐたが、その言葉が終るや否や、別な事件が起つて了つた。最初は離宮の背後から聞える叫喚の響きと、遠くで扉を叩く物音である。私の心は躍つた。味方が私を探しに押し寄せたに違ひない。その騒音は續いたが、それ以上何事も起る樣子はなかつた。召使共は今眼前に起るべき事件に氣をとられてゐた。彼等の一團が左右に分かれて道を開くと、一人の女が橋の上によろめき現れた。寬かな白衣を着たアントワネット・ドモーバンである。彼女は髪を肩の上まで垂れ、顔は幽靈のやうに眞蒼だつた。火に照らされた眼は物凄く閃いた。彼女は戰く手にピストルを握りしめ、よろめきながら轟然一發、ルバート目がけて、射撃した。彈丸は狙ひを逸れて、私の頭上の材木に當つた。

「冗談ぢやない。」とルバートは笑つた。「あなたの眼がピストルの彈丸以上に恐ろしい力を持つてゐるか、こんな騒動が攅ち上つたんですよ。お蔭でミハエルまでが地獄行きでさア、ね、奥さん。」

彼女は、その言葉に耳も藉さなかつた。異常な努力で心を落着け、冷靜な威嚴さへ見せて直立してゐる。それから、ゆつくりと腕を上げるとヂッと狙ひを定めた。

彼の生死は、今やその一發に賭けられたも同然。それを逃れるためには、彈丸を冒して彼女に突擊するか、或ひは私の方に退くかの外はない。私も思はず、彼の背後にピストルを擬した。

然し、彼は突擊もせず、退きもしなかつた。まだ彼女の覘ひの定まらぬ間に、彼は非常に優雅な身

振りで、一禮しながら言つた。

「一遍でもキッスした女は、私には迚も殺せませんよ。」そして、ド・モーバンや私が呆然たる隙に、彼は橋の欄干に手をかけるが早いか、身も輕々と濠の中へ飛び込んだ。

その時、あわたゞしい跫音とサブトの聲が聞えた。あゝ私は救はれた！　死んだのは私でなくて太公だつた！　王様はもう自分がゐなくても大丈夫だ。さう思つた私は、手にしたピストルを抛げ棄てて、橋の上にと躍り出た。後には驚いて「王様」と叫ぶ聲。それには耳をもかさず最後の雌雄を決せんと、私はルバートの後を逐つて、劒を片手に、欄干の上に躍り上つた。濠の中、十六碼も彼方をルバートは泳いで行く。

彼は急速力で、而かも悠々と游いでゐた。私は疲勞し切つて、負傷した手をぶら下げた半身不具の姿である。私はどうしても彼に游ぎつくことは出來なかつた。しばし、默々と游いでゐた私は、古い砦の一角を廻つた時に、始めて聲をかけた。

「止れ、ルバート！　止れ！」

彼は振り返つて見たやうだつたが、そのまゝ游ぎ續けて行く。彼は、今堤の下に達して、攀ぢ上る場所を探してゐる。私はそんな場所のないことを知つてゐた、が、私の殘しておいた綱がある筈だ。私がそこまで行かない中に、彼にしてやられるかも知れぬ。或ひは幸ひに、氣附かれずにすむかも知れない。だが、多分それを見つけて、攀ぢ登つた後でその綱を引き上げたら、彼は私を出し抜いて逃げおほせるだらう。私は必死の力で追迫した。遂に私は追ひつき始めた、一心に上り場を探してゐた彼は、知らず〳〵速力をゆるめてゐたからである。

あゝ、遂に綱が見つかつてしまつた。低く「占めた」と叫ぶ聲。そして彼は綱を手繰りながら登つて行く。私もその下まで游ぎ着いた。彼は綱の中程に身をつるしながら、私を振り返つた。然し、私の手は屆かなかつた。「何者だ？」と彼は驚いた聲で言つた。

私を王様とのみ思ひ込んでゐたらしい。——全くさう思はれてもいゝ程、私は青ざめてゐた。だが、すぐ彼は叫んだ。

「おや、河原乞食め、何で此處まで尾いて來たのだ？」

言ひながら、彼は堤の上に上がつた。

私は綱を摑んだ、が、そのまゝ立ちすくんで、彼の樣子を覗つた。彼は劍を持つて堤に突つ立つてゐる。私が登つて行つたら、眞向から切り下げるつもりらしい。私は綱にかけた手を離した。

「案ずるな。」と私は言つた。「今更逃げる僕ではないぞ。」

彼は見下して笑ひながら、

「これも誰ゆゑ、女ゆゑ、かナ。」と言ひかける刹那、忽ちけたゝましく鳴りひゞく鐘の音。濠の彼方に雄叫びの聲！

「此方でも君との出會を待つてゐたが、今は心が急かれるから。」と、言ひ終るや否や、彼の姿は頭上

から消え去つてしまつた。

忽ち危險も打ち忘れ、私はいきなり綱を引摑んで、堤の上に躍り上がつた。彼は三十碼も前を、森の繁みへ走つて行く。私は堤に上るや否や、止れ！　と連呼しながら、その後を追つて走つた。彼は止まる氣配どころか、一歩一歩私を引き離してゆく。私は只々ルバートの血に飢ゑてひた走りに走つた。間もなく、こんもりとしたゼンダの森影が、我等二人——追はるゝ者と、追ふ者の姿を包んで了つた。

時刻は三時であつた。夜はほの〴〵と明けかゝらうとしてゐる。私は長い眞直な草原路を走つてゐる。ルバートはもう百碼位前に立つて、快い朝風に房々した髪をなびかせながら走つてゐた。私は極度に疲れて、息も絶え〴〵だつた。彼は振り返つて私を手招く、嘲るやうに。私は息苦しさに堪へかねて、立ち止つた。すると間もなくルバートは急に右へ折れ曲つて姿を消した。

萬事休矣と思つた私は、深い困惑を感じて立ちすくんでしまつた。然し、私は森の中を通つて聞えて來る叫び聲——確か女の悲鳴に、再びすつくと立ち直つた。あらん限りの力で、ルバートの消えた處まで馳けつけ右へ折れると、また彼の姿が見えた。だが、あゝ、私は彼を追撃して捕へることは出來なくなつた。彼は娘を馬から下ろしてゐるところだつた。今しがた聞えた悲鳴は、疑ふまでもなく、その娘の聲に違ひない。女は農家の娘らしく、籠をかゝへてゐるところから見ると、多分ゼンダの市場へ買出しに行く途中だつたのだらう。馬は、逞しい馬だつた。ルバートは、悲鳴をあげてゐる娘を

抱き下ろして、やさしくいたはり、笑ひながらキッスして、金を與へた。そして、女のやうに横乘りして、私の近づくのを待つてゐる。私の方でも、彼の來るのを待ちかまへた。

間もなく彼は私の方へ馬を進めた。そして少し手前まで來ると、手を擧げて言つた。

「城の中で、何をした？」

「お前の仲間三人を殺つゝけて來た。」と、私は答へた。

「何！　あの監房にも行つたのか？」

「勿論！」

「王樣は？」

「デチャードの劍に斃れたんだが、まだ生きてゐるかも知れない。」

「眞逆！」と、彼は愉快さうに哄笑した。

「もう一つは……」

「何だ？」

「貴樣の生命をたすけてやつたことだ。貴樣が橋の上にゐたとき、僕はピストルを持つて、背後にゐたぞ。」

「ほう！　すると、俺はピストルの挾み打ちになつたつて譯か！」

「馬を棄てろ！」と、私は叫んだ。「尋常に勝負しろ！」

「姫御前の手前、」と、彼は娘を指しながら、「まあ御免蒙らう！」

その言葉に怒つて、私は夢中になつて彼に突撃した。しばし、彼はひるむと見えたが、やがて馬の手綱をひき締めると私に立ち向つて來た。私は銜を引つかんで、彼に打つてかゝつた。それをチャリンと受け流して、逆に彼は突いて來る。少し飛び退さつて、再び彼の手許に繰り込み、そして今度は顔を眞向に切り込めば、彼は顔を仰向けにして横に拂つた。その劍に切り込まれじと私はさつと飛び退く。流石の彼も、私の太刀先鋭さに、全く面喰つた有樣だつた。さもなかつたら、彼は私を切り殺したに違ひない。私は喘ぎながら膝をついて了つた。今にも馬蹄にかけられるかと觀念の眼をつぶつた時——彼とてさうしたかも知れなかつた。その結果は兩虎傷つき、仆れる羽目になつたかも知れない——背後に叫喚の聲が起つた。見返れば、草原路の角に一人の騎馬が現れた。手にピストル握つて駒を急がす其の姿、これぞ親友フリッ・フォン・ターレンハイムであつた。彼を認めたルパートも、今はこれまでと思つてか、馬の鬣立て直し、ひらりと鞍に飛上つて、此方の樣子如何にと佇んだ。そして、前屈みになつて、額に亂れかゝる髪を掻き上げながら莞爾と笑つた。

「ルドルフ・ラッセンダル、さらば！」

彼は、頬に流るゝ血汐も拭かず、口に笑みを浮べていと慇懃な禮をした。そして戰き立てる百姓娘にも一禮し、今や着彈距離に近づいて、將に一發發射しようとしてゐるフリッに手を振つた。彈丸は空しく逸れて、彼の手にした劍に當つた。アッと一聲劍を落して、馬の脾腹を強く一と蹴り、ルパートは一目散に逃げ失せた。

私は荒々しく劍を地上に投げ棄て、フリッに追跡しろと叫んだが、フリッは馬を止めて、飛び下りるなり私の側に駈け寄つて膝まづいた。デチャードにやられた私の傷口は、また新しく裂けて、血は淋漓と地上を染めてゐた。

「では、馬を貸せ！」と、私はよろめきながら立ち上らうと、彼の手を振り切つて叫んだ。そして、憤怒に力づけられた元氣で、馬の側まで步み寄つたが、そのまゝパッタリ打つ伏してしまつた。フリッは、また私の側に膝まづいた。

「フリッ！」と私。

「しつかり……しつかりし給へ！」と、フリッは女のやうに優しく言つた。

「王樣は？」

彼は半巾を取り出して、私の脣を拭いてくれた。そして身を屈めて、私の額にキスした。

「生きていらつしやるぞ。何もかも君のお蔭だ。」と靜かに言つた。

二人の側に立つて、娘は恐ろしさに泣いてゐた。彼女は私をゼンダで見知つてゐた。現在の私は青ざめて水に濡れて、血みどろになつてゐたが、娘にとつては、私は王樣だつたのだ。

私は王樣が生きていらつしやると聞いて、「萬歳！」と叫ばずにはゐられなかつた。然しそれ以上何一つ言へなくなつてフリッの腕に抱かれたまゝ首を垂れた。そして、眼を閉ぢて、苦痛に呻いた

がフリッに重態だと思はせたくなかつたから、目を開いて「萬歳！」と叫ばうとした。然し、それは出來なかつた。そして極度の疲勞に加へて、今度は激しい惡寒さへ覺えた。私は身をフリッに押しつけながら、目を閉ぢて、そのまゝ深い眠りに落ちてしまつた。

第二十章　捕虜と國王

その夜、ゼンダ城内に起つた事件をはつきり了解するには、今まで述べた事だけではまだ不充分である。是非ともフリッやド・モーバン夫人から聞いた話を簡單に述べて、補足する必要がある。私が敵を欺く爲の手段として、夫人に叫ばせようとしたあの悲鳴が、何故豫定の時刻よりも早く叫ばれたかといふ事は、ド・モーバン夫人の話によつて明瞭になつた。たとへ、結果は有效だつたとしても、あの時は、我々の希望は根柢から碎けてしまつたやうに思つたのだつた。さて、この不幸な女は、未來の女王と言ふ榮譽に迷つたばかりで、ストレルソー太公に心を惹かされ、パリーからルリタニアまで隨つて來たのである。太公は、熱情家であると共に意志の强い人だつた。そして、その熱情と意志とを、冷靜な理智で統御してゐたのだ。彼は一切を所有して、何物も與へないことを誇りとしてゐた。彼女はルリタニアに着いて間もなく、太公に對する戀の競爭者がフラビア姫であることを知つた。彼女は絶望した。太公に何物も與へることも出來ず、また太公を牽つける何物も持たぬ事を知つたから。そして太公は彼女の一切を得たが、彼女には何も與へなかつた。同時に、彼女は太公の不敬な奸計を知つて獨り心をなやました。太公を思ひ切ることも出來なかつた彼女は、屈辱と希望の連鎖に繋がれて、太公に引きずられてゐた。而かも、彼女は私を殺すために、太公の命令通りになつて、私を誘き出すことを好まなかつたのだ。それに彼女は、私に警告の手紙を呉れたのだつた。彼女からフラビアへ寄こした手紙が、善意か、惡意か、嫉妬か、或は同情の孰れから出されたかそれは分らぬ。然し彼女は此處でも、私達の利益を計つてくれた。太公がゼンダに向つた時は彼女も一緒であつた。彼女はこゝに來て初めて太公の慘忍さを完全に理解して、不幸な王樣に對する憐憫の情に動かされたのだつた。この時から、彼女は我々の味方であつた。而かも、その話から察すると、彼女は今もミハエルを愛してゐた。

しかし、二人の間には、他の力が割り込んで來た。——青年ルパートの慾望と橫戀慕がそれである。多分、彼は夫人の美しさに牽きつけられたのであつたらう。が、夫人が太公以外の男のものになるか、または太公を厭がるやうになれば滿足したのかも知れない。幾日もく、彼と太公との間には暗鬪が續けられた。私が太公の室で偶然見かけた二人の爭ひは、その一例に過ぎなかつたのだ。彼女は二人の手から逃れようとして、私の救ひを求めてゐた時でも、ミハエルに對して、ルパートを警戒してくれと賴んだのだつた。ところが今晩、ルパートは、其の意思を敢行したのだ。彼女が自分の室に入ると、豫め鍵を手に入れてゐたルパートは、うまくその室に忍び込んだ。夫人が悲鳴を上げると太公がやつて來た。二人は暗い室で激しく戰つた。ルパートは、主人に致命的な一擊を與へて、召

使共に襲撃さるゝや、窓から逃走してしまつた。迸り出た太公の血は、ルベートのシャツを眞赤に染めた。然し、ミハエルを殺したとも知らぬルベートは、あくまで太公の息の根を止めようと焦つた。そのくせ他の三人の仲間をどうするつもりだつたかは、私も知ることが出來ない、一人太公と共に殘されたアントワネットは、傷口の血を止めようと試みつゝ、太公が息を引き取る時まで一生懸命看護した。そしてルベートに嘲けられた時それに報いんと出て來たが、私が隱れ場所を飛び出して、

その時、味方もその光景を眺めてゐたのだつた。味方は定刻に離宮に達して、扉の開くのを待つてゐたが、仲間と一緒に太公の救援に馳け廻つてゐたヨハンは、扉を開く暇はなかつた。そればかりか、ヨハンは皆の疑惑を避けるつもりで、何人よりも勇敢にルベートに立ち向ひ、傷さへ受けた。一方サブトは殆ど二時半過ぎまで、待つてゐた。それから、フリッに濠の堤を探させた。フリッは急ぎ歸つて、私は見つからなかつたとサブトに語つた。サブトはターレンハイムめざして、全速力で馬を走らせようとしたが、フリッは私を見棄てゝ去ることは出來ぬと言つて肯かなかつた。遂にサブトは、ベルネンスタインの一隊をターレンハイムに歸還させ元帥の出馬を乞はせた。一方殘りの兵は離宮の大戸の前に集合した。數分間ヂッとしてゐると橋の上でド・モーバン夫人がルベートに向つて火蓋を切つたので、同勢八人スワと許り離宮の中へ雪崩れ込んだ。そして、最初に襲ふたのは、ミハエルの室であつた。見れば、ミハエルは入口の閾に倒れて、胸を刺されたまゝ死んでゐる。サブト等が

召使共を外に追ひ拂ふと、彼等は、恐怖のあまり何の反抗もせず、武器を棄てゝ逃げ出した。アントワネット・ド・モーバンはサブトの足許に身を投出して泣いた。女はたゞ、私がルベートを追うて濠の中へ跳び込んだと語つたばかり。「捕虜の王様は？」と訊いても頭を振つてゐたばかりであつた。そこで、サブトとフリッとが味方の先頭に立つて、靜かに橋を渡つた。すると、フリッは戸口で、ド・ゴーテの死體につまづいた。もう息は絶えてゐた。

彼等は下の獄室から何か聞えはせぬかと耳を濟ましながら相談した。然し何も聞えぬ。彼等は王様が見張りに殺されて、例の土管から突き落されたのではないかと案じてゐた。けれども、こゝに私が先刻までゐたといふからには、まだ多少の希望はあつた。一同は再びミハエルの死體のある場所に戻つてみると、私が締めた扉の鍵が見つかつた。早速それで戸を開けて見た。階段は暗かつたが、彼等は燈をつけようとはしなかつた。下から射撃されたくなかつたから。然しすぐフリッが叫んだ。「下の扉は開いてゐるぞ！　見ろ！　燈がある。」一同は勇敢に突進したが、中には誰もゐなかつた。表側の室に入つてみるとベルギー人ベルソニンが、死んでゐた。サブトは「此奴は此處にゐたのか」と呟いた。次ぎに王様の室に入つてみた。室には醫者の死體に折重つてデチャードの死骸と、仰向けに倒れてゐる王様とが見つかつた。見るなりフリッは叫んだ。「ことぎれてゐる！」と。サブトは、フリッの外は、兵士全部を室外に逐ひ出して、王様の側に膝まづいた。そして傷こそ深けれ、王様はまだ御存命なので、手當次第でお助かりになる事を知つた。二人は早速王様の顏に被ひをかぶせてミハエル

の室に運び、そこに横へた。アントワネットは、まだミハエルの側で、祈禱をしてゐたが、王樣の傍へ寄つて來て、醫者が來る迄、王樣の頭を洗つたり、傷を拭いたりした。サブトはまた、アントワネットの話を聞いて、フリッに濠や森の中を探させた。彼はフリッ以外の者をやらうとはしなかつた。フリッは、私の馬を發見して、私が殺されたのではないかと案じてゐた。此處で話が前に戻る。彼はルバートに呼びかける私の聲を聞きつけて、それをたよりに私を探し當てたのだ。私は今でも、フリッが自分に近寄つて來た時の嬉しさを思ひ出す事が出來る。それ程、私を愛して心配してくれてゐたフリッだ。彼とても亦ルバート・ヘンツオウを仕止める事は、大切だと思つてゐたに違ひない。然し、若しフリッがルバートを仕止めたら、私はそれを快しとしなかつたに違ひない。

國王救助の懸案は、かくして目出度く解決した。此の事件が祕密になつてゐるのは、一にサブト大佐の力である。アントワネット・ド・モーバンと、番人のヨハンには堅く固く口止めした。この事件で深い心の傷手を受けた二人は、今日になつても口を緘して何も語らぬ。フリッは、それから王樣の友人――ゼンダに幽閉されてゐた人で、ミハエルの家來を相手に釣橋で勇戰した無名の友人を探しに出かけた。王樣は、遂に惡人輩を征服され、今は生命に別狀もなく、城内のミハエルの室に休んで居られるのだ。王樣は顏を布で被はれて、獄室から此處へ運ばれて來るなり、早速命令が發せられて、若しルドルフが見當つたら、早速王樣のお室へ、内密に伴れて來るやうにとのことだつた。一方、傳令は全速力でターレンハイムに馬を驅つて、ストラケンツ元帥へ、王樣が御無事の旨を姫に告げ、且つ急ぎ拜謁のため姫君同道で來いと言つてやつた。フラビアはターレンハイムにゐて、王樣の御歸還を待つてゐたのだつた。

サブトから以上の條理整然たる話を聞いた私は、すべてが上首尾に行つたことを知つた。只、殘念はなルバートを逸した事だけであつた。私は、先づ何よりも、フラビアの喜びを思うた。王樣がどういふ命令を（否、サブトが王樣の代りにさう言つて）傳へてやつても、又ストラケンツ元帥が何んと言はうとも、フラビアとしては、愛する者がゼンダで重傷を負うたと言ふ場合に、ターレンハイムにゐて安閑としてをられる筈のものではなかつた。其處へゼンダに來いとの王樣の命令である。姫の喜びやさこそと察せられた。ストラケンツ元帥は僅かの兵士を率ゐて、ターレンハイムからゼンダに向つた。そのすぐ後に姫の馬車がつゞいた。一行はゼンダの街の中を通つて行つた。

さてフラビア姫は、ゼンダへ向けて進んでゐた。やがて馬車は城へ通ずる丘に差しかゝつた。馬車の側には、馬に乘つた元帥が付き添つて、皇帝の命のまゝになるやうにと、彼女に懇ろに言ひ聞かせてゐた。丁度その時、フリッ・フォン・ターレンハイムは、ゼンダの虜なる私と共に、森の端れまで來た。失神狀態から恢復した私は、フリッの腕に縋りながら歩いてゐた。そして、木々の繁みを通して、姫の姿を認めた。姫に逢はない方がいゝと、咄嗟に決めた私は、フリッの顏をちらと見て、叢の中に蹲まつた。然し、我々の後から尾いて來た例の小娘の事は悉り忘れてゐた。娘は、笑顏や金貨の褒美を夢みたのか、一直線に姫の前まで駈けつけて、お辭儀をするなり呼びかけた。

「あのう、此處に王樣がおいでゞございます——あの叢の中に。御案内いたしませうか？」

「たわけ者め！」と元帥は言つた。「王樣は御貧傷なされて、只今ゼンダ城内においでなのぢや。」

「えゝ、王樣は御怪我なすつていらつしやいます。ですけど、王樣はあそこにフリッ伯爵樣と一緒においでになつてゐるんですわ、城ではございませんわ。」と娘も負けてはゐない。

「王樣が兩方に……二人もいらつしやるなんて……？」

「それが、どうしてこんなところに？」と、フラビアは當惑して言つた。

「王樣は、殿方をお一人追つかけておいでになつたのですわ。そして、フリッ伯爵樣がお見えになるまで、お爭ひになりましたの。相手の兵隊さんは、私の馬を奪つて逃げてしまひました。ですが王樣はフリッ伯爵樣と、こゝにおいでゞございますよ。それに、王樣のやうな、御立派な方は、又といらつしやいませんわ。」

「さうねえ！」と、フラビアは優しく言つた。そして、彼女はにつこりしながら、娘に金を與へた。

「兎に角、わたし、その方にお目にかゝりませう。」彼女は、馬車から下りた。

折しも、サブトは馬に跨つて城から出て來たが、姫を見るよりこの危ないところをうまく止めて呉れた。そして、王樣は手當の甲斐あつて、もう危險は脫せられたと物語つた。

「城内で？」

「勿論でございます。」と、サブトは、禮をしながら言つた。

「でも、この娘さんは、王樣は此處においでだと申して聽きませんの——フリッ伯爵も御一緒だといふのですよ。」

サブトは娘を不審さうに見て、笑ひながら、「こんな子供には、立派な人は皆王樣に見えるのでございませう。」と言つた。

「まア、あの方なら、誰にだつて王樣と思はれますわ。」と娘は、恥しさうに、それでも尙不服であつた。

サブトは周圍を見廻した。年老いた元帥の顏には、何か祕密でもあるのかといふやうな色が漂つた。フラビアの顏にもそれが覗はれた。疑惑は急速に大きくなつてゆく。

「兎に角、私がその人を見て參りませう。」と、サブトは周章てゝ言つた。

「では、私も參ります。」と、姫も言つた。

「では、此方へ！」とサブトは低く囁いた。

サブトの顏に、何か不思議な色を見てとつた姫は、元帥や他の者をそこに待たせて、我々の隱れてゐる方へやつて來た。サブトは、例の娘を脇に控へさせた。私は彼女を見るに忍びなかつた。フリッは、側らに膝をついて、くまり顏を兩手に埋めてしまつた。私は二人の近づくのを知つて、地上に蹲踞めてしまつた。

慰め顏に、私の肩に手をかけてゐた。

「何なりと低聲でお話し下さいませ。」と、サブトは此方へ近づきながら囁いた。すると忽ち聞えたの

は忍びやかな叫び聲――喜びと恐怖の錯綜した、姫の叫び聲だつた。

「あら、あの方……貴方、お怪我は……？」

遂に彼女は自分の側へやつて來て、膝まづいた。そして優しく私の手を執つてくれたが、私は相變らず地上を瞶めたまゝだつた。

「矢張り、王樣ですわ。」と、姫は言つた。「ねえ、サブト大佐、私をからかつていらつしやるの。」

我々はいづれも默つてゐた、三人とも。すると姫はそんな事に頓着なく私の首に腕を絡んで接吻した。やがて、サブトは、低い嗄がれた聲で囁いた。

「これは王樣ではないのです。接吻は御遠慮下さいませ。斷じて王樣ではございませんから。」

姫は一寸身を引いたが、まだ私の首を抱きながら、儼として憤りを見せて反問した。

「私の心を知つてゐるのは私ばかりよ。ねルドルフさま。」

「いゝえ、この人は王樣ではございません。」と、サブトはまた言つた。心優しいフリッは、急にすゝり泣きし始めた。

そのすゝり泣き――こそは、何の狂言もないことを、彼女にはつきりと感じさせるものであつた。

「この方は王樣ですわ！」と、姫は叫んだ。「ほら、これが王樣のお顏ぢやなくつて――この王樣の指輪は私の上げた指輪よ！　私の戀人にきまつてゐます！」

「戀人とお仰せならば兎も角も、」と、サブトは言つた。「斷じて王樣ではございません。王樣は只今

あの城においでゞございますぞ。この方は――」

「ね、ルドルフさま、ごらん遊ばせ！」と、彼女は私の顏を兩手に挾んで言つた。「どうして、あなたはこの人達にさう言はせて、わたしをお苦しめになりますの？　ね、譯を仰有つて頂戴！」

私は彼女の瞳に見入りながら答へた。

「お許し下さい。私は王樣ではないのです。」

姫は私の頰を强く兩手に抱きしめて、まじ〳〵と熟視した。私は凝視を浴びながら再び默々として居たが、心中、驚異と疑惑と生命への恐怖とが湧いて來るのを感じた。姫の手は次第にゆるんで行つた。彼女は立ち上つて、サブトを見、フリッを顧みて、再び私を凝視した。突然、彼女は前にのめるやうにして倒れかゝつた。心の痛みに人目も恥ぢず泣き伏した彼女を、私はしつかり抱きしめながら脣に接吻した。サブトは私の腕に手をかけた。私はサブトを振り仰ぐ。やがて、姫を靜かに地上に横はらせて立ち上がつた。彼女を見下しながら、私はルパートの劍に斃れて、この堪へがたい苦痛を免れしめなかつた天を恨まずにはゐられなかつた。

第二十一章　訣別

その夜。私はゼンダ城内の、王樣が幽閉されてゐられた例の獄室にゐた。ルパートがヤコブの梯子と名付けた、例の大十管は取り拂はれてしまつたので、室内の燈火は遮ぎるものもなく窓から洩

れ、暗い夜の濠の上を照してゐた。萬籟寂として靜まり返つて、勿論鬪ひの音など聞えなかつた。その日、私はフリッに伴れられて、サブトと姫とに別れてから、ずうつと森の中に隱れて一日を過した。黄昏になつてから、私は人知れず城内に運び込まれこの室に入れられたのだ。三人の人間が——而かもそのうちの二人は私の手にかゝつて、この室で死んだのだが、幽靈も出て來ない。私は窓際の藁布團の上に身を投げ出して、墨のやうな濠の水を眺めてゐた。そこへヨハンが、大した傷ではなかつたが、兎に角傷のためにまだ青ざめた顔をして、夕餉を運んで來てくれた。彼は私に色々その後の樣子を語つてくれた。王樣の容態が非常によいこと、王樣と姫とが會はれた事、彼等二人とサブトやフリッが、永いこと一緒になつて話しをしてゐたことなどを聞かされた。またストラケンツ元帥はストレルソーに歸り、ミハエルの死體は棺に納められて、その側にはアントワネット・ド・モーバンがゐるといふことであつた。さういへば、此の室にもミハエルのために牧師達が彌撒曲を歌つてゐるのが、禮拜堂の方から聞えたやうだつた。

城外には種々の噂が傳はつてゐるといふことである。逃れて生きてゐるのだとか、その虜は王樣の親友で、王樣が英國で何か事件を起された時盡力してくれた人だとか、或ひは彼が太公の密計を嗅ぎつけたので太公に誘拐されたのだなどと、言つてゐたさうである。

ヨハンが喋べつて行つた後で、私は一休み横になつて、物思ひに耽つた。大事件の後に續いてもさうするやうに、私もたゞのことよりも、過去數週間の出來事を追憶したり、よくも事件が落着したものだと、今更不審がつたりした。頭の上では、柱半ばにミハエルの旗を、頂上にルリタニアの國旗をつけた檣が、一晩風に弄ばれてひらめいてゐた。それを聞きながら、もう二度とあのルリタニアの國旗は、自分のために飜ることはないのだナと、急に自分の境遇の變化が思ひ合はされて來た。

突然、フリッが室に入つて來た。その時、私は窓際に立つて、以前ヤコブの梯子を石垣に取りつけた時に使つたセメントの跡を、ぼんやりいぢくつてゐた。フリッが、王樣が逢ひたがつていらつしやると傳へたので、私達は一緒に釣橋を渡つて、王樣の室、以前ミハエルの室であつた其の室へ。

王樣はベットに寢て居られた。ターレンハイムから招ばれた侍醫が傍にゐて、餘り長く話しをせぬやうにと注意した。王樣は手を差し伸べて、私と握手せられる。フリッと侍醫とは、窓のところに退がつてゐた。

私は王樣の指輪を拔いて、その指に差しながら言つた。

「陛下、私はこの指輪を辱しめまいと努力いたしたつもりでございます。」

「長話しは出來ぬが……」弱々しい聲で王樣は答へられた。「予は先刻、サブトや元帥と雲論したのぢや——予は元帥には一切を、打ち明けたよ。予はストレルソーへ君を伴れ戻つて、君の功績を公表

し、ルドルフ親王として、最も親しい友になつて貰ひたいと語つたが、二人は公表してはいけないの、今度の事件は秘密にして置くべきだのと申すのぢや。」

「それは、二人の申すのが尤もでございます。私はこのまゝお暇を頂戴したいのです。私はもう御用済みと存じますが……」

「如何にも、何人も及ばぬ働きをしてくれた。また二人がこゝへ見えたら、予は飽くまでも自説を主張しよう。予の病氣は、實はかなり酷いのぢや。然るに二人はそんなには見受けぬといふ。予の說を受け入れぬのは予の眞意を知らぬからぢや。予は王としての君の態度に、大いに學ぶべきところがある。」

「陛下。」と私は言つた。「過分の御褒めに預りまして恐縮いたしました。私が御舍弟樣同樣・陛下を裏切りませんでしたのは、偏へに神の御加護の力でございます。」

王樣は不審さうな目で私を見たが、私に問ふだけの氣力もなかつた。彼の目はふと、私の指に差されたフラビアの指輪に止まつた。私は此の指輪の事を訊かれるだらうと思つたが王樣は何にも言はずに、頭を枕につけてしまはれた。

「今度は何時逢へるか分らぬ。」と、冷淡なまでに弱々しい聲で仰せられた。

「何か御役に立つ時には御遠慮なく仰せつけ下さいませ。」と私は答へた。

王樣は瞼を閉ぢた。フリッと侍醫とが此方へやつて來た。私は王樣の手にキスして、そのまゝフリッに伴れられて歸つた。それから此方、私は二度と王樣にお目にかゝらない。

さて、王樣の室を出たフリッは、右折しないで、下に通つて、私を階上に案內した。

「何處へ行くのだ？」と、私は訝かつて尋ねた。

フリッは脇を見ながら、

「姫が君に逢ひたがつていらつしやる。話が濟んだら釣橋の處まで戻つてくれたまへ。僕はそこで待つてゐるから。」

「何の御用で……？」と私は息込んで訊いた。

フリッは首を振つた。

「姫君は何にもかも御存じかい？」

「あゝ、何もかも。」

彼は扉を開いて、靜かに私を中に押し入れた。室は立派な裝飾をした小さい客間だつた。煖爐棚の上に置かれた蘭燈の光りの淡さに、初め私は室の中に一人ゐるのだと思つてゐた。然し、すぐ窓際に立つてゐる女の姿を認めた。姫と見るより私は側に寄つて、膝をつき、姫の手を自分の脣に押し當てた。私は靜かに言つた。

「お姫さま！」

彼女は、少しふるへて周圍を見廻はした。そして、いきなり私にとびついて抱きしめた。
「立つてゐては嫌……立つてゐては！　いゝえ、あなたは負傷していらつしやるんですもの、腰かけませう。」
彼女は私を安樂椅子に坐らせて、額を撫でゝくれた。
「まあ、ひどい熱！」と言ひながら、姫は膝をすりよせた。そして、顔を私の胸に押し當てながら嘆くのだつた。「こんなに熱がお高いのに。」
戀といふものは鈍感な人間にも、戀人の氣持を鋭敏に感得させるものだ。たつた今、王樣の前に自分を卑下し、自分の僻越を詫びて來たに拘らず、フラビヤに會ふと凡てを忘れて私はかう言はずにはゐられなかつた。
「私は身も心も捧げて、姫君を思ひつめてゐるのです。」
私は、彼女の愛を求めたさにかう言ふのではない。嘗つて自分が王樣を裝ひ、優しい微笑もて姫の接吻を求めた事を、僞戀人と思ひこまれたくなかつたからである。
「生命をかけて思つてゐます。」と、私は姫を抱きながら言ひ續けた。「初めて大寺院でお目にかゝつて以來、私は絶えず思つて居りました。私は、世界中に、女はお姫さま只一人と思つて居ります。いつまでも。然し、あなたに犯した私の罪は、どうぞお許し下さいませ。」
「いゝえ、あなたのなすつた事は皆神樣が許して下さつたのですわ。」と姫はせきこんで私を遮ぎつた。そして、私の目を見上げながら、「あなたが本當の王樣でないにせよ、貴方を思ふ心に變りはございませんわ。私、王樣を思つてゐるのではなく、貴方さま、貴方さまばかりを何時までも……」と言ひながら、身をもたれて私に接吻した。
「私は自分が思つてゐる事を打ち明けようとは思ひませんでした。」と、私は言つた。「いや、一度、ストレルソーの舞踏會の夜、打ち明けようと思つたのですが、サブトに妨げられました。それ以來、打ち明けこそしませんでしたが、あなたを失ひたくはなくなりました。私はあなた故に、王樣を急いで救はうとしなかつたのです。」
「それは知つてをりますわ。でも、これから私と貴方とはどうしたらいゝのでせうね？」
私は彼女を抱き上げながら言つた。
「私は今夜、こゝを立ち去らうと思つてゐます。」
「いけません。いけません。今夜なんて！」
「いや今夜にも立ち去らなければ、人に姿を見られます。何故、あなたはお引き留めになるのですか？　何か——？」
「わたしを一緒に伴れてつて下さいません？」彼女はかすかな聲で囁いた。
「いけません。」と、私は叱るやうに、「そんなことを仰有つてはいけません。」
「何故いけないんですの、わたしも、あなたを思つてゐます。あなたは王樣に劣らない立派な方です

もの！」

彼女の言葉に私は自制を失つてしまつた。私は彼女を抱いて、たとへルリタニア中の草の根分けて探されてもいゝから、自分と一緒に逃げて下さいと懇願した。彼女は私の言葉を聞いてゐたが、目を見張つて、私をまじ〳〵と瞶めた。私は思はず顔を赧らめて默つてしまつた。

彼女は私から身を離して、向うの壁際で身を震はしてゐた。いざとなればどんなことでも仕兼ねない私の爲人を知つてゐる姫は、私の言葉に恐怖を感じたのだ。二人はそのまゝ、永いこと默つて向ひ合つてゐた。

「私は氣が狂つたのです！」と悲痛な聲で私は言つた。

「わたし、あなたの狂氣が好きですわ。」と彼女は答へた。

彼女は顏をそむけてゐたが、頰には涙が光つてゐた。彼女の可憐さに私の心は躍つたが、安樂椅子を固く握りしめて、逸る心を抑へた。「ね、戀が人生の全てでせうか、」と、姫は、私の惱ましい心を靜めるやうな優しい調子で言つた。「若し、戀が全てであなたについて行きますわ。わたしの心は、そつくりあなたのものですもの。然し、戀だけが全てなのでせうか？」

私は何も答へなかつた。彼女は私の側へ來て肩に手をかけた。その手を私は握つた。

「戀が全てだと言ふ人はございますわ。さういふ方にはそれは眞理でせう。わたしもさういふ人になりたいわ。ですけれど、戀だけが本當に全てのものでしたら、何故あなたは王樣を牢の中でお殺しにならなかつたのでせう。」

私は彼女の手に接吻した。

「ねえ、ルドルフさま。女は名譽といふものも望みますわ。何故神樣はあなたを思はせるやうにしたのでせう？　でも、私はこゝに留つてゐなければなりませんわ、ねえ。」

矢張り私は默つてゐた。彼女は一寸間をおいてまた續けた。

「あなたから頂いた指輪は私何時までも大事にしますわ。いつまでもあなたは私の心に生きていらつしやるの。あなたの脣の感觸も、何時までも私の脣に殘つてゐませう。ですけどあなたはお立ちになり、私は殘らねばなりませんわ。私は自分を殺しても、王樣と一緒に生きねばならないのです。」

私は彼女の心を察して身を震はした。しかし、もう膝まづいて、愛を求めようとはしなかつた。私は立つて、姫の手を捉つた。

「分りました。よく分りました。神樣はきつとあなたを好いて下さいます。私もあなたよりも樂な氣持ちで、お別れします。あなたの指輪は手に、あなたの脣は私の脣に、何時までもあるでせう。お仕合せを祈ります。」

歌の聲が聞えて來た。禮拜堂で司祭達がミハエルの靈に彌撒を誦してゐるのだ。それは同時に、我我の滅びゆく戀を弔ふ挽歌でもあつた。二人は手を握り合つた儘向ひ合つて、その歌にきゝとれた。

二人はまたお目にかゝれる時もございませんのね。わたしにキスをして頂戴。そしてもう別れませう。」

私は言はれるまゝに接吻した。然し、愈々となると姫は私に取りすがつて離さうともせぬ。そして何時までも、何時までも私の名を呼んだ。——そして二人は別れたのである。

私は急いで釣橋まで戻つて來た。そこにはサブトとフリッが待つてゐた。私は二人に手傳つて貰つて、着物を着換へ顏をすつかり包んで、城の出口から二人と共に馬に乘つた。次の朝、我々はルリタニアの國境に近い、寂しい停車場に來てゐた。車の來るまで、少し時間があるので、それまで三人は小川の傍の牧場を逍遙する事にした。何時も頑固なサブトさへ非常に優しくなつて、フリッはすつかり沈み切つてゐた。私は彼等の言葉を夢のやうに聞いてゐた。私の耳には「ルドルフ！　ルドルフ！　ルドルフ！」といふ悲しみと戀との歌が、まだ消え去つてゐなかつた。遂には皆默りこくつて歩いた。フリッは何時の間にか私の腕をとつてゐた。間もなく、一哩位彼方に汽車の煙が見えた。私は二人と握手した。「もうこれで、これからお互に片腕がなくなるんだナ。」と、私は笑ひながら言つた。「だが、全く三人は仲よくやつて來たねえ、サブト、フリッ！　三人とも氣が合つたからなア。」『さうだ。三人が力を合せたればこそ、謀反人も滅び、王樣もまた玉座にお着になられたのだ」と、サブトが言つた。

フリッは帽子を脫いで敬禮しながら、私の手に接吻をした。それを拂ひのけると、彼はつとめて笑ひながら言つた。

「天は我々のやうな正しい人間を、必ずしも王樣にはしてくれないのだ。」

停車場に居合せた人々は、顏を包んだ大きな男を不思議さうに眺めてゐた。勿論我々はそれを氣にも留めなかつた。私は二人と竝んで、汽車の着くのを待つてゐた。それから默つてまた握手を交した。二人は帽子をとつて、私を乘せた汽車が見えなくなるまで、ヂッと立ちつくしてゐた。その樣子から見て、誰か偉い人が、道樂で朝の寒驛から微行の旅にでも行くやうに人々は考へたらしい。その實それがかく言ふルドルフ・ラッセンダルといふ、大した財產も地位もない英國の一見習士官であらう。それを知つたら人々は嘸失望することだらう。或ひはそれと知つたら、尙一層好奇の目を注いだことかも知れない。と言ふのは、私は三ケ月の間王樣として生きて來たのだ。王樣といふものは少しも誇るべきものでないとしても、少くとも一度は經驗すべきものである。そして、ゼンダ城の高塔から、私の耳や心に、「ルドルフ！　ルドルフ！」といふフラビアの愛の叫びが聞えなかつたら、私は屹度また王樣になつて、その叫びを聞かうとしたかも知れないのだ。

あゝ、私は今でもその叫びを聞いてゐる。

第二十二章　歸京

故郷に歸つてからは、殆んど詰らない事ばかり。私は眞直にチロルへ行つて、二週間といふもの殆

んど寝て暮しながら、靜かに日を送つた。もう可成り寒くなつてゐた。それに私は、神經衰弱で、子供のやうに氣が弱くなつてゐた。二週間後、自分の隊に歸るとすぐ健康で豫定の旅を了へて歸つて來たと、葉書で兄のところに知らしてやつた。それで、ストレルソー警視總監の頭を惱ましてゐた、私の失綜問題も亂がついた。私はまた髭と髯を生やすことにして、それがどうやら恰好のついた時分、パリーへ渡り、友人のヂョーヂ・フエザリーを訪づれた。話は主として、私が不本意ながら謊をついて、旅に出た事に落ちて行つた。ド・モーバン夫人の後を追うて、ストレルソーに行つたに違ひないと一人決めに決めた譯を聞かされた時、私は散々彼をからかつてやつた。ところで、そのド・モーバン夫人はパリーに歸つてから閑居を續けてゐたので、別に以前と違つた評判も立てられなかつた。世間ではミハエルの不信と死とを知らなかつたのだらうか？　流石にヂョージ・フエザリーは、ミハエルの死を知つたとき、バートラム・バートランドをおだてゝやつたさうだ。「何故つて、君。」と彼は無遠慮に、「死んだ太公よりは生きてゐる詩人の方がいゝに極つてゐるよ。」から言つて、今度は私の方へ質問の矢を向けて來た。

「君の口髭は何の役に立つんだい？」

「實はね。」と、私は厭味を見せて言つた。「人間つて奴は、時々容子を變へて見たくなるものだよ。それに、理由もないでもないんだ。」

「矢つ張りさうだつたのか。アントワネットでないとすりや相手の別嬪さんてどんな女だい？」

「人間到るところ戀人ありさ。」と、私は言つた。

然し、自分の聰明さを自負してゐるヂョーヂは、何か私に戀愛事件があつて靜かなチロルへ行つてゐたに違ひないと、一人で決めて了つた。そして、お禮に「祕密文書」と稱する外交家だけの知つてゐる事實を聞かせてくれた。それはルリタニア內亂の眞相と、ミハエルの策動及びその失敗の話であつた。彼の意見によると、ミハエルに關しては、一般に知られてゐる以外に、何か祕密があるに違ひない。またゼンダの虜に關しては種々の噂があるが、それは男ではなく、男に變裝した女らしい。そして、王樣とミハエルの爭は、この女の爭が、根本らしいといふのだつた。

「その女といふのは、ド・モーバン夫人ぢやないね」と私は言つた。

「いや」と、彼は斷定的に否定した。「アントワネットで、嫉妬のあまり、夫人は太公を裏切つて國王についてゐた王姬フラビアは、ド・モーバン夫人がゐなくなつてから、急に王樣に冷淡になつたといふことだ。」

私はパリーでアントワネットに手紙をやつたが、訪問することはわざと避けた。折返し、彼女から親切な返事が來たが、王樣の寬大さに酬ゆるため、事件の祕密を嚴守してゐると書いてあつた。これから田舍に隱退して、全く社交界から身を退くつもりであることも書き添へて。その後夫人からは何の便りもない。多分その手紙通り田舍へ去つたのだらう。そして今尙は、ミハエルに心を殘してゐる

に違ひない。

さて、ヂョーヂとの會見はこれで終つたが、もう一人、納得させにくい相手が殘つてゐた。私はチロルからの歸るさに、そこの住民、社會制度、風景、動植物の研究をしないで、遊びくらして歸つて來たのだつた。義姉に文句を言はれても、何の抗議のしやうもなかつた。屹度レーン公園で遊んでゐたと思はれたかも知れないのだつた。が、兎に角、歸つて來ても、案じたほど大げさに騒がれずに濟んだのは幸ひだつた。只、義姉の期待を裏切つて、何もせずに歸つて來たのを心外とされたが、兄はまじめに觀察して來たことは、いづれ何かの役に立つ時があると言つた。

かうして、私が手ぶらで歸つて來ると、ローズは自分の豫言通りなので、鬼の首でも取つたやうに夫に自慢した。そして私が友だちにも所在を知らさなかつたことを非常に責めた。

「ほんたうに、あなたの所在を探すのに苦勞しましたよ。」

「さうでしたらうね。」と、私は言つた。

「皆さんに御心配をかけたのは、半分は大使の罪ですよ。ヂョージ・フェザリーもさう言つてゐましたね?」

「皆さんに御心配をかけたのは、半分は大使の罪ですよ。ヂョージ・フェザリーもさう言つてゐましたね?」

彼女は嘲笑するやうな調子で答へた。「わたし、ヤコブ・ボーロ デールさんのことをお知らせしたかつたのよ。御存知かも知れませんが、今度あの方は大使におなりになるんですつて。遲くも一ケ月以内に……。それで、あなたを一緒にお伴れしたいといふ手紙が參りましたの。」

「どこへ赴任するのでせう。」

「トーハム卿の後任になつて、ストレルソーへ御赴任なさるさうですわ。」と、彼女は語つた。「パリーも及ばないやうな、處ですもの、あなたもいらつしやいよ。」

「ストレルソー! ほう!」かういつて、私は兄の顏を見た。

「相談するまでもないぢやありませんか?」と、ローズはじれつたさうに言つた。「ね、勿論あなたも行らつしやいますわね。いかゞ?」

「そんなこと、思つたこともありませんね。」

「まあ、ひどいわ。」

「それに、僕はストレルソーへ行けさうもないと思ふんですよ、義姉さん。」

「今頃あの怖ろしいミハエルの事など考へてゐる人はゐませんよ。」

私はポケットからルリタニア國王の肖像を取り出した。それは、王位に卽かれる一二ケ月以前のものであつた。嫂は、それを手にとつて眺めた。

「あなたがまだ、ルドルフ五世の寫眞をごらんになつたことがなければ、これがさうなんです。若し僕がルリタニアの宮廷に姿を現らはしたら、皆はあの事件を思ひ出さないでせうね。」

義姉は寫眞と私とを見較らべた。

「立派ですこと!」さう言つて、彼女は寫眞をテーブルの上に置いた。

「兄さん、あなたはどう考へますか？」

バーレスドンは起つて、室の隅に行つて、古新聞の間を探した。すぐ彼は、「繪入ロンドン・ニュース」の一枚を持つて元の處へ戻つて來た。兄は二頁大のストレルソーに於けるルドルフ五世の戴冠式の圖を示した。その寫眞と繪を、彼は竝べて置いた。私もテーブルに坐つて、その二枚の繪と寫眞を眺めたが、思はず私は自分を忘れてしまつた。私の視線は、自分から次々に、サプト、ストラケンツ、ミハエル、それからミハエルの側にゐるフラビア姫の端麗な姿へと走つた。私はしばらくじつと見つめた。そして、兄の手が肩に觸れた時、始めて我に歸つた。

「ね、吃驚するほどよく似てゐるでせう。」と、私は言つた。「僕はルリタニアには行かない方がよいと思ひますよ。」

ローズも幾分納得が行つたが、全然自說を曲げようとはしなかつた。

「それは逃げ口上といふものよ。」と、彼女はやゝすねてゐた。「あなたは何故大使にならうとしなかつたんです？」

「僕は大使になりたいと考へたことはありませんよ。」と、私は言つた。

「今にさう思ふ時が來てよ。」と、彼女は言ひかへした。

ローズは不興氣に、二人を置いて行つてしまつた。バーレスドンは、煙草に火をつけながら、不審な目で私を見てゐた。

「この新聞にある寫眞は――」と、兄は言ひかけた。

「え？　その寫眞で見ても、ルリタニアの王樣と私とは、瓜二つでせう？」

「さうだよ。」と、彼も言つた。「だが、僕にはその寫眞の人間と、お前とは同一人だと……」

「だつて、それは寫眞の人間とぢやありませんか？」

「僕は此處にある寫眞と新聞の寫眞とでも見分けがつくんだ。新聞の人間も非常に寫眞に似てはゐるが……」

「え、それで？」

「お前そつくりだナ。」

兄は結婚以來、義姉を愛してはゐたが、善良な正直な人間だつた。そして敢へて私の祕密に立入らうとはしなかつた。

「僕は新聞の方が寫眞より僕に似てゐるとは思ひません。」と、私は斷乎と言つた。

「だが、どつちにしても、僕はストレルソーに行かうとは思ひませんよ。兄さん。」

「あゝ、ストレルソーへは行かないがいゝよ。ルドルフ。」と、彼も言つた。

兄が何か疑念を抱いたか、それは私の知るところではない。だが、また事實の片鱗を感得したか、知つたところで、彼はそれを胸一つに納めてくれる人間だ。事實、その後嘗て一度も我々の話はそれに觸れたことはない。兎に角、我々に誰か他に、ヤコブ・ボーロデール氏の隨員を見つけて貰ふこと

にした。

以上述べた事件が一切落着して以來、私は田舍に求めた小さい家で、靜かな生活を送つて來た。一般の青年が抱くやうな野心や目的は私の心を少しも惹かない。私は社會の渦卷の中に齷齪することに少しの興味も覺えず、また政治的爭鬪の渦中に入ることも欲しない。義姉は相變らず私に失望してゐる。私の知人は一樣に、私を怠けもので夢想家で社交性のない人間だと考へてゐる。けれども、私とてまだ青年だ。時には空想も抱かう。自分の人生に於ける役割は、まだ全部濟んではゐない。いづれ何時か大事件に遭遇して、頭を働かせ腕を撫する時も來るだらう。この空想が果して實現するか否かは、今のところ何とも言へないが、再び、あのストレルソーの賑かな街の中や、ゼンダ城の嚴めしい城壁の下に、自分自身を發見したいと思ふ。

こんな風に未來のことを考へては、私はまた過去の追憶に返る。色々の物象が、ずうつと續いて、眼前に髣髴として來るのだ。——王樣との最初の痛飮、城外の夜、森の追擊、私を尊敬してくれた人人、自分を殺さうとした人々が、まざ〳〵と目の前に浮んで來て、最後には、まだこの世に生きて、惡事を企らんでゐるに違ひない、あのルパート・ヘンツオウが浮んで來る。自分を殺しかけたあのルパートは、今は何處にゐるのだらう？　私は何時でも、彼の名を思ひ出すと、思はず掌を握りしめ血の躍るのを覺えずにはゐられない。

私のこの靜かな生活も、年に一度は例外がある。それは、ドレスデンで親友フリツ・フオン・ター

レンハイムに逢へる事だ。去年は、美しい細君ヘルガと元氣な赤ん坊をつれてやつて來た。フリツと私は一週間一緒に暮しながら、ストレルソーに起つた事件を語り合ふ。夜は、二人で散步したり、煙草をふかしたりしながら、サブトや王樣や、ルパートの噂をする。滯在日數が終り始めてフラビアの話になる。毎年、ドレスデンに來る時、フリツは小さい箱を持つて來るのが例だつた。その中にはバラの花があつて、莖には「ルドルフさまへ、永久に貴方の　フラビアより」と記した紙片がつけてある。私とフラビアを結びつけるものは、今は只その指輪だけであつた。私はそれに滿足してゐた。彼女は王樣に對しては善良な妻であつた。彼女の自己犧牲は多くの人々に平和と幸福を與へてゐた。

何時になつたら私は再び彼女の顏——あの白い顏と輝く髮とを見ることが出來るのだらう？　運命は何の暗示も與へぬから、私には知る由もない。この世に於ては、永久にその日あるべしとは思はれぬ。この世に生きる限り、肉に卽した魂によらずに、お互ひを理解される自由な世界があり得るものだらうか？　たとへさうした世界が永久にないものであるにせよ、私の愛を感じることが出來ないものであるにせよ、私は少しも憾みとしない。私は只、彼女を見、彼女と男として生きて行かう。又、すべてを忘れて、彼女の愛に償ず夢なき眠りを祈るだけだ。

ゼンダ城の虜　終

風雲のゼンダ城

第一章　女王の別辭

つまらない、ほんの一寸した出來事が、やがては全世界を震駭させ、幾百年も語り傳へられる大事件になる例は隨分ある。さういふ出來事に鋭い觀察眼を持つ人でも、しかし、ストレルソー大公の逝去とルドルフ王の復位とが、ミハエルの不敵な陰謀に齎された危機を、果してよく無事に納めるかどうか、はつきり斷定する事はむづかしからう。事情は依然として緊張して居り、爭ひは烈しい。熱情は研ぎすまされ、憎しみの種子は暗々裡に培はれて居る。王冠を覗つたミハエルは、そのために自分の生命までも煙にしたが、果してそこに結末が來たかどうか？　ミハエルは死んだ、物語はおだやかに休息して居る。ラッセンダル氏の顏はもはやルリタニア國から消えた。それでも尙ほ結末とはならないのだらうか？　ストラケンツ將軍の寢床の傍を歩きながら、かう私はわが友ゼンダ城司に語つたことであつた。その時この老いたる人は、既に近づきつゝある死の床から、僅かに頭を擧げて頷いて見せた。幾年もの間希つてゐた平和への希望を達すべき時が來たかのやうであつた。けれどサプト大佐は、その灰色なせる口髭をひねり、黑い葉卷煙草を噛みながら言つた。「君は全く樂天家だねえ、フリッ君。だが、ヘンツオウのルパートはほんとに死んだらうか？　わしは一向それを聞かないん

だが。」

よくぞ言つた、サブトよ！　だがこの男にはまだ一寸機會が遠いし、ルバートも私達の安靜をかき亂すことは一寸むづかしいのだ。彼自らの犯した罪に驅られて、彼は、幸運にも命を完うして逃れたこの國にその足を入れようとはしない代りに、ヨーロッパのあちらこちらをさ迷ひ歩いて、その機智で生きてゐるのだ。人の話ではルバートは、俠氣といふやつによつて、財産を殖やしてゐるとのことだ。けれど彼は私達の目の前で絕えず彼自身の存在を示さうとし、そして、歸國の許可を得て、彼の叔父の死が彼にもたらした莫大な財産を樂しむといふ計畫を決して止めはしない。圖々しく王に近付かうとしてゐる彼の代理人を見れば、それは彼の親戚でもあるし、高位と巨富とを擁する若人、ルザウ・リッシエンハイム伯で、ルバートのために一身を捧げて惜しまぬ人物である。伯は自分の役目を實によく勤めた。ルバートの罪の數々を知りながら、ひた押しに目的に進んだ。熱誠面に溢れて未來の忠節を約束もした。けれど、讀者の方々も推察される通り、王も、ヘンツオウ伯爵家の事件をよく知り、この事件にかゝり合つた人々も、ルバートの代理人の嘆願に耳傾けるわけはなかつた。私達はルバートの所得を押へ、彼の一擧一動に決して目を離さなかつた。私達は彼をしてルリタニア國に斷じて歸還させまいと決心してゐたからだつた。それは都合によつては彼の逮捕命令を出すことも出來るし、また重なる罪の故に彼の首を締めることも出來やう、けれど、若しルバートが官憲の手に渡されストレルソーの裁判所で審問される段になると、私達が一生懸命に、かくしにかくしてゐる秘密が、

忽ちゴシップとなつて町といふ町に、いや、ローロッパ全體に擴がつてしまふであらう。そんな次第でルバートは國外追放とその財産沒收以外には、格別の罪なき人のやうに取あつかはれてゐたのであつた。

たゞサブトだけは正しい見方をしてゐた。絕望のやうに見せかけながら、しかもルバートは一[illegible]間もその陰謀を止めなかつた。彼は自分の機會が必らず來るものと信じて居り常にその到來の準備に餘念もなかつた。ルザウ・リッシエンハイムに對するルバートの勢力は、彼がパリでそのいとこと會見し歸つてから、日立つて著るしくなつた。その時以來、この若い伯爵は彼に盛んに物資を供給し始めた、軍資金が手に入るやうになつたのでルバートは、その周圍に武器を集め、探偵組織を設けて、私達のあらゆる行動や宮廷のあらゆる出來事が一つ殘らず彼の耳に筒抜けになるやうにした。彼は宮内官以外の誰よりも遙かに着實に、王國の政府を操縱する方法や王政を動かし得る力と言ふものなどに就て知つた。更に著るしいことは、彼が王の健康狀態を事細かに知つてゐることだつた。なりを沈めてゐるのも、たゞこの目的を進めるために違ひなかつた。彼の發見が假りにこの程度に止つてゐたならば、それは大したひどい害もないわけだつたが、さうは問屋で卸さなかつた。ラッセンダル氏が王朝で威を振つてゐた頃から企てゝゐた策略で、彼は王自身から直接聞き出した秘密に喰ひ込んで來た。それはルバートが王朝に於ける地位を再び打樹てようとする熱望によるのか、或はラッセンダル氏への遺恨によるのか、それは私にもはつきりは分らぬ。たゞかういふことは言へる。——彼に刀と

金とを愛した。更にまた復讐といふことをも強く愛した。だから、彼の動機は兩方に跨がつてゐたといふことは殆んど疑ひのない所である。從つて一方の刃では、戀しい女の愛しゐる男を傷つけるにあつた。要するに、女王とルドルフ・ラッセンダルとの間にある感情を洞察して、ヘンツオウ伯が多くの密偵を放ち、且つ私とラッセンダルとの毎年の會見の目的を發見することに賞を懸けてゐた。少くとも彼は私の使命の性質を推量してゐた。彼にとつてはさうなくてはならぬことだつた。ルパート一流のやり方には、躊躇といふものが決してなかつたのであつた。

ルリタニア全國を歡樂の情火に包み、人民の目に黑のミハエルとその一黨の陰謀に對する明らかな勝利を印しづけた。あの華やかな婚禮の宴は、今は早くも三年前の語り草となつた。この三年の間王妃フラビアは女王として君臨してゐた。私はと言へば最早や熱情の霧で曇らされない眼で、靜かに人生を見守れる年齡に達してゐる。私の戀愛の月日は既に逝いた。しかも尙ほ私の妻の愛に增すべき尊い物は何にもない。嵐の時期には妻の愛は私の重い碇だつた、が晴れた空にはそれは私の輝やかしい星である。けれど私達あたりまへの人間は心のまゝに勝手に振舞ふものだ。私達の自由といふものは王侯のためにあるのではない　私達は人間の幸福を平均にするやうな未來の世界を期待してはゐない。現に此處でさへ一つの平衡はあるではないか。身分の高い人からは、その所領、その富、その名譽に應じてそれぞれ高い報償が支拂はれて居る。貧しき人も、矢張りそれぞれに慰安や歡樂の衣をまとつて居る。假りにさうでなかつたとしたなら、黙して夜を樂々と眠ることが出來るであらうか？女王フラビアの肩には重荷がヅシリと懸つてゐた、それを私は知つてゐる。私達がこれに就て語り合つた時には、現に私の妻の眼は涙でいつぱいになつた程である。しかも女王はそれを耐へ忍んだ。若し彼女が何かで躓いたとしても、それは全く當然なことだと私は思つて居る。それは何故か、彼女が王を愛して居らず、他の男にすべての心を捧げてゐる、といふ事實にあるばかりではないからだ。ゼンダ城の虜として嘗めさせられた恐怖と殘虐とによつてすつかり害はれた王の健康は、將に破裂の危機に瀕してゐる。王は、事實、生きてゐる。狩獵もすれば、政府の若干の樞機も握つては居る。しかし、ゼンダ城から救ひ上げられたその日以來、王樣は一日として焦立たしい病人で無かつた日はないのである。それは嘗て、ミハエル一味の惡人共があの狩獵小屋で捕へた時の、快活で愉悅に滿ちた王とは雲泥の相違であつた。その上に更に惡いことが起つた。時が經つにつれて王樣がラッセンダル氏に感じてゐた感謝と尊敬の念が丸で無くなつてしまつた。彼は、その捕虜時代に起つた出來事に對して益々考へ込むやうになつた。サブトは無遠慮に王樣に語るかも知れない、——ルドルフはこれもやつたし、この條例も設けたし、あの條例も設けた。かういふ政治もやつたし、あゝいふ政治もやつた、そして王としても、ルドルフの辿つた通りを辿られるより外に致し方はあるまい、などと、ラッセンダル氏の名前は時に彼の妃の脣を漏れることもあつた。だが彼女がラッセンダル氏のことを話す時には、古の英雄に就いて語るが如き口調だつた。自分の眼の屆かなかつた間、自

分の妻がどういふ生活を送つてゐたか——この眞相を王が推察した。などといふことは私には考へられない。それにも拘らず、ルドルフの名前がサブトから私の口から發せられるやうな場合、王は頗る不安な樣子を示した。若しそれが女王の口から出た時には、王は殆んど半狂亂の態になつた。私はルドルフの名が一寸響いたゞけで、王が早くも激情の虜となつて、その身を保ち得ないやうな所を幾度となく見た。

不安な嫉妬に驅られて、王は絕えず愛の證據を女王から求めることに努めた。そして多くの夫逸が誇らしげに言つてゐるやうに、或は、これは私の推察だが、彼等がその權利を體裁づけてゐるやうに彼女がその愛を與へない所に自分の心の不安があるのだ、といふことを、始終彼女に語つてゐた。そこで彼女は、憐れみと義務との心で、出來るだけよく努めた。しかし、人間であり、又一箇の女性である以上、時には彼女も躓かないわけには行かなかつた。さういふ時、ほんの一寸した肘鐵砲も、乃至は無意識にやつた冷淡さも、この病的な王の邪推によつて、途方もなく大きい侮辱に變化させられた、そして女王はその場をどう取りつくらふ術もなかつた。かうして眞實に結びつくことの決してないこの二人は、益々別れ〳〵に吹き流されて行つた。彼は、その病氣と疑惑との中で獨りぼつちだつた。彼女はその悲しみと回想との中で矢張り獨りぼつちだつた。二人の間にはこの斷崖をつなぐべき子供もなかつた。

かくて、三箇年といふもの、彼女は、寡婦の生活よりも果敢ない生活を送つて來た。三年經つて彼

女の健康は漸く損はれて來たかに見えた。その時、ほんのつまらぬ事が原因で、彼女が一人だけゐる處でさへも聞くに忍びないやうな面罵を、而も私やサブトが居る前で、王が彼女に投げつけたのであつた。サブトの小さな眼は怒りのためにキラリと光つた。「王の口を糊づけにしてもやりたい位なんだ」とサブトは唸つた。王の我儘は、サブトの忠節をさへぶち毀してしまつたほどのものであつた。

それに就てはこれ以上お話する氣はないが、私がラッセンダル氏に會ひに出發した一二日前の事であつた。今度は私はウインテンベルグで彼を探さうと思つた、といふのは、前年ドレスデンだつたからだし、それにウインテンベルグは狹い場所でもあり、探し出す機會も多いし、旁〻遙かに安全に思はれたからである。王と別れてから數時間の後自分の部屋に私を呼び入れた時の女王の樣子を私はよく記憶してゐる。彼女は卓の傍に立つて居り、卓の上には一つの箱が置かれてあつた。私はその中にあの赤い薔薇と信書とがはひつてゐることを知つた。ところが今日は何等の前置きもなしに、彼女は直ぐに私に打明けて來たのである。「あたしはあの人に書いて上げなければ。ねえ、フリッさん、どうぞは言つた。「あたしはもう我慢が出來ない、あの人に書いて上げなければ。ねえ、フリッさん、どうぞこれを間違ひなく屆けて來て頂きたいのよ。さうすればあの人、きつと御返事を下さるに違ひないわ。その御返事も、間違ひなく持つて來て欲しいのです。あゝ、フリッさん。あたし、自分が惡いといふことはよく知つてますの。でも、あたしは、飢ゑてるのです、飢ゑてるのです！　もうほんとにこれが最後の場合ですわ。だから、もう今度限り、これからは何にも送らないことにするつ

もりよ。たゞあたし、あの人に、さやうならだけは言はずにはゐられない、あたしの一生の間に、あの人のさやうならを聞かずにはゐられない。今度だけ、どうかフリッさん。あたしのためにお骨を折つて下さいね。」

涙が彼女の兩の頰を傳はり落ちた。その蒼白い色は、今や異常なる赤色に輝き變つた。彼女の眼は、歎願してゐる間も尙ほ燒きつくやうに私に注がれた。私は首をかしげて彼女の手に接吻した。

「全力をつくしてそれをお屆け致します。そして又、無事に御返事を持ち歸ることを誓ひます」と、私は言つた。

「それから、あの人の樣子も、どうか聞かせて下さいね。ようくあの人を觀察して、ね、フリッさん。御身體がいゝか、惡いかもようく見て。あの人の脣の微笑も、樂しい眼のまたゝきも、ね、フリッさん、きつと持つて來て下さいね。あなたがあたしのことをお話になる時には、あの人が——あの人がまだあたしを愛してゐるかどうかを。よく見て、ね。」突然彼女は言葉を切つた、そして涙に沈みながら、「でも、こんなことをあたしが言つたなんて、決してあの人には仰有らないで下さいね！　あたしがあの人の愛を疑つたなんて知つたら、あの人はきつと悲しまれますわ。いゝえ、あたし決して疑つてなんかゐやしません——決して。けれど、ね、あなたがあたしの事を仰有つた時、あの人がどんな樣子をするか——これだけは是非あたしに聞かせて下さいね。フリッさん。では、これが手紙ですから——」

手紙を懷から取出して接吻して、それから私に手渡した。續いて彼女は幾多の注意をつけ加へた——どうして私が彼女の手紙を持ちゆくべきか、その往復の道をどう取つたらいゝか、何等の危險もなしにこゝを走り拔けるにはどうすべきか、——これは、私の妻のヘルガが私を愛すること一通りでなかつたからである。

「きつと、あたしが思つた通りになるでせうよ、ね、フリッさん。」と、彼女は言つたが、その聲は今は微笑と涙とが半々に混り合つたものであつた。彼女は、彼女ほど愛することの出來る女性が、この世にあるとしも覺えぬ風情を見せてゐた。

私はいつもたゞ一人だけ從者を伴うことにしてゐたが、その從者も、毎年全く別な男を選んだ。誰も私がラッセンダル氏に會ふことは知らなかつた。ただ、王から休暇を貰ふ口實に、ほんの私用をこしらえてゐる位にしか推察できなかつた。今度は、スキス生れの若者を連れて行くことに決めた。彼はボウエルと言つて、數週間前に私に雇はれて來た男である。彼は一見、至極ぼんやりした、どこか拔けた所のあるやうな男だつたが、その代り正直なことは太陽のやうで、その上實に忠實だつた。彼は相當にいゝ紹介でやつて來たので、私は躊躇なく雇ひ入れることに決めた。その彼を今度の私の從者に選んだ重な理由は、彼が異國人であり、從つて私達が旅から歸つた場合、他の召使達と色々な噂話をする機會が比較的少なからう、と思つたからであつた。私は自分が優れて頭のいゝ人間であるなどとは決して思はないが、しかし、白狀すると、この

一見正直らしい若者が、どんなに私を馬鹿にしたか、思ひ出しても口惜しいのである。といふのは、ルバートは既に、一年前私がドレスデンでラッセンダル氏に會つたことを知つてゐた。ルバートのさぐりの眼は、ストレルソーを通ずるあらゆるものゝ上に鋭く注がれてゐた、でルバートはこの若者に莫大な賞を與へ、その扉ひ主から何事かを探り出す希望をこめて、私の處へ遣はしたのであつた。ウインテンベルグに彼を連れてゆくといふ私の決心は、思ふ壺に落ちたものではあつたらうが、しかしそれは殆んど考慮の外であつた。

休暇を貰ふために王の前に伺候した時、王様はストーヴの上に身をうづくまらせてゐた。寒い日ではなかつたが、彼の居間にたゞよふ濕つぽい寒さが、彼の骨の髓までも侵透してゐるかのやうに思はれた。彼は私の伺候をうるさがつた、そして私を旅立たせるやうになつた仕事に就て、根掘り葉掘り問ひ訊した。私は有らん限りの力を振つて彼の好奇心を誤魔化さうと努めたが、彼の不機嫌を宥めることはできなかつた。自分の近頃の癪を半ば恥ぢ、それを自分で正當化することに半ば心を使ひながら、しかも彼は焦立たしげに叫んだ——

「仕事だつて！　ウム、それや、どんな仕事だつて、私から暇を取る口實には充分にならうよ！　馬鹿馬鹿しい、私みたいに碌でもない臣下ばかりにかしづかれた王といふものが、どこにあるか、私はそれを聞きたいね！　何だつて君は私をゼンダ城から助け出すやうな危い眞似をしたんだ？　私を必要とする者が何處にゐる、死なうと生きやうと、私なんかどうでもいゝんぢやないか。」

何故かう言ふ風に言はれるのか、其の理由はちつとも分らなかつた。私は必ず、出來るだけの事をして歸りを急ぎますから、と答へるより外はなかつた。

「それではよろしい。」と王は言つた。「私は誰かに色んな世話を燒いて貰ひたいのだ。ルバートの惡者めが、どんな惡事を働らかないとも限らないからナ。また、予も自分一人では防ぎ切れもしない。予はルドルフ・ラッセンダルではないから喃。」

王様は哀愁と惡意のごつちやになつた心持ちで、こんな叱言を言はれるのである。終には私は口も利けなくなつて、彼方に行け、と言はれるのを待つのだつた。有難い事に、王様は私の旅の目的を詮索されもしなかつた。若しルドルフに逢ひに行くんだと言ふ事を、一と言でも漏らさうものなら、不可いと言はれる事は請け合ひだつた。

王様の御前を退いてから、私はゼンダ城司サプトに逢つた。サプトは私の使命をよく知つてゐた。私は彼の脇に腰かけて、今度持つて行く手紙の事など打ち明けて語つたけれど、彼の機嫌は良くはなかつた。其の日は、サプトも王様に辛く當られたと見え、ブリ〳〵してゐた。

「君がウインテンベルグに着く頃までに、我々一同はゼンダに行つてゐるだらう。大事の起らぬ中に、お互に殺し合ひでもしないと駄目だよ。明日、宮廷はゼンダへ引越す事になるんで、俺も王様の御供をするんだがね。」と、サプトは語りつゞけて一と休み、また口を開いた。「危險でもあると思つたら、手紙なんか破いちまへ。」

私はたゞ頷いた。

「他に手段がない場合は、君は一命を抛つんだね。」と、冷たく微笑みながら言つた。「こんな馬鹿げた手紙を出すなんて、女王さまも女王さまだ。同じ手紙を出すのなら、俺にでも持たしてやればいゝものを……」

女王のことを言ひ出したサブトの言葉に、私は耳を背けてゐた。が、最後の一句に對してかう答へた。

「いや、君は此處にゐた方がいゝ。僕にしても、手紙を失くすやうな事もあるまいけれど、萬一失くした場合には、君の手で、其の手紙が王様の手に入らないやうにして貰へるつてものだからね。」

「そりや言ふまでもない事さ。だが、此の俺が手紙のために生命がけになるなんて……。手紙なんてものは、一國の安危を賭けるやうな代物ぢやないんだぜ。」

「ところが不仕合せな事に、使者は生命がけで届けなければならないんだ。」

「まア、行つて來給へ。」と、サブトは唸るやうに言つた。「そしてラッセンダルに傳へて呉れ給へ、昔も隨分盡してもらつたが、今後も益々盡して貰ひたいと……ナ。それはさうと、彼奴、二度と逢へない女を思つて、一生をフイにするつもりなんだらうか？」

「それ以上仕方ないぢやないか。もう此處で盡すだけの事は盡したんだからね。」と私。

「盡した事は盡した。少くとも、王様を取り返してくれたからな。」

王様の話になると、思はず語氣が變つた。それも無理からぬ事ではあつた、と言ふのは、取り戻した王様がルリタニアにとつて、別に有難い方でなかつたからだ。我々の努力は悲しく酬いられた結果になつたからだ。サブトも人後に落ちぬ忠義を盡すとは言へ、王様をもつと人間らしくしたいと思つてゐたのだ。

長途の旅路の上るさに、其の門出を妻と二人の食膳に、水入らずに甘えてみたからとて、男らしくもないと笑ひ給ふな。私は樂しかるべき別れの晩餐に、妻ヘルガの從弟、アントン・フォン・ストルフジンが招かれて來た事を不快に思つた。アントンはストレルソーに行はれるゴシップの數々を述べたて、物知り顏に振舞ふのを、私は聞くともなしに聞いてゐた。すると偶々、聞き捨てられぬ一語を耳にしてハッとした。

「ヘンツオウのルパートが呼び戻されるつて噂が盛んで、クラブでは賭けまでしてゐる位ですよ。お心當りはありませんか？」

たとへ私がそんな事實を知つてゐたにせよ。アントンに左樣でござると言ふ必要はないのだ。が、かゝる事實の片鱗だにない事を、四角張つて知らないとも言ひにくかつた。

「私の知つてゐるのは、リッシェンハイム伯爵が一二日前、マーケル大佐にそんな事を仄めかしたと言ふ事だけです。」とアントンは語つた。「何故、伯爵が突然ストレルソーを立ち去つたんでせう？屹度ルパートに逢ひに行つたんです。それに違ひありませんよ。」

事實、私は何にも知つてゐなかつた。だからさう答へるより外はなかつた。

其の話はそれで片づいて、晩餐が濟むとアントンは歸つて行つた。リッシエンハイムの噂も心に掛らぬではなかつたが、私には私の大事な用事がある。凡てを忘れて、私はボウエルに荷物を送り出させ、時間を見計らつて馬車を玄關に出すやうにしろと吩咐けた。ヘルガは客去りし後の家中彼方此方と歩き廻つて、何くれとなく旅行中の手廻り品の世話を燒いてゐた。それから別れを告げにやつて來た。力めて平氣を裝つてはゐたが、隱した不安は色に出てゐた。何、心配はいらぬ、四五日で歸つて來るよと、私は妻に接吻した。ヘルガは私に身體をすり寄せて囁いた。

「ルドルフさんにお逢ひになりましたら、女王樣のお喜びになるやうな返事を聞いて來て下さいましね。女王樣の戀しがつていらつしやる方は、私と貴方の仲と違つて、添へる者とは違ひますからね。」

「いゝとも、色好い返事を聞いて來るとしよう。」と、私も答へた次第だつた。

私の持ち行く手紙に對して、ルドルフは必ずや返事を呉れるに違ひない。その返事を、私は大事に女王の許まで持ち歸らねばならないのだ。私はポケットに小箱と、女王の別れとを藏つて、愈々使命の旅路に就いたのである。

第二章　停車場

ラッセンダルとの會見所は、彼の英國出發前、手紙で充分念入りに打ち合せがしてあつた。十月十

五日の夜十一時に、ラッセンダルはゴールデン・ライオン・ホテルに來てゐる筈であつた。私は其の夜の八時から九時までの間にウインテンベルグに着いて、旅館に入つて、散歩でもしながら、約束の場所に、約束の時間に訪づれるつもりでゐた。そしたら、自分の使命を果し、彼の返事を受取つて、ゆつくり久し振りの、積る話を交へるのだ。さて夜が明ると朝早く、ルドルフは故國へ歸途に就き、私はストレルソーへの道を歸ると云ふ豫定。私はルドルフが斷じて約束を違へない事、そして私の豫定が順序よく運んで行く事に確信があつた。誤解や過失を避けるために、私は心を落ちつけて汽車に乘つた。小箱は內側のポケットに入れ、手紙は襄口に收めた。私は軍服を着けてゐなかつたが、ピストルは手放さなかつた。なにも危險を豫知したわけでもないが、自分は使命を果すべく、全力を擧げ、一命を賭さねばならぬと言ふ事は少しも忘れなかつた。

疲れ易い旅の夜は明けはなれた。朝になるとボウエルは二等の車室に入つて、私の座席の向側に腰始末したり、コーヒーを立て、出て行つた。八時頃に、汽車は或る驛に止つた。もう正午頃までは途中停車しない筈である。此の驛で見てゐると、ボウエルがやつて來て、小用を足してくれて、手鞄をかけてゐた。此の時不圖、リッシエンハイムの事が頭を掠めた。何故、あの男はルパートの招還などと言ふ、望みなき仕事に掛り合つてゐるんだらう？　そして又なんの用で、ストレルソーから立ち去つたんだらう……と言ふやうな事が頭に浮かんだ。が、寢ざめ勝ちな昨夜の疲れに、私は間もなく寢入つてしまつた。何の恐怖も、危險も覺えずに、私は一人で車室に眠つてゐた。突然汽車が停つたの

で目が覺めたが、見ると又ボウエルが入つて來た。そこでスープを一杯飲んで、私は電信室へ歩いて行つた。妻に電報を打つて置けば、妻の心が安まるばかりでない、女王の使命を無事に進めてゐる事が分ると思つたからだ。電信室に入らうとすると、其處からボウエルが出て來るのを見た。出會ひ頭にハッとした樣子だつたが、ボウエルは何喰はぬ顏で、ウィンテンベルグの宿屋に室の用意をしてくれと電報を打つてゐたところですと言つた。室の用意など、心配して貰ふまでもなく、出來てゐる筈なのに、と私は思つて、餘計な事をする、到着の時間が分つては困ると思つた。が、濟んだ事は仕方がないし、下手にボウエルを叱ると、旅を祕密なのかと疑はれる心配もある。で、たゞ頷いて其の場は通り拔けたのだつたが、今になつて考へると、ボウエルは宿屋へ電報を打つたばかりか、自分の陰謀の電報まで打つてゐたんだ、と言ふ事が分つて來る。

汽車はウインテンベルグに着く前に、もう一度停車つた。窓から外をながめてゐると、ボウエルは貨車のそばに立つてゐた。私を見るより駈け寄つて、なにか御入用のものはありませんかと訊いた。なんにもないと答へると、彼は立ち去りもやらず私に語りかけた。五月蠅いと思つて、私は自分の座席へ腰をおろし、心靜かに汽車の動き出すのを待つてゐた。汽車は尙ほ五分ばかり停車つてから出發した。

「これで一と安心！」と、私は葉卷を取出して喫はうとしたが、つい取り落してしまつたので、起ち上つて手を伸ばさうとした刹那、窓の外に私のとそつくりな鞄を肩にした、驛夫の姿に目をとめた。

私の鞄はボウエルが監督して貨車に積み込んである筈だ。何かの間違ひで持ち出されたのかも知れないが、其の鞄は私のとよく似てゐたと言ふだけで、果して私のか否やも判然しない。私は手の出しやうがなかつた。汽車はもう途中停車をせずにウインテンベルグへ直走した。

汽車は時間通りに目的地に着いた。私は車に坐つたまゝ、ボウエルがやつて來て戸を開き、鞄を渡して呉れるのを待つてゐた。が、ボウエルの來る樣子はない。仕方なしに自分で戸を開けて外に出た。乘客だつたらしい人が四五人、歩いたり驛前に待つてゐた馬車に乘つたりして姿を消して行く。私はボウエルと鞄とを探し廻つた。日は暮れて、なごやかに夕闇が迫つて來た。私は手鞄を持つて、重たい毛皮外套を着けてゐた。ボウエルの姿も鞄も見えない。五六分間立つてゐる中には車掌の姿も見えなくなつてゐたが、直ぐ傍に驛長が立つてゐた。私は驛長に近づいて、召使らしい者を見受けなかつたかと質してみたが分らぬとの答。荷札はボウエルに持たしてあつたけれども、到着した荷物の中に自分の鞄も入つてゐるかも知れないと、驛長に賴んで見せて貰つたが見つからない。驛長も小首を傾けて、召使と荷物は如何したんでせうと訝つた。

私は途方にくれた。考へればボウエルの仕種が腑に落ちなかつたけれど、自分の使命も大事であつた。私は自分の身體に觸つてみて、ピストルと小箱のある事を確かめた。驛長は何にも氣づかずに、天井から吊してあるガスランプの朦ろな光を見つめてゐた。

「もし召使が此處へ參りましたら……」と私が言ひかけると、驛長は私の言葉の終るを待ちもせず、

無雜作に言ひ放つた。

「今晩はお見えになりますまい。今のが終列車ですからね。」

私はそれでも、もし來たらと宿屋の宛名を驛長に言つておいた。時間の餘裕もないし、ラッセンダルを長く待たせたくもなかつた。ボウエルは如何したんだらう、と言ふ不安もあつたが、自分の使命も早く果たさねばならなかつた。兎や角思つてゐると、何時しかルゾウ・リッシエンハイム伯の事が心にかゝる。私よりも一二日前にストレルソーを出發した彼は、何か私に關係があるのではなからうか？

「兎に角、召使の方が見えましたら、さう言ひませう。」と、驛長は答へて四周を見廻した。目の屆く場所には一つの馬車もない。驛は恰度町の外のはうに當つてゐたから、歩いて行くとすれば、骨が折れるばかりでなく、時間も餘計にかゝる事になる。私は帽子を冠りながら驛長に向つて、

「何故、此處には少ししか馬車がゐないんです？」と訊いてみた。

「いつもは澤山ゐるんですが、一體、如何して今晩から出拂つてしまつたんでせう？」

驛長の返事は意外であつた。鞄の紛失した事と言ひ、馬車が一臺もゐない事と言ひ、この度の私の旅行は、可なり冒險なものになるかも知れない、と言ふ氣がした。

「貴方のお乘りになりました列車の着く前に、」と驛長は語りつゞけた。「緩行列車が着いたのです。緩行列車は平生滅と乘客が無いんですけれど、今晩は大勢……左樣、二十人、いや二十五人もありましたらうか、ドヤドヤと降りて參りました。私が一同の切符を受取つたのですが、揃ひも揃つて始終驛から乘つて來てゐるんです。そればかりならまだいゝんですけれど、一人一人馬車を誂へて、別々に乘つて行きましたが、叫ぶやら、笑ふやらして大騒ぎでしたよ。それでも一二臺は殘つてゐたんですが、今、此の列車が着くと直ぐ何處へか飛んで行つてしまつたんです。」

「そのお客さんは、どんな人たちです？」

「いろんな連中ですよ。大抵は見すぼらしい者が多かつたんです。」

氣のせゐか、變な事ばかりだ。私は急に胸騒ぎを覺えて、出來るなら驛の人を誰か道伴れにして行きたいと考へ始めた。だが、そんな女々しい考へは考へながら、こんな自分の風體を見たら、別に貴重品を持つてゐるらしくも見えないから、大丈夫だらうとも思ふのだつた。

「止むを得ません、」と答へて、私は重い外套の釦をかけ、ステッキと手鞄を手にしながらホテルへの道を尋ねた。驛長は、私を氣の毒に思つたのだらう、隨分丁寧に敎へてくれた。「此の道を眞直に行きますと、半哩ばかりボプラが兩側に竝んでゐます。その先から町になりますから、右側を見て行きますと最初の辻角に其のホテルがあるのです。」

私は感動に驛長に禮を述べて歩き始めた。灯のついた驛前を出てしまふと、四邊が眞暗になつてゐたのがはつきり感じられた。私は、ぼんやり見える道を、時々思ひがけない小石などに躓きながら、歩いて行つた。近所には燈火はなく、遠くに微かな光が、それも間隔を置いてチラホラしてゐた。私

は旅行中のいろんな事を思ひ出しながら足を動かした。ボウエルの顔や、言葉が妙に心にかゝつた。私は女王の手紙や小箱をしつかり押へながら、あゝ、こんな時サブトかルドルフが側にゐてくれたならと……と考へた。

少し進むうちに、聲を聞いたやうに思つた。忍び音に囁く聲を。つゞいて道端のポプラの蔭の暗がりに二三人の人の形が見えた。と思ふと私めがけて打突かつて來た。ひらりと體をかはして、私はとび退き、人家や燈光の明るい方角めがけて駈け出した。もうあと四分の一哩も走ればいゝのだ。三四十碼も走つたと思ふころ、私の後から走つて來る跫音を聞いた。あはや、と思ふ間もあらばこそ、私は眞逆樣に轉倒かへつてしまつた。私の行手に繩が張つてあつたのに違ひない。手探りにすると果してさうだつた。私が倒れ伏すや否や、ドヤ〳〵と周りから駈けつけた數人が、背中を踏みつける、頭を抑へつけて泥に擦りつける。忽ち手鞄を掻つ攫つてしまつた。すると又人の聲がして、

「仰向けにしてやれ！」

聲には確かに聞き覺えがあつた。アントン・フォン・ストロフジンの話の主、ルゾウ・リッシェンハイムの聲であつた。

一同は寄つて集つて、私の身體を仰向けにしようとした。其の機會を狙つて、私は身體を伸しながら跳び上つた。これには敵も辟易したと見えて、誰も掛つては來ない。ホッと一息してゐると、鐵砲玉のやうに勢よく私に跳びついた奴があつた。頭を私の頭に摺りつけて、後へ廻したまで私の咽喉

を強く締めつけ、再び地面に押し倒してしまつた。私は又もや手足の自由を奪はれたが、暗を透して見ると、此の男こそまがう方なきルバート・ヘンツオウであつた。彼は微笑んでゐたが、押へつけられた私に顏を見られたと感づくや、勝ち誇つて、會心の笑みをうかべてゐた。またもやリッシェンハイムの聲がした。

「袋は何處にあるんだらう？　例の品物は袋に入つてゐるかも知れない。」

「馬鹿！　肌につけてゐるに違ひないんだ。」とルバートが叫んだ。「俺が檢査するから、しつかり押へつけてくれ。」

兩方から、私の手は抑へつけられてしまつた。ルバートは私の咽喉を押へた左手を離しもやらず、右手だけで私の身體を觸つて探つた。ルバートは私のピストルを見つけて、チエッと言ひながら取出してリッシエンハイムに手渡しした。次いで小箱を見出した。彼は眼を見ひらいた。私が息苦しくなる程強く、膝を私の胸の上について、咽喉の手を緩めて小箱を開けてみた。

「燈を持て！」と叫ぶ。一人の男が角燈を持つて來て照らすと、ルバートは箱の中を覗いたが、忽ち哄笑してポケットの中に納めてしまつた。

「早く〳〵！」とリッシエンハイムが急き立てた。「望みの物は手に入つたんだから、行かうよ。人が來るといけないぜ。」

微かな氣安さが私には感じられた。此のまゝ濟めば、箱だけを失へば濟む事だ。手紙さへ失くさな

ければいゝ、ルバートは箱の中を見て引上げてくれゝば手紙だけは助かると言ふものだ。が、彼はリッシエンハイムの言葉には耳を藉さずに、完全に檢査をつゞけた。

「もつと檢査するんだー」とルバートの答。この一語で私の希望は消えた。

到頭、手紙は發見された。彼は私の蓋口を捲き上げ、角燈を近づけて、中味を調べ始めた。私は今でも、青白い燈火に照らされたルバートの鋭い眼、歪んだ脣、そして手紙を開いた時の歡喜に滿ちた眼の輝きを忘れない。彼は冷靜に、熱心に手紙を讀みはじめた。リッシエンハイムの急き立てるのなどは物ともせずに、安樂椅子に凭れて讀み耽つてゐるやうな態度で、女王の文言を讀み終へてしまうと、ルバートの脣はニッコリして、忽ち釣り上つた。

リッシエンハイムはルバートの肩に手をかけた。

「早くしよう、ルバートー」と言ふ聲は、少し焦つてゐた。

「勝手にしろ、こんなに面白い手紙に接するのは久し振りだ。」と、ルバートは答へた。それから噴き出して、叫ぶやうな聲でつゞけた。「これ見給へー」と、手紙を指しながら言ふ。私は激怒して、新らしい力を盛り返した。ルバートは手紙に夢中になつて、私を組み敷いた膝の力を抜き、傍らを振り返つた。此の隙！　私は全力を振つて右手を振り廻して、女王の手紙を摑みルバートを突き退けた。滅茶々々に片手を振り放した。ルバートも立ち上る。私も立ち上つて、顏と顏とを見合せたが、手紙は又もや奪ひ取られた。ルバートめざして跳びかゝらうとすると、ルバートは角

燈持ちの男を小脇にとつて體を變はす。角燈は地上に落ちてしまつた。

「ステッキを貸してくれ。」とルバートが叫んだ。「何處にあるんだ……？　それだ。」

するとリッシエンハイムが傍から口を出した。

「ルバート、此奴を殺すんぢやないぞー」

ルバートはフンと鼻先であしらつたゞけ。私が身を退く暇もあらばこそ、ルバートの振り上げたステッキの一擊に、發止とばかり額を打たれてしまつた。それから後の事は覺えない。頭の痛みを堪へながら倒れてゐると、周りに人が集つて何か話し合つてゐた事ばかりがボンヤリしてゐる。

一體、何の話をしてゐたのか判りもしなかつたが、また別に聞かうとも思つてはゐなかつた。何か私の事を話し合つてゐた樣子だ。ルバートが笑ふ聲も聞えた。

突然、話し聲が止んだ。間もなく一同は立ち去つてしまつた。後は靜寂で、死んだやう。

暫くすると又人の聲がしはじめた。「やらう！」と、高らかな聲が言ふと、別な方が、「いやゝ〳〵」と答へる。又稍々あつて「何だい？」と言ふ聲。亂れる跫音がする、人の聲に混つてピストルの音、罵詈の聲も聞えた。私は疲れ切つて了つて、起き上つて樣子を見る力もなかつた。早く靜かになつてくれゝばいゝと思つてゐた。ところが間もなく靜かになつた。私は眼をつぶつた。痛みも酷くは感じない。眠れさうになつて來た。

人間と言ふものは時々過去の事を振り返つて、運命の作用した妙機を思ひ出す事があるものであ

る。そして、あの時はあゝしなかつたら好かつたとか、かうすれば好かつた、などゝ後智慧を働らかす。私は今でも、夜中など眼ざめては、かうしたらルバートを容易に破れたらうに……などと考へるのである。あゝ、恨みは深いボウエルの仕業よ！　彼は私を愚弄したのだ。そしてルバート・ヘンツオウは女王の手紙を奪ひ、私を泥土に委して立ち去つたのであつた。

第三章　再びゼンダへ

一體人間は、自分だけは運がいゝと自惚易いものだが、私もそんな自惚から、まさかルバート・ヘンツオウの呪詛が、自分にまで及ばうとは夢にも考へてゐなかつた。果して、今や自分は彼のために、散々な目に會はされてしまつた。

さて、私を散々な目に逢はせてゐるところへ、ウインテンベルグに住んでゐる、正直な荷馬車引が、車の上に三四人の丈夫な子供達を載せて通りかゝつた。この騒ぎを見て馬車から飛び下りるなり、惡黨等へ向つて行つた。惡黨の中の一人は、飽くまで踏み止つて、馬車引父子と闘はうとしたが、他の仲間になだめられて、停車場の方へ逃げ延びてしまつた。そつちの方は人家がないだけ、惡黨等には安全だつたのだ。馬車引父子は少し追ひ縋けてくれたが、その間二發ばかりピストルの音がしたので、彼等も長追ひはせず、私の氣絶してゐるところへ戻つて來た。そして、惡黨が溫和しく退いてくれたので、太したことにならないのを喜んでくれた。彼等は氣附藥に、酒を飲ましてくれたの

で、やつと私は眼を開くことが出來た。馬車引父子が、何處か病院へ私を運ばうといふのを斥けて、頭を落つけ、自分の居處を思ひ浮かべるなり、私をゴールデン・ライオンへ伴れて行つてくれ！」

「ゴールデン・ライオンだ！　二十クラウンやるから、

私の氣が確かで、何處へ行かうとしてゐるのか知ると、一人は早速私の鞄を持ち、他の者は私を馬車に引き上げて、一緒にルドルフ・ラッセンダルの宿つてゐるゴールデン・ライオンへ向つた。私は一刻も早くルドルフの處へ行つて、女王フラビアの手紙を盜まれた次第を言はねばならぬと思つた。

ルドルフはもうホテルに來てゐて、玄關口で私を待ち遠しがつてゐた。馬車の中から、ランプに照された彼の長身瀟洒な姿と紅い頭髮を見つけた時、私は迷子が母を發見た時のやうに喜んだ。そして、馬車の上から彼の方へ手を差し伸べながら、「手紙をなくした。」と、呟いた。

その言葉にビックリして飛んで來た彼は、急いで馬車引の方へ振り向いて言つた。

「これは僕の親友だが、話があるから、このまゝ僕へ貸してくれ。君には後で充分禮をするから。」

馬車から下り立つた私を、彼は抱きかゝへるやうにして、內へ伴れ込んだ。玄關には人が一人二人ゐたやうだつたが、ラッセンダルは見向きもせず、急いで私を居間へ導いた。

彼は微笑こそしてゐたが、その眼には流石一抹の不安を宿してゐた。

「僕は奪られてしまつたんだよ。」と、面目なさそうに彼を見上げながら、また先刻の言葉を繰り返

した。

「仕方がないさ。」と、彼は頷きながら言つた。

「どうだ、話は少し休んでからにするかい。それとも今言へさうか？」

「あゝ、今、少しブランデーをやつてから。」と、私は答へた。

ルドルフは、小量のブランデーを、可成水で薄めて呉れた。それを飲んで、簡單に要領を話した。急き込んではゐたが、十分私の言ふ意味はルドルフに通じた。彼は靜かに聞いてゐたが、例の手紙の話になると、初めてその顏色を換へた。

「手紙もか？」と、彼は言つた。不安と、その手紙の中にはどんな喜びが書いてあつただらうといふ期待とが、ごつちやになつて顏に出て來た。

「あゝ、手紙も奪られたんだ。女王から君へ托された手紙なんだが、僕はそれを薔薇の小箱と一緒に大切にして持つて來たのだ。あゝ、一體どうしたものだらう！　ルバート奴、手紙まで奪りやあがつたんだ。」

私にはこれだけいふのも精一杯だつた。先刻の一撃が存外自分を弱らせて、元氣をなくしてゐた。

ルドルフは、近寄つて私を慰めるやうに、力を籠めて握手した。私もまた氣を取直して、彼を見つめた。彼は輪郭の整つた下顎を撫でながら、思案顏に突立つてゐた。

私はその姿を見ると、まだ自分が彼と一緒にストレルソーか、ターレンハイムにゐた頃に返つたやうな、賴母しさを覺えずにはゐられなかつた。事實、彼はこの前逢つた時と、ちつとも變つてゐなかつた。いや、頭に少し胡麻鹽の斑が出たのを除くと、ストレルソーで王樣になつてゐた當時と、ちつとも變つてはゐなかつた。

私の頭は酷く痛んで來た。ラッセンダルがベルを二度ばかり鳴らすと、身の小さい痩せぎすな中年の男が入つて來た。

「おい、ゼームス。」と、ルドルフはその男に言つた。「この方が酷く傷を受けてゐるから、見てやつてお呉れ。」

室を出て行つたゼームスは、暫くして水や鹽やタオルなどをもつて戻つて來た。そして、器用に傷を洗滌したり、手當をしたりしてくれた。

「頭をやられてゐないかい。ゼームス？」と、しばらくして、ルドルフが訊ねた。

「やられてをります。」とゼームスは器具を片附けながら言つた。

「用が濟んだら賴信紙を持つて來るやうに。」

ゼームスは、また室を出て行つたが、すぐそれを持つて來た。

「用があればベルをならすから、彼方へ退つてよろしい。」と、ルドルフは言つた。そして、私を顧みて、

「フリッ、少しはよささうかね？」

「あゝ。」と、私は答へた。

「僕には、彼奴等のからくりが解るよ。」と、彼は言つた。「ルバートか、リッシエンハイムかが、あの手紙を王様に見せようといふのだ。」

私はそれを聞いて、飛び上る程驚いた。

「そんなことをされては大變だ！」と、私は叫んだ。そして、まるで頭の中に燒火箸でも突き差されたやうに、また椅子の中にどつかと崩れた。

「大丈夫だよ。そんな事させて置くものか。」と、ルドルフは、につこりして私の手を握つた。「彼奴等は知つての通り郵便を信用してゐない。兎も角、誰かそれを持つてゆくに違ひない。問題は果して誰が持つてゆくかだよ。」と言つて私を見た。

私は自分の下手から恐しい結果が來ると思ふと、一刻もぢつとしてをられなくて、また立上らうとした。が、ルドルフは、「いかん、いかん、靜かにしてゐたまへ。」といつて、無理に再び私を椅子へ落着かせた。そして、彼はテーブルに向つて、頼信紙を取り上げた。

「君とサブトの間には、暗號があるだらうね。」と彼は訊いた。

「あゝ、あるよ。何か手紙でもあるなら、暗號に書き換へよう。」

「手紙つて、これだけだよ。（書類紛失す。拜謁を許すな。拜謁希望者名電知らせ）餘りに明瞭書くのを避けたんだ。一體大概の暗號は、誰にも嗅ぎつけられる恐れがあるんでね。」

「だが、僕達のはそんなものぢやないよ。」と、私は言つた。

「でも、これで解るだらう？」

あゝ、サブトには解るよ。」

私は苦しさを堪へて、それを暗號に書き換へた。

またベルが鳴らされて、すぐゼームスが現れた。

「これを打つてくれ。」とルドルフは言つた。

「あの、郵便局はもう締切つたかも知れませんが。」

「おい、おい、そこを賴むんだ。」

「へい、畏りました。然し、郵便局を起すには一時間位かゝりますが。」

「そこを三十分位で叩き起せ。金はあるか？」

「はい、ございます。」

「これでまあいゝ。」と、ルドルフは言つた。そして私に、「君は寢るがいゝよ。」

それに何と答へたか忘れたが、私はまた疲勞を感じて、彼の床に這入つた。

朝の八時に、ゼームスが私を起しに來た。そして、三十分位すればホテルの醫者が來るが、その前に一寸ルドルフが逢ひたいといふことを傳へた。私は、すぐルドルフに來てくれるやうに言つた。

ルドルフは、相變らず冷靜な態度で室に入つて來た。酒飲みが一杯の酒で元氣づくやうに、ルドル

フにとつては、危險や冒險が強壯劑だつた。平安無爲の日の無性さは完全に消え去つて、彼の彼たる風格が今確然と表はれて來たのだ。否、以前にも增して立派な態度だつた。

「ね、フリッ。」と、彼は言つた。「サブトから返電が來たよ。サブトも、ゼンダの郵便局を叩き起して打つて寄こしたと見えるんだ。ところで、一體どんなことがあると思ふ？　リッシェンハイムの奴は、疾うの昔、ストレルソーを立つ前に、王樣に拜謁してゐるんだよ。」

私は愕然して、床の上に起き上つた。

「驚いたらう？」と、彼は話を續けた。「奴は月曜日に發つたんだ。今日は水曜日だらう。所が、王樣は、先週の金曜日の午後四時に、彼奴にお會ひになつたのだ。さうだとすれば——」

「前から目企んであたんだな。」と、私は叫んだ。「さうすると、手紙を持つてゆくのは、確かにリッシェンハイムだ。」

「ルパートの仕業から考へると、その寫しだらうと思ふ。全く、うまく仕組んだものだ。かうなつたら、奴等を一網打盡に引つ捕へずには置けない。だが、奴等は今何の邊まで行つてゐるかな？」

それは自分にも言へなかつた。然し、私もルドルフ同樣、ルパートが豫定通りに惡計を進めてゐることを疑はなかつた。

「まあ、それはさうと、」と、彼ははなしをすゝめた。「サブトに電報を打つて、十二時間だけ、リッシェンハイムを王樣に會せないやうにしよう。それが駄目だつたら、王樣をゼンダ以外へ行幸させるのだ。」

「だが、遲いと早いの差はあつても、いづれ彼奴は拜謁するぢやないか。」と、私が言つた。

「遲いと早い——同じぢやないよ。」と、ルドルフは叫んだ。彼はベッドへ腰を下ろして、急き込んだ斷定的な口調で語りつゞける。

「君は一二日休養し給へ。そしてサブトへ私の手紙を例の暗號でやつて貰ひたい。それから、何でも事件は悉く、君へ知らせるやうに言つてやりたまへ。體が恢復し次第、ストレルソーに戻つて、早速歸つたことをサブトに報告したまへ。それから、何でも一つ君に働いて貰ふのだ。」

「そして、君はどうするつもりだ？」と、私は尋ねた。

「ゼンダへ行くんだ。」

「ゼンダへ？」

「さうさ。」と、ルドルフは言つた。「ね、フリッ、僕はまたゼンダへ行くのだ。今に、ゼンダへ行く時が來ると思つてゐたが、どうだ、それが來たぢやないか。」

「だが、行つてどうしようといふのだ？」

「リッシェンハイムを引つ捕へに行くのさ。若し、途中で追ひつけずに彼奴が先にストレルソーへ着いたら、私の着く迄サブトが王樣への拜謁を止めておくのだ。僕が間に合つたら、彼奴なんぞ金輪際王樣に逢はせるものか。」彼は突然吹き出して笑つたが、「ね、僕はもう王樣に肯てゐないとでも言ふ

のかい？　もう王様に化ける資格はないのかな。で、僕がうまく間に合へば、リッシェハイムの奴は早速王様に拝謁が叶ふ譯だ。この王様だつて、彼奴の目には充分立派に見えるよ。そこで、この王様が彼奴の寫しをまんまと捲き上げる譯だ。それで、望み通りリッシェンハイムはゼンダ城でルドルフ國王に逢へる譯さ。」

彼はまた葉巻に火を點けながら、話を進めた。

「敵は二人――ルパートとリ　シェンハイムだ。それに、君はこゝ一二日動けさうもない。さうとしたら、こつちだつて二人ゐないと危ぶないぢやないか。リッシェンハイムが先陣をする。そして失敗つたら、後詰めのルパートが、王様の前へ暴れ出して來ようといふ寸法だ。只の五分でもルパートが王様に會つたら、萬事休矣だ。そこで、僕がリッシェンハイムを捕へるまで、サプトがルパートを牽制する必要がある。君はストレルソーへ歸つたら、すぐサプトに居處を知らせるのだよ。」

「だが、萬一君が暴露れたら――？」

「それでも、女王の手紙が暴露れるよりは結構さ。」彼は私の腕を摑んで、靜かに言つた。「然し、若し手紙が王様の手へ入つたら、最後の手段をとらねばならない。」

私は彼の言ふ最後の手段なるものが、何であるか解せなかつた。

「僕は、ゼームスを置いて行かう。」と、ルドルフが言つた。「彼は役にも立つし、絶對的の信用が置ける人間だ。他の者どもや不安な音信などは、皆あれにさせるがいゝ。それに鐵砲も上手だぜ。」と彼

はさう言つて立ち上がつた。

私はいろ〳〵と思ひを馳せた。ルパートは一體何處に潛んでゐるのだらう。もしリッシェンハイムが失敗したらどんな善後策を講ずるつもりだらう？　そんな事は少しも分らなかつたが、今までのルパートの行動は手に取るやうに想像することが出來た。卽ちボウエルは單に彼の手先に過ぎなかつたのだ。そして、不賴漢共は、各々二枚の金貨に釣られて、只惡戲のつもりで、停車場の馬車を皆占領してしまつたのだ。さうすれば、私は從者と荷物を空しく待つ間に、最終の乘物にも遲れるだらうと　ルパートは考へたに違ひない。萬一、乘物に乘つたにしても私を襲ふつもりに變りはなかつたらう。また私が、無事に荷を持つて目的地に着いた場合には、策戰を換へて、ルドルフを襲ひ、飽くまで戀路の邪魔をする計畫だつたに違ひない。

さうした計畫を遂行するには、飽くまで大膽に巧妙にやること、可成の資源が必要な事は解り切つたことであるが、それとてもルパートの大膽と、從弟のリッシェンハイム伯爵の財力を以てすれば何でもなかつたのだ。

そんなことを考へ耽つてゐるところへ、醫者が入つて來た。

「貴方は二日間、絶對安靜になさいまし。」と、醫者は言つた。「その後なら、全く安心して御旅行出來ますがね。」

彼はまた來て診るといふので、私は禮を言つて、謝禮はどうしたものかなアと獨言ちた。

「いや〳〵、それはもう濟んでをります。」と醫者は言つた。「御友人のスミッド氏から頂戴してありますから、御懸念ないやう――」

醫者が出て行くと、入れ交りに、友人スミッド氏事、ルドルフ・ラッセンダルが入つて來た。

「さあ、そろ〳〵行くとしよう。」と、ルドルフは言つた。

「何處へ？」

「何處つて、そら、何時か君やサブトと別れた、あの寂しい停車場へ――　だが一體、ルバートの奴は今何處にゐるんだらう？」

「それが解ればなア！」

「さう遠くでもないと思ふが！」

「武器の用意はいゝか？」

「六連發さ。心配御無用！　くれ〴〵も言つて置くが、君は歸つたら早速サブトへ知らせるのだよ。」

「解つた。歸つたら早速僕も働くぞ。」

「勿論さ。」

「ところで、君は、あの停車場から何處へ行くのだ？」

「センダへ！　森を突つ切つて――」と、彼は答へた。「僕は明晩九時までには、あの驛に着くだらう。そしてリッシェンハイムが向うに着いて、まだ拜謁してゐなかつたら此方のものだ。」

「だが、センダへ着いても、うまくサブトと落ち會へるかナ？」

「それは、その時の運次第だ。」

「では、しつかり賴むよ。」

「フリッ、大丈夫だ。」

二人は沈默してしばし、手を握り合つた。彼は上から希望に輝く目を、私は下から嬉ふ目を見あはせて。

「眞逆重ねて女王に逢へようとは思はなかつた。」と、ルドルフは言つた。「だが、フリッ、今度は希望が叶ひさうだ。當年の美丈夫がかうも變つたところを見せたら、――きつと、幻滅の悲哀だね。」

ルドルフも笑ひ、私も笑つた。彼はまた私の手を取つた。彼は其の快活さと自信とを私にも感じさせようとしたのだが、一沫の不安は私から消え去らなかつた。彼には、永い間の憧憬または希望が思ひがけなく充たされて、危險もなければ、絶望も消え去つたのだ。

「何物より尊い女王から手紙が來たのだ。僕は逢へずに死ぬ身の上かと思つてゐた。その手紙を取り返すために死ぬのなら、逢へずに死んでも憾みはない。」

彼はもう一度私の手を握つた。そこへゼームスが入つて來た。

「馬車の用意が出來ました。」

「ゼームス、伯爵を賴むよ。伯爵の命令がない限り、側を離れてはいけないぞ。」

「畏まりました。」
私は床に半身を起して、「祝杯だ！」と叫びながら、ゼームスが運んだレモン水を一口に飲んだ。
かくて彼は其の使命を果すべく、且つは、手紙を奪還して女王の玉顔を拝すべく、再びゼンダへ出かけて行つた。一度び去りしゼンダの都へ！

第四章　城濠の波紋

十月十六日、木曜日の晩から、ゼンダ城司のサブトは、甚だ不機嫌になつてゐた。それ以來相變らずその不機嫌さを續けてゐた。彼は兼ねてから、年に一度のルドルフと女王との愛の交歓によつて、宮廷の平和の破ぶれんことを恐れ、且つフリッが毎年ルドルフに會ひに行く事を苦々しく思つてゐた。二人の間の手紙などは、全く無用の戯れ言で、不幸の源であるとさへ思つてゐた。ところが遂に、その不幸が來たのだ。彼がウィンテンベルグから受け取つた短かい電報は、どうやらそれを彼に覺らせた。その電報には、誰が命じたのか知らないが、彼にリッシエンハイムの謁見を延ばし、または王様をゼンダ以外の地に移せ、とあつた。どうしてそんなことをせねばならぬか、その理由は少しも明示されてなかつた。だが、彼もリッシエンハイムがルパートの傀儡であつて、ウィンテンベルグに起つた事件を王様の耳に入れに來るのだと覺つた。電報に書いてある仕事は簡單だが、王様は、リッシエンハイムの來るのを待つていらつしやるのだ。謁見を止めることなど出來やしないと、サブトは獨り言を言つた位だ。彼は萬策盡きて、森に大きな野猪が出さうだから、明日お出懸けなさるようにと、王様に語つた。

「リッシエンハイムに會へるやうに歸るのなら……」と、王様は仰せられた。
「夕刻までに御還幸遊ばされるとよろしいと存じますが——」と、サブトは言つた。
「それでは疲れて、彼とゆつくり話も出來まい。」
「如何でございませう？　狩小屋へ御一泊なさいましては——」
「予は一刻も早く會ひたいのぢや。」
かういつた王様は、もう病人の抱き易い疑惑を起して、サブトを見てゐた。
「彼に謁見を許しては不可んのか？」と、反問して來た。
「いや、折角の大猪が殘念でございますので——」
それを聞いて、王様は怒つてしまつた。
「猪が何だ！　それより、伯爵と話し合ひたいのぢや。」
その時、召使が電報を持つて來た。サブトはそれを受け取つて、そのまゝポケットに入れた。
「讀んで見い。」と、王様が言はれた。もう王様は寢所に入らうとしてゐた。時刻は十時だつた。
「お耳に入れるには及びませぬ。」と、多分ウィンテンベルグからではあるまいかと、サブトは案じ

ながら答へた。

「讀め！　リッシエンハイムから來たのかも知れん。」

サブトは讀むより他に途はなかつた。若し王樣の耳を憚るやうな電文であつたら、如何しようかと考へて、永いこと逡巡してゐた。

「早く讀め、早く！」王樣は氣をいらだつて促した。

サブトは封を切つた。彼の顏には安堵と困却が混亂した。

「如何にも御賢察の通りで恐縮いたします。リッシエンハイムは、明朝八時參內致す由でございます。」と讀んだ。

「大佐！」と、王樣は喜んで叫ばれた。

「九時に食事をともにして、用談の濟んだ後で、野猪を射ちに行かう。これならその方も滿足であらう？」

「はッ！」と言つて、サブトは口をつぐんだ。

王樣は欠伸をしながら座を立つて、サブトに寢めと言つて出て行かれた。

だが、サブトはおいそれと屈服するやうな人間ではなかつた。まだ謁見を妨げる途はある。詭計を用ひるか、暴力によるかである。

「何とか方法はないかなア。」とサブトは呟きながら、椅子から立つて窓へ寄つた。それは考へ疲れた人間が、新しい考へを探すために、新鮮な空氣を求めるのと同じ事であつた。彼は今自分の室にゐた。その室は、釣橋の右手寄り濠の城に直面してゐる新しい離宮の中にあつた。嘗つてはミハエルの室だつたところで、王樣が監禁された牢獄の土管の眞向ひになつてゐた。今は平和な日が續いてゐるので、釣橋は夜も架け渡されてゐた。その夜は晴れた良い晩だつた。靜かな濠の面は、月光が雲の去來する度に光つてゐた。サブトは窓際に立つて、指で閾をコツ〳〵打ちながら外を眺めてゐた。そこには新鮮な空氣が漲つてゐた。

突然サブトは窓から首を伸ばして濠を覗つた。そこには大きな波紋が動いてゐた。サブトはヂツと波紋の消えるまで眺めてゐた。すると、人が靜かに水に入るやうな幽かな音がした。間もなく目の下にヌツと男の頭が現れた。

「サブトー！」と、低い明瞭な聲。

老大佐は驚いて、濠の中に落ち込むやうに身體を伸ばして覗つた。

「早く——向う岸へ來てくれ。解つたか。」と、同じ聲が言つた。そして、靜かな抜き手を切つて、早くも濠を橫切るや、釣橋と城壁が造る三角形の暗闇に消え失せた。サブトは茫然とそれを見送つた。

聲の主が不審でならなかつた。

兎に角、彼は早速室から外へ出た。出るより早く、彼は、歩哨士官として巡廻中の若いベルネンスタインに出會つた。彼はサブト等と共に王樣をミハエルの手から救ひ出す時働いた人間だ。彼は今、

近衛胸甲騎兵中尉になつてゐた。

彼はサブトの樣子を見て驚いて、低い聲で叫んだ。

「何か事件ですか？」

「いや、城内は無事だ。巡歩線を廻つてそこにゐてくれ。」と、言つたが、またすぐ、

「いや〳〵、こゝにゐろ。おい、王樣のお室へ行く戸口に立つて、誰もとほしちやいかん。解つたか？」

「はいッ。」

「そして、何が聞えても、探し廻るんぢやないぞ。」

「承知しました。」と、彼は肩をすくめて答へ、劍を拔いて戸口に立つた。

サブトは駈け出した。釣橋へ行く門を開いて、飛ぶやうに渡つた。そして一方の壁へ近寄つて、石段を下りた。彼はそこに自分よりも大きなスラリとした男を見つけた。突然腕が捉へられた。それは濡れた下着のまゝの、ルドルフ・ラッセンダルだつた。

「君だつたのか？」と、囁く。

「あゝ。」と、ルドルフは言つた。「僕は向う側からこゝへ游いで來たのだ。實は石を投げたんだが君が氣づかないので、聲を立てる譯にも行かず、仕方なしに游いで行つたのさ。一寸ヅボンをはくから待つてくれ給へ。濡らしたくないので上着は一束に纏めたのだ。いゝかい——滑るよ。」

「一體何の用でこゝへ來たんだ。」と、サブトは言つた。

「女王のためだよ。時にリッシエンハイムは何時來るんだい？」

「明朝八時だ。」

「占めた、間に合つた！　が存外早いな。そして王樣は？」

「彼奴に拜謁を許すつもりだぜ。」

二人はしばし押し默つてゐた。ルドルフはシャツを頭から被ぶつてから、

「チャケツと上衣をくれ。」と、言つた。

「どうも、下が濕つぽいな。」

「すぐ乾くよ。」と、サブトはニヤリ笑つた。「動いちや駄目だよ。」

「帽子がないね？　探してくれよ。サブト。」

「あゝ、そうれ——」

「今度は靴だ。あゝこれでいゝ。」さういつた彼は、急き込んで尋ねた。「王樣は直接、リッシエンハイムに會つて、お話しになつたことがあるのか？」

「いや、皆僕の手を經てだ。」

「それが何故彼奴に會ひたがつていらつしやるんだらう？」

「犬を橇引に仕込む方法を聞くんださうだ。」

「冗談ぢやない。」
「いや全くだ。」
「さうか。それはさうと、王様は今髯を生やしていらつしやるかい？」
「生やしてゐる。」
「ぢやア、髯のないこの王様を見たら、さぞ間誤突くだらうナ。それはさうと、何處か話をする場所はないか？」
「一體君はどんな用事で、こゝへやつて來たんだ？」
「リッシエンハイムに逢ふためだよ。」
「逢ふ？」
「さうだ。おいサブト、彼奴は女王の手紙の寫しを手に入れてゐるのだ。」
それを聞いてサブトは、脣を歪めた。
「だから、兼ねてから言はぬことぢやない。」と、彼はそれ見ろと、言はぬばかりの調子で言つた。彼に言はせれば、そんなことになるのは、解り切つてゐたのだ。
「何處へ僕を伴れてゆくのだ？」と、ルドルフが訊く。
「どの室だつて、大丈夫だ。」と、サブトは言つた。「こゝでは、何でも俺の自由になるのだ。室外にゐろと命ずれば、誰一人室に入る者はないよ。」

「王様でもかい？」
「王様はもう寢んでゐる。では、こつちへ來い。」と言つて、サブトの腕を捉へた。
けた。
「周圍には誰もゐないのか？」と、ルドルフは、サブトの腕を捉へた。
「ベルネンスタインだけだ。だが、俺達を振り向きもしまい。」
「ぢや、サブト大佐の訓練は、行き屆いてゐるネ？」
「はい。近來は全く好成績でございまする。陛下——まあ、かう言つたところだ。」と、彼は嚴れた。
橋を渡つて、二人は離宮へ入つた。その入口のところにゐるのは、ベルネンスタインだけだつた。
「この中へ入るのだ。」と、サブトはやがて一つの部室の扉に手をかけて、低く言つた。
「これで一安心だ。」と、ルドルフは答へた。その時ベルネンスタインの手が動いたが、顏は依然正面を向いてゐた。その彼の態度は、ゼンダ城の軍律の嚴しさを示すものだつた。しかし、サブトが半分室に入りかけて、その後からすぐルドルフも入らうとした時、ベルネンスタインの番をしてゐた戸が、音もなく急に開いた。その時ベルネンスタインの劍は、一寸の間、留守になつてゐた。邪魔が入つたと知つたサブトとルドルフは、びつくりした。ベルネンスタインは依然正面を向いたまゝだつたが、劍を足許に取り落してしまつた。見ると戸口に立つたのは白衣を纏うた女王フラビアである。彼女もそこにルドルフ・ラッセンダルを見て、顏色を換へた。暫し四人はそのまゝそこに、佇立してゐ

た。やがて、ルドルフがサブトを押しのけて、女王の前に膝まづくなり、その手を取つて接吻した。
然し、それも理由が解つて見れば、別に不思議なことではなかつた。女王はその時、サブトを探して、多分此處だらうと思つて來たのだ。彼女はもう三回もサブトに、ウインテンベルグの事情を知りたさに寢室を脫け出して、こゝへ來たのだ。そして思ひがけなくも、まのあたりルドルフを發見して喜んだ。それは最早憧憬の夢でも幻でもなかつた。彼女は手に彼の生きた膚を感じたのだつた。
サブトは直ぐ室に入れと、二人を手招いた。二人は言はれるまゝに、室に入つた。
「誰も室に入れるな。また誰にも語つてはいけないぞ。」と、サブトは室に入る時、室外のベルネンスタインに囁いた。
女王が來た時は、十一時だつた。やがて、城の大時計は十二時を報ずると、また戸が開いて、サブトが出て來た。彼は短銃を握つてゐた。彼は靜かに背後の戸を閉めて、すぐ低い熱心な聲で早口にベルネンスタインに話した。話は八九分續いた。それからサブトは一寸話を切つてから、訊ねた。
「解つたか？」
「え、だが不思議ですね。」と、青年士官は、深く息を吸ひ込みながら言つた。
「ほう！」と、サブトは言つた。「何も不思議ぢやないよ。早く云へば普通のことさ。」
「大佐殿、私も女王のためには、死も辭しません。」と、ベルネンスタインは、檢閲でも受けてゐるかのやう、直立不動の姿で答へた。

「よし。それでは聞いてくれ。」と、サブトはまた話し出した。ベルネンスタインは時々首を振つて頷いた。
「君は門のところで、リッシエンハイムを迎へるのだ。今も云ふとほり、別な室へ案内しては可けないぞ。」
「はい。承知いたしました。」と、微笑しながら青年士官が答へた。
「この室には王樣がゐられるのだ。王樣はルドルフだ。」
「はい。」
「話が濟むと朝餐になるのだが——」
「その時の王樣は、眞實の王樣でいらつしやいますナ。大佐殿。」
「如何にも。だが、必要のない限り、リッシエンハイムに危害を加へてはいかん。」
「はい。」
「では、しつかり賴むぞ。」
サブトはホッと安心の吐息をついて、また室に歸つて行つた。
一時の時計が鳴ると、サブトが室を出て來た。「六時まで寢むがよい。」と、彼はベルネンスタインに言つた。
「別に睡むくはありません。」

「いや、今睡むくなくても、肝心の八時に睡むくなつちや大變だ。」
「大佐殿、陛下も室をお出ましになるでせう？」
「あゝ、もうすぐ……」
「僕も御手にキスを捧げたいと思ひますので——」
「十五分も待つていゝなら、さうしたまへ。」と、サブトの言つた通り、ルドルフが扉を開いて、女王と室を出て來たのは、十五分も經つてからだつた。今まで滂沱いてゐた彼女の顏は酷く青ざめてゐたが、その眼は幸福に輝き、態度は元氣づいてゐた。ベルネンスタインは彼女を見ると、すぐ膝まづいて彼女の手にキスした。
それが終ると、彼女はルドルフと竝んで、通路の端れまで歩いて行つた。二人は其處にやゝ佇んでゐた。そして彼女は名殘惜しげに彼の顏を見つめたまゝ、後退りして戸の蔭にかくれてしまつた。
「さあ、これから我々の仕事だ。」と、サブトは言つた。
ルドルフはまた室に入つた。サブトは王樣の室へ行つて、侍醫に王樣がよく眠つてゐるかどうかを訊ねた。よく眠つてゐるといふのを聞いて安心しながら、大膳寮へ行つて、正九時に王樣とルザウ。リッシエンハイム伯が御會食なさるから、その準備をするやうにと命じた。彼はルドルフの室に歸つて來て、椅子を一脚通路に持ち出すと、手に短銃を握つたまゝ、それに腰掛けて眠つてしまつた。
六時になると、サブトは目を覺まして、戸を叩いた。中からルドルフが、顏を出した。

「よく眠つたかね？」と、サブトが聞いた。
「一睡もしなかつたよ。」と、ルドルフの答は快活である。
「何だ、君はもう少し度胸があると思つてゐたのに——」
「度胸が足りなくて、眠れなかつたんぢやないよ。」
サブトは周圍を見廻した。窓の緞帳は半分引かれてあつた。女樂椅子はその影になつてゐた。
「緞帳の蔭に隱れ給へ。」と、ルドルフは言つた。「そしてリッシエンハイムが室に入つて、僕と對ひ合つて坐つたら、君は彼の頭に短銃を擬すのだ。王樣が見えたら、今度は僕がそこに隱れる。」
「それがいゝ。」と、サブトは頷く。
「ところで、髯はどうしよう？」
「ベルネンスタインが、王樣は今朝髯をお落しになつたと、リッシエンハイムに言ふ筈だ。」
「果してそれを信ずるかな？」
「信じるとも。信じた方が彼奴の爲さ。」
「で、萬一彼奴を殺つつけなくちやならない場合には？」
「成るたけ速まつちやいかん。後で王樣の祟りが恐ろしいよ。」
その時、大時計が七時を打つた。

「もう一時間でやつてくるな。」と、サブトは言つた。
二人はお互に目を見合はして、莞爾とした。
「何時かの時のやうぢやないか、サブト？」
「あゝ、君がルドルフ王になつてゐた頃に歸つたやうだ。」
彼等は、今や遲しと、ルザウ・リッシエンハイム伯を待受けて、血を躍らしてゐた。

第五章　謁見

さて、八時が十分位前になると、ベルネンスタインは身支度も輕快に拵へて、城の大手玄關の外に出て行つた。彼は自信に充ちた面持で、歩哨が立つてゐる前を、昂然として彼方此方と歩き廻つた。間もなく八時の時計が鳴ると、馬上の姿凛々しい一人の男が、供をも連れずに玄關へ乘りつけた。ベルネンスタインはそれと見るより、「あゝ、伯爵だ。」と口走りながら、彼の側へ駈け寄つた。馬から下りたリッシエンハイムは、手を差し伸べて言つた。
「やア、ベルネンスタイン君！」二人は既に舊知の仲だつた。
「リッシエンハイム君、馬鹿に時間が正しいですな。時に王樣ももう大分お待兼ですよ。」
「いや、こんなに早く拜謁出來ようとは思はなかつた。」
「それどころか、王樣は二時間も前から起きてをられます。全く我々こそい、迷惑でしたよ。伯爵、

あなたも氣をお附けにならんといけません。何しろ御機嫌が斜めなのですからね。第一……いや、餘りお引き止めするのも何ですから、まあそろ〳〵參りませう。」
「いや、かまひませんから、何卒聞かせてくれ給へ。それを心得て置かんと、何か下手なことを言ふかも知れないから。」
「ではお話しますがね、王樣は今朝六時にお起きになりました。そこへ髯の手入れに、理髪師が來たのです。ところが王樣は御機嫌が惡くつて、いきなり髯を剃り落してくれ、胡麻鹽髯などつけて置けんといふ御言葉なのです。床屋も仕方ないから、早速お言葉通りに剃つてしまつたのです。」
「髯をねえ！」
「さうです、髯を剃つてしまつたんです。さうしたら十も若くなつたやうだと大喜びで、今朝ルザウ・リッシエンハイム伯と會食するから、用意せいとのお仰せです。何しろ、ひどくあなたをお待兼ねですからね。さあ、參りませう。」
かう言つて、ベルネンスタインは伯爵の腕を取つて、急いで城の中へ這入つて行つた。
二人はルドルフのゐる室の戸口まで來た。そこで、ベルネンスタインは立ち止つて、「私は室の外で、御召があるまで待つてゐますから——」と囁いた。「私は戸を開けますから、あとはお願ひいたします。我々一同が助かることですから、一つ陛下の御機嫌をなほして上げて下さい。」
かう言つて、彼はさつと戸を開けた。

「陛下、ルザウ・リッシエンハイム伯爵の御目通りでございます。」と、言ひ終つたところで、素早く戸を閉め切つて、戸の前に立ち塞がつてしまつた。そして短銃を取り出して檢べ始めた。伯爵はつツと進んで、丁寧な敬禮をした。王様は肘掛椅子に坐つてゐた。顏には深い憂鬱を見せてゐたが、確かに髯は剃り落されてゐた。王様はリッシエンハイムに握手をば賜つて、窓のカーテンから一呎ばかり離れたところに置かれた椅子を示して、それに伯爵を坐らせた。

「ようこそ來た喃、嬉しいぞ。」と、王様は言つた。

リッシエンハイムは、振り仰いだ。以前には王様の聲とルドルフの聲とはよく似てゐたのに、この一二年王様の聲からは元氣が失せてゐた。然し今の言葉は非常に生々としてゐた。王様はリッシエンハイムが驚いたことなど少しも氣附かぬ風で、今度は聲の調子を下して言つた。

「全く嬉しいぞ。實は予も轡引きの犬にはほと〳〵參つてゐたのぢや。どうもうまく訓練が出來ん。あらゆる方法を試みたが……」

「陛下、その話は後廻しにいたしまして、差し當り拜謁を願ひました次第は――」

「まづ犬の話から聞かう。今にサブトが來るが、この話は他の者に聞かせたくない。」

「陛下、サブト大佐が見えるのでございますか？」

「二十分ばかり後に……」と、王様は煖爐棚の時計を、チラと眺めながら言つた。

これを聞くと、リッシエンハイムは非常に心が急かれて、サブトの來ない間に用を濟ませたい樣子だつた。

「陛下、私には急を要する重大事件がございますので――」と言つた。

王様は椅子にぐつと身を引いて、

「その重大事件と申すは何事ぢや？」

リッシエンハイムは更めて室内を見廻した。が、そこには誰もゐなかつた。窓のカーテンは垂れたまゝである。

「陛下、私は從兄のヘンツオウ伯から、一通の書面を委託されて參りました。――」

ルドルフはキツとなつた。

「予は直接間接にヘンツオウとは何等の交渉もないぞ。」

「陛下、どうぞ暫く。實は陛下にとつて容易ならざる書面が手に入りましてございます。」

「ヘンツオウの話は一切聞きたくない。」

「陛下、伯が今日私をこゝに遣はしましたのは、嘗つての失禮を償はんがためでございます。時に陛下の御名聲を被ふが如き陰謀がございますぞ。」

「何人が企むのぢや。」

「最も陛下の御寵愛遊ばす御仁でございます。」

「はつきりと名を擧げい。」

「陛下、私はそれを憚ります。陛下も御信じなさいますまい。然し、私の言葉はともかくも、書いた證據は反古にはなりますまいと存じます。」

「それを見せるがよい。」

「私の持參いたしましたは、寫しでございますが――」

「寫し？　何ぢや、寫しか？」と、王樣は嘲るやうに言つた。

「實物は從兄が持つてをります。其寫しと申しますのは、女王のお手紙でございます。宛名は――」

リッシエンハイムは、一寸口を切つた。

「遠慮なく申せ。何人宛ぢや？」

「ルドルフ・ラッセンダル宛でございます。」

こゝでルドルフは、聲を震るはせ、嗄れたやうな低聲で手を差し出した。

「見せてくれ、見せて――」

リッシエンハイムは眼をかゞやかした。正しく彼の言葉は王の心を射た。王は犬の話など忘れてしまつた。

「私の從兄は――」と、彼は得意になつて言葉を續けた。「これを陛下のお目にかけるのが義務と思つたのでございます。これを手に入れましたのは――」

「どうして彼の手に入つたらう？　兎に角見せてくれ。」

リッシエンハイムはチョッキの釦を外して、内ポケットから一枚の紙片を取り出した。その時、皮帶の短銃がチラと見えた。

ルドルフも矢張り人間だつた。その紙片を見た刹那、思はず半身を椅子から上げ、そして互ひに顏と顏を見合せた。朝日を受けて、生氣に滿ち充ちた顏！　それは瓜二つとは言へ王樣のとは違つた顏ではないか！　アッと叫ぶや、伯は片手を腰の短銃に走らせた。然し、時既に遲く、ルドルフの左手はしつかとその紙片を摑んでしまつた。そして右手ではピストルを持つて伯の顏を狙つた。その時、カーテンの陰からは、一本の手がヌッと現はれて、銃口がリッシエンハイムの目の前に開いた。そして、悠然と現はれたのは、餘人ならぬサブトである。

リッシエンハイムは一言の言葉もなく、たゞルドルフ・ラッセンダルを凝視するだけ。サブトは少しの猶豫もなく、伯爵の短銃を摑みとつて、サッと自分のポケットに捻ぢ込んでしまつた。

「さあ、紙を取りたまへ。」と、彼はルドルフに言つて、ルドルフがその紙片を引き伸ばしてゐる間も、短銃でリッシエンハイムを釘付けにしてゐた。

「本物かどうか、檢らべて見たまへ。いや、全部讀まんで、一寸目を通しただけで結構。それから此奴に短銃を突きつけてくれ。身體檢査をするから――。伯爵、立てッ。」

伯爵を立ち上がらせて、まだ他に隱してある書面はないかと檢査した。そして、また椅子に坐らせた。ルドルフは微笑しながら言つた。

「ルバートは何處にゐる？」

ルドルフがかう言つた時、戸が激しくノックされたので、彼は立つてそれを開けた。サブトは依然短銃を擬したまゝだつた。戸口にはベルネンスタインが、立つてゐた。

「只今、陛下の僕が參りまして、陛下は先刻御散策中、歩哨からリッシエンハイムの到着を聞かれたさうです。それで、サブト大佐が城の案内をしてゐるところだと返事してやりましたが、間もなく陛下が御出でになるさうです」

サブトは一寸考へ込んだが、すぐリッシエンハイムに向つて言つた。

「今の話は後で聞かう。これから陛下との會食に行くのだが、私とベルネンスタインも一緒だぞ。いいか、君の用件も、此處の話も一切禁物だ。君が、一言でも口をすべらすか、身振りでもしやうものなら生命はないぞ。ルドルフ、君はカーテンの蔭に隱れてゐて、何か相圖があつたら、窓から濠へ飛び込んで逃げて貰ひたい。」

「承知した。」と、ルドルフ・ラッセンダルは言つた。「そこで、僕は手紙でも讀んでゐやうか。」

「馬鹿、燒いてしまへよ。」

またベルンスタインが、頭を覗かせた。

「早く、早く。」と、彼が囁く。其の時戸の外で王樣の聲がした。

「待ち兼ねたぞ！」

ルドルフはカーテンの蔭に身を忍ばせた。サブトは短銃をポケットに滑り込ませた。リッシエンハイムは、手をもぢ〳〵させて、チヨッキをまさぐつてゐた。ベルネンスタインは敬禮して、たゞ今陛下のところへ伺候いたさうとしてをりました、と辯解した。王樣は、青ざめて、髯をつけてあらはれた。

「伯爵か、待つて居たぞ。ところで、サブト、室が暗いな。どうして皆カーテンを引かんのぢや？」

かういつて、王樣は、ルドルフの隱れてゐるカーテンへ近づいた。

「いや、陛下。」と、サブトは王樣の前に駈け寄つて、カーテンの前に兩手を廣げながら叫んだ。「御朝食の準備が出來てをりますが——」

「さうか、それでは食べながら話を聞かう。」と、王樣はリッシエンハイムの腕をとつて、ベルネンスタインに向つて、「さあ、中尉先導せい。サブト、一緒に來い。」

四人は室を出た。後に立つたサプトは、立止つて鍵をかけてしまつた。

食卓では、リッシエンハイムは餘り食べなかつた。彼は王樣と向ひ合つて坐つてゐた。サブトは、王樣の椅子の後に立つて、王樣の椅子の柱に短銃を載せて、リッシエンハイムに擬してゐた。ベルネンスタインは、戸の側に固くなつて立つてゐた。リッシエンハイムは一度王樣の顏を見て、意味ありげな眼付をした。

「何だ、其方はちつとも食べない喃。」と、王樣が仰せられた。「どこぞ加減でも惡いのか。」

「いえ……」と、リッシエンハイムは答へた。
「それでは食べながら犬の話を聞かう。何しろ、予はひどく腹が空いてゐるのでな。」
リッシエンハイムは犬飼ひの祕訣を話した。が、非常に明瞭を缺いてゐた。王様は焦燥して來た。
「予にはちつとも解らん。もう一度繰り返して聞かせてくれい。」と、王様は言つた。
リッシエンハイムは言はれるまゝ、更にもう一度繰り返した。
「どうやら少し解つたやうぢや。サブト、其方は解つたか？」と、王はサブトを顧みた。サブトは危く短銃を見られるところであつた。
「よく分りました。」とサブトは答へた。
「さうか、予も半分位は解つた。」と、王様は哄笑して、「それで結構ぢや。」
「左様、充分と存じます。」と、サブトも少し笑つて言つた。
かうして王様の樂しみにしてゐた、犬の話も雜作なく飜がついたので、王様は何か用事があつて謁見したいといつた伯爵の言葉を思ひ出した。
「時に其方の用は何ぢや？」
リッシエンハイムは、サブトを覗つた。ピストルは依然擬されてゐる。それにベルネンスタインまでが咳をした。が、彼は王様の言葉に勢を得て、

「それ程祕密の用事か？」と、王様は尋ねた。
「はい、陛下だけのお耳に入れたいと存じます——」
サブトはどうしてもリッシエンハイムを王様と一人置かぬぞと、決心した。彼は王様の身近く、身を屈めて嘲笑するやうに言つた。
「どうせ、ルバートからの音信でせうが、碌な事ではありますまい。」
聞くより、王様は眞紅になつて憤つた。
「伯爵、用とはそのことか？」
「陛下には、私の從兄が——」
「また辯解か？」と、王様は皆まで言はせずに、「ルバートは今更歸順したいとでもいふのか？　それとも他に言ひ分でもあるのか？」
しばし、一座には沈默が來た。サブトはリッシエンハイムをグッと見据ゑて、微笑しながら、右手にある短銃を示した。ベルンスタインは二つ咳をしたゐる。
「伯爵、何か耳新しい話でもあるのか。」と、王様はいら〳〵して言つた。
伯爵は、まだ默つてゐる。
「伯爵、予の言葉が判らぬのか？」と、また王様は焦立つた。

「それは……」

「辯解の用件で謁見を求めたのなら、其方は予を誑らかしたのぢや。其方は予の決意は知つてる筈。ルバートも知つてゐる筈ぢや。」

かう言つて、王様は座を立つた。サブトのピストルはポケットに隱れた。ベルネンスタインは最敬禮のために長劍を拔き拂つて、また咳をした。王様は言葉やさしく、

「其方の骨肉の愛は分る。だが、これだけは許るせない。もう、二度とルバートの話は聞かせぬやうにしてくれ。」

リッシエンハイムは王様の言葉を肯定するやうに禮をした。

「サブト、伯爵をよく待遇してくれ。予は歸る。伯爵、ではさらばぢや。ベルネンスタイン、手を借してくれ。」

ベルネンスタインはチラとサブトを一瞥した。サブトが頷くと、ベルネンスタインは劍を鞘に納めて、王様に手を與へた。室を出るとすぐ戸を閉めた。然し、此の刹那、リッシエンハイムは、突然戸に駈け寄つて、王様の後を追はうとした。手を引手にかけた、早くもサブトの手は彼を摑んで、短銃を押しつける。

「生命が惜しいか、それとも王様の側へ行きたいか？　少しでも戸を明けて見ろ、彈丸が飛ぶぞ！」

その時、戸にノックの音がした。

「戸を開けろ！」と、サブトが命じた。リッシエンハイムは戸を開けた。そこには一通の電報を持つて、召使が立つてゐた。「受けとれ！」と、またサブトの聲。

「大佐殿、これはこの方へ參りましたので——」と、召使は丁寧に言つた。

「受けとれ！」と、サブトが命じる。伯爵が電報を受け取ると、「開封しろ！」

伯爵は仕方なく封を切つた。

「おい、それを裂いたり、丸め込まふものなら、一發ドンとやるぞ。」と、サブトは靜かに釘をさした。

「開けたら、讀め！」

「讀めない。」

「讀めッ！　それともお念佛が聞きたいか。」

銃口は一、呎の眼前に擬せられてゐる。彼は電報を展げたまゝ、サブトを睨んだ。

「讀め！」

「こんな文句が分るものかい。」と、伯爵が呟く。

「分らなきや、智慧を貸してやるから讀め！」

「だが、何にも——」

「讀めつたら讀めッ！」

彼も詮方なく讀んだ。電文はかう書いてある。

「ケーニヒストラッス十九ホルフ」

「御苦勞〳〵。ところで、その發信局だが――」

「ストレルソーだ。」

「一寸、此方に見えるやうにしたまへ。あゝ、さう〳〵、君を疑ふのぢやないが、百聞は一見に若かずだ。有難う。ところで伯爵、君にはこれが判らんのか？」

「判らん。」

「妙だな！　よく判るぢやないか。」

「君は頭がいゝよ。」

「さうさ、一目瞭然だ。」

「ぢや、敎へてくれ。」と、リッシエンハイムは嘲笑的に言つた。

「これは住所さ。」

「住所！　それは氣がつかなかつた。だが、ホルフといふのが分らんなア。」

「ホルフの住所らしくもないね。」

「ではホルフつて誰だ？」と、リッシエンハイムは爪を齧みながら、サブトを上目づかひに見て言つた。

「それはネ、ルベート・ヘンツオウ伯現在の住所だよ。」

彼はかういつて、リッシエンハイムの眼を屹と見た。それからニヤリと笑つて短銃をポケットに藏つて、伯爵に禮をして言つた。

「いろ〳〵御親切に有難う。伯爵閣下。」

第六章　計略

ウインテンベルグで私を診てくれた醫者を無理矢理に納得させて、ルドルフの出發後十二時間經つてから、私も此處を出發した。そして、リッシエンハイムがゼンダ城で二重の拜謁を賜つた金曜日の朝、ストレルソーの我家へ歸つて來た。私は早速ゼームスをサブトの許へ遣つて、自分の所在を通告し、何でも用を命じて欲しいと言つてやつた。

お話變つて、ゼンダ城中では策戰會議が開かれてゐた。會議の室の戸口から離れた片隅には、リッシエンハイムが坐つてゐる。彼は武器を奪はれて悄然としてゐた。戸の近くには三人が凝首してゐる。ベルネンスタインは、快活さうに勝矜つた樣子をし、サブトは、如何にも無骨に落着き、ルドルフは、冷靜に透徹した頭腦を失はなかつた。一方フラビアは、自分の室で、會議の結果を待つてゐた。彼女は何でも彼等の命ずるところに從はうとしてゐたが、只ルドルフが城を去る前に、もう一度會ふ決心であた。三人は低い聲で話し合つてゐた。やがてサブトは紙をとつて、それに何かを記し

た。これは私へ宛てゝ、その午後ゼンダ城へ來るやうにとの手紙だつた。それから更に協議が續けられた。

「さうだ。さうだ。」と、若いペルネンスタインは、昂奮して呟いた。

「これは危險ではあるが、最上の策なのだ。」とルドルフはリッシエンハイムを憚つて、一段と聲を落した。「それには、夜まで僕は此處にゐなければならないが、それが出來るかしら？」

「それは出來ん。君はすぐ此處から森へ逃れて、俺の行くのを待つてゐたまへ」とサブトが言つた。

「いや、我々の行くのを待つて貰ひたいですな。」と、ベルネンスタインが言ふ。

「いや、さうでない。」とサブトは言つた。

「君は此處にゐるリッシエンハイムを監視してゐるのだ。」

「それに――」とルドルフも笑つて言つた。「君にしろ僕にしろ、他人の手でルパートを射ちたくはないんだ。彼は我々の宿敵さナ、サブト。」

大佐も頷いた。今度はルドルフが紙をとつて、次のやうな書面を書いた。

ストレルソー市ケーニヒストラッス街一九番地・ホルフ方――

萬事恙なし。持參の物を納附せしに、貴下所有の原本を一瞥したしとの事。王と小生は今宵十時、狩小屋に待つ。原本御持參御來駕を乞ふ。御疑念無用。ル、リ、より。

ルドルフはその紙片をサブトに渡した。ベルネンスタインもサブトの肩越しに、その上へ熱心に眼を走らせた。

「巧く行けばいゝが……」と、サブトは苦笑して言つた。

「これでルパートを釣り出せるさ。彼奴は、王様が女王や君の目を竊んで、自分に逢ふ決算だナと考へるよ。場所だつて、王様の狩小屋だもの、これ以上眞實らしく見える處はないぢやないか？　大丈夫この手紙を信じて、やつて來るよ。たとへ少々疑念を挾んだところで、やつて來るのだが、第一その疑念だつて挾みやうもないぢやないか？」

「俺は、彼奴とリッシエンハイムの間には、暗號があると思ふのだ。」と、サブトは言つた。

「そんな筈はない。あるのなら住所の電文だつて、暗號で寄越すはずだ。」と、ルドルフは言下に否定した。

「それはさうと――彼奴が來たらどうなる？」と、ベルネンスタインが聞いた。

「リッシエンハイムと同じく、サブトを從へた贋王様と會見するのさ。」

「だが、彼奴はあなたを知つてゐますよ。」と、ベルネンスタインが遮つた。

「あゝ、知つてゐるかも知れん。」と、ルドルフは微笑して、「間もなくフリッが來るから、彼には王様を見張つて貰らはう。」

「そして、リッシエンハイムは？」

「それは、君が見長るのさ。時にサブト、ターレンハイムには誰がゐるのだ？」
「誰もゐない。――スタニスラス伯は別荘をフリッの自由にさせてゐるんだ。」
「結構――それではルザウ・リッシエンハイム伯とベルネンスタイン中尉は、今日中に其處へ行つてもらひたい。これはゼンダ城司サブトから、中尉に二十四時間の休暇を與へた名目にするのだ。そして、二人はそこの離宮で一日一緒に寢轉んでゐてくれ。だが、ベルネンスタイン、一寸だつて側を離れてはいけないよ。そして晩も同じ室に寢るのだ。又君は不寢番でピストルを離さないんだぜ。」
「承知しました。」と、ベルネンスタインが答へた。
「若し、彼奴が逃げ出さうとしたら、かまはんから討ち殺して、君は國境へ馬を飛ばして、身の安全を計り、我々にそのことを通告して貰ひたい。」
「承知しました。」と、ベルネンスタインの一語。
リッシエンハイムは絶えず身動きをし、元氣のない息を吐いてゐた。彼は神經を緊張させて話を聞き取らうとしたが、相變らず低聲に話してゐるので、何等聞きとれなかつた。
計略がまとまると、ベルネンスタインは、立つて室を出て行つた。彼はストレルソーへ電報を打つと言はれて、三十分間ばかり座を空けたのだ。その間に、ルドルフとサブトは交る〳〵リッシエンハイムへ、彼の處置について申し渡した。リッシエンハイムは、無關心に聞いてゐた。そして、二人から溫和しくターレンハイムに行くつもりかと訊ねられた時、彼は苦笑した。

「僕に手向ひなど出來るものか？　すぐにドンと一發やられるからね。」と、彼は逆襲した。
「感心だ。」と、サブトは言つた。「伯爵、あなたは存外悧巧だよ。」
やがて、ベルネンスタインが戻つて來た。彼は用事を終つて、馬を城門に待たせてあつた。彼はルドルフと別れの握手をして、伯爵と二人、さも仲のよささうに室を出て行つた。女王も自分の室の窓から、二人の姿を認めた。ベルネンスタインは少し遲れて、手を腰の短銃に當てながら馬を驅つて行つた。
かうして午前中の仕事は上首尾に行つたが、困難なのは、ルドルフを人目に附かぬやう逃してやることであつた。このために城司サブトは、城内の近衞兵中隊に午後一時から公園で演習を行へと命令し、また召使共には晝食後演習を見物に行けと吩咐けた。
サブトがかうして、色々の手段を巡らしてゐる時、女王フラビアはルドルフのゐる室に來た。それは十二時近く、ベルネンスタインが出發してから、三十分も經つた頃であつた。サブトは彼女を戸口に請じて、番兵を通路の端に立たせ、默つて室を開けてはならぬと命令した。そして、私は直ぐに戻つて參りますからお待ち下さいと、番兵にも聞き取れる程の聲で女王に云つて敬々しく戸を閉めて去つた。彼は、祕密なことは公然と行へば行ふ程、却つて祕密が保たれることを知つてゐたのだ。
その時の二人の逢ふ瀨の顚末を私は知らない。女王が、後で妻ヘルガに語られた事から察すれば、ルドルフの計畫を聞いた女王は戰慄した。それが皆自分の手紙から起つた事だと思ふと、たまらなく

後悔の念に責められた。これを見て、ルドルフはポケットから例の手紙を取り出して、彼女の面前でそれに接吻した。

「生命が澤山あるものなら――」と、彼は優しい聲で言つた。「貴女に御心遣ひを受ける度びに、一つづゝ生命を投げ出したくなりますよ。」

「ねえ、ルドルフ、生命は一つしかないものです。それも、わたしのものですわ。ね、あなたはかうして逢へる時があらうと思召した事がある？」

「いえ、思ひませんでしたよ。」と、彼は答へた。

「然し、わたしはそれを知つてゐました。」と、彼女は瞳を輝しながら言つた。「わたしは何時も、また二人の逢へる日のあることを知つてゐました。どうして、何處で逢へるかは判らずに、逢へることだけは信じてゐました。その希望だけを力に、わたしは生きて來ましたの、ルドルフ！」

「あゝ何といふ御言葉――」と、彼は感謝して、女王の手を確りと握りしめた。女王はそれを握り返して、

「わたしは手紙を書いてよかつたのね。それが盜まれたのも嬉しいわ。あなたが、わたしのために戰つて下さるのですもの、私のために。」

がういつて彼女はルドルフの手を振りほどいて、兩手で顏を蓋うてしまつた。

「あなたは、わたしの上げた指輪を嵌めていらつしやるのね。」と指の間から囁いて、「何時もはめて

ゐて下すつて？」

「言ふまでもありません。」

「他の指輪はなさらない？」

「えゝ勿論です。」

「わたしもそれは知つてますわ。知つてゐますけれども――」彼女はかう言つて、ルドルフの肩に手を投げかけた。

其處へサブトが引返して來た。城内の兵士は演習に行つて、召使は一同見物に行つたとの事。サブトはルドルフを急き立てゝ、早く馬に乘れと言つたが、今は躊躇する時ではなかつた。いざ、とルドルフがサブトは戸口に駈け寄つて、半ば鞘走つた長劍の柄に手をかけた。聞えるものは、慌だしい跫音――

そして、それがピタと戸口で止つた。

「王樣ではないか？」と、ルドルフは低く尋ねた。

「いえ、王樣の跫音ではありません。」フラビアは躊躇するところなく答へた。

彼等は次の音を待つてゐる。――靜かに戸を叩く音だ。然し、彼はしばらく默つて樣子を覗つてゐる。戸を叩く音は、急がしくなる。「兎に角開けよう。」と、サブトは言つた。

「ルドルフ、君はカーテンの蔭だ。」

女王は椅子に腰を下ろし、サブトはその前に書類を展げて、恰かも二人で何か用事をしてゐたやうに見せかけた。然し、さうする間にも、戸外の嗄れた聲は止まなかつた。

「早く、どうぞ早く――」

聲は正しくベルネンスタインだ。女王は椅子から飛び上り、ルドルフはカーテンから跳び出し、サブトは鍵を廻した。中尉は呼吸も絶え〳〵に、眞青になつて室へ飛び込んだ。

「どうした？」と、サブトが尋ねた。

「逃げられたか？」とルドルフ。

「如何にも、逃げられました。街を過ぎて、ターレンハイムへ行く野道にさしかゝつた時、馬の奴が前にのめつて、躓いてしまつたのです。私は彈みを食つて、落ちてしまひました。思はず身を支へようとして、手を伸ばした拍子に、短銃は掌を離れて地上に落ちてしまひました。」

「彼奴はそれを見て取つたのだナ？」

「さうです。一寸の間樣子を見てゐましたが、ニヤリ笑つたと思ふと、馬首を立て直し、拍車を蹴つて、ストレルソーめざして一目散に逃げ去りました。私は其の後から直ぐさま三發浴せかけました。」

「當つたかい？」と、ルドルフが尋ねた。

「當つたと思ふのです。片手の手綱を他へ移して、腕を抑へてゐましたからね。私もすぐ馬に乘つて、追跡しましたが、向うの馬は私のより良く、おまけに人通りのあるところへ差しかゝつたので、

短銃も打てない始末です。遂々取り逃しました。」

青年士官は痛恨と恥辱の念に顔を歪めて、がつくり椅子に崩れてしまつた。

「それは不慮の災難だ、何も君の誤ちではないよ。」

サブトは氣にも止めなかつたが、ルドルフは彼の側へ寄つて、柔しく肩を撫して言つた。

一座には短い沈默が續いた。

「それはいゝが、リッシエンハイムがストレルソーに逃げたとすれば、差當りどうするかだね？」

と、サブトが言つた。

「ルバートを引止めて、我々に會はせまい。」と、ラッセンダルは呟いた。

「それはどちらとも言へぬな。」

「來るものか。」

「兎に角、どちらにも備へる必要がある。」

サブトとルドルフは顔を見合せた。

「僕、ストレルソーへ乘込まう。」とルドルフは莞爾した。「ベルネンスタインの帽子を借りて、さうしよう。」

ルドルフはサブトの側へ歩み寄つた。

「さあ、馬小屋へ案内してくれ。馬は良いか？　どうも汽車には乘りたくないんだ。」

「あの馬なら今夜中に彼方へ着けるよ。」と、サブトは答へた。「さあ、行かう、ベルネンスタイン、君は此處で女王陛下のお側にゐてくれ。」

戸口のところで、ルドルフは一寸立ち止まつてなつて、彼を見送つた。それから彼はサブトに尾いて、周圍には全く人目がなかつた。彼は馬に跨がつた。

「どうだ、帽子は似合ふか？」と、ルドルフが言つた。

「あゝ、まるで王冠のやうだ。」と、大佐の答。

「道順は？」

「濠に沿うて、この裏の道に出るのだ。それから、森を突つ切るとホフバウに出る。それからは君の知つてゐる路だ。いゝか、暗くならない間に、ストレルソーに入るなよ。そして、若し落ちつくところが欲しかつたら——」

「判つてゐる。フリッの家がある。そこからすぐ、例の番地へ乗込まう。」

「それがいゝ。では！」

「何？」

「今度こそ止めを刺して來いよ。」

「大丈夫！　だが、彼奴が狩小舎に來たらどうする？　リッシェンハイムの知らせがないと、來るかも知れんよ。」

「俺が行つてゐるよ。だが、大抵來まい。」

「それでも來たら？」

「ベルネンスタインが引き受けるよ。」

「サブト！」

「えゝ？」

「女王を頼むぞ。」

「心配するな。」

「それでは！」

「しつかり！」

ルドルフは馬に一と鞭、馬小屋から路へ、それから濠に沿うて、森へと眞一文字に飛んで行く。やがて彼の姿は木蔭にかくれてしまつた。彼はゼンダの森を過ぎて、ふたゝびストレルソーの敵壘を差して行くのだ。而かも、彼に先き立つこと一時間、ルザウ・リッシェンハイムは、無念やる方なき怨みを抱いて、同じ都へ馬を飛ばしてゐるのだ。

今や闘ひの幕は切つて落された。其の結果や如何？　と云ひたいところである。

第七章　シモン歸る

午後一時に、私はストレルソーの我が家でサブトの電報を受け取つた。私は早速此の招電に應ずる準備をした。側にゐたゼームスは氣を利かして、直ぐ汽車の時間表を持つて來た。さて、時間表を見ると、困つた事に、四時までに一つ普通列車が出るだけである。それに乘ると六時過ぎでないとゼンダに着けない。私はいら〳〵しはじめた。

「旦那、臨時列車を出して貰へないものでせうか？　一つ間ひ合せてみようと思ひますが……」とゼームスは、またいつものやうに氣を利かした。「私が先きに停車場へ行つて、その用意をいたさせませう。」

私もそれに同意した。平生私はよく王樣の御用で、臨時列車を特發させてゐたので、今度も出して貰へることになつた。ゼームスが出て行つてから十五分も經つた頃、私も馬車に乘り込んだ。恰度馬が駈け出さうとしてゐるところへ、召使頭がやつて來た。

「旦那樣、一寸お訊ねいたしますが、」と、彼は言つた。「ボウエルが歸つて參りませんが、いづれ戻つて參りますのでせうか？」

「いや、ボウエルは、旅行中不屆きなことがあつたので、解雇したよ。」

「はゝあ、どうも外國人は信用出來ませんでございますよ。さうして、旦那樣の鞄は？」

「確、まだ着いてゐないのか？」と、私は叫んだ。「彼奴に送らせたんだが、あの惡黨が盜み去つたかな？」と、私は憤つて叫んだ。

「旦那樣、何でしたら、警察へ届けて置くことにいたしませうか？」

「いや、僕が歸るまで見合せて置け。その間鞄が來るかも知れない。それに、彼奴が盜んだといふ確かな證據もまだないのだから。」私はかう言つて、この話の結末をつけた。

私はこれでボウエルとの交渉は、疊が附いたものと考へた。彼は只ルバートの手先になつて働いただけで、二度と姿を現すことはあるまいと思はれた。が、ルバートはまだボウエルをお拂ひ箱にはしてゐなかつた。私はすぐその確證を握つたのだ。私の家から停車場へ行く途中ストレルソーの中心地を通らなければならなかつたが、そこは道が狹く折れ曲つてゐるので、靜かに馬車を驅らねばならなかつた。私達の馬車が、ケーニヒストラッス街に差しかゝつた時、——その時まだ何も知らない私は、特別この街に氣も留めなかつた——折惡しく重い荷を積んだ荷馬車に道を阻まれて、焦々しながら道のひらくのを待つてゐた。その時、先刻私と召使頭の會話を聞いてゐた馭者が、非常に驚いた樣子で、

「旦那樣、彼處にボウエルがをりますよ。——そら、肉屋の前を通つてゐるぢやありませんか！」

と、叫んだ。

私はびつくりした。成る程、確かにそれらしいのが、スタ〳〵と人混みの中を縫うて行く。よし、

彼奴を引つ捕へるか、又は行先を確めよう。さうすれば、ルパートの仕業も判るし、所在も確められると言ふものだ。さう思つて、私は馬車の馬に一鞭當てゝ、彼を追跡し始めた。

その邊から、もうケーニヒストラッスの番地が始つてゐた。私が彼を追ひかけ始めたあたりは、三百番地前後で、例の十九番地まではまだ四分の三哩位の地點であつた。ボウエルは、その十九番地の方へ逃げてゆく。勿論、彼が何處へ逃げ込まふとしてゐるのか、私には想像もつかなかつた。私には十九番地が二十番地であつたところで、大した變りはなく、只彼を引つ捕へさへすればよかつたのだ。彼も私に追跡されてゐるのを感附いてゐた。彼は肩越しに私を振返つたやうだつたが、逃げ足を早め出した。かうして、段々彼との距離を狹めて、間もなく道の端れに、停車場の影が見えて來た頃には、もう二十碼位のところまで追ひつめてゐた。だが、その時困つたことに、私の前には頑丈な老紳士が立つてゐる。ボウエルはさつさと、老紳士を突き拔けて了つた。老紳士は彼の後姿を見送つてゐる。そこへ又私が行つて突き當つたから、一層老紳士は周章てゝゐた。だが、もつと周章てたのは私であつた。もう氣がついた時には影も形もない。私はその邊の番地を見た。二十三番地とある。然し、そこは堅く戸が閉つてゐる。私は二三軒先へ歩いて見た。二十二番地、二十一番地と過ぎて、十九番地へ來た。その家の表は、塵に汚れて荒れ果てゝ、一種頽廢の氣が漲つてゐた。それでも不思議に店を開いてゐると見え、ショーウインドには、安い食料品が竝べてあつた。店の戸は開いてゐたが、そこにはボウエルが逃げ込んだといふ證據は、何にもなかつた。私が口惜しまぎれにその前

を通り過ぎようとした時、一人の老婦人が戸口から頭を突き出した。私は危くそれに突き當るところであつた。彼方の老婦人もぴつくりしたらしかつてゐたし、向うでも私を知つてゐたのだ。彼女はホルフ——王樣を監禁した牢獄の十管の側で死んだマックス・ホルフの實母であつた。

彼女はすぐ氣をとりなほして、私に會釋した。

「あゝ、これはホルフ小母さんか。」と、私も言つた。「お前が此處に店を持つてから幾何經つたかね？」

「はい、半年そこ〳〵ですよ。旦那樣。」と、彼女は答へた。落着いた態度であつた。

私は窓を仰いだ。窓は皆閉め切つて、格子が下ろされてゐる。何處から見ても人の住んでゐさうな代物ではなかつた。

「小母さん、少々ペンキの塗りが剝げてゐるが、此處に獨り住んでゐるのか？」と、私は聞いた。

「獨りの時もあれば、さうでない時もございます。差し支へない限りは、獨身の方を下宿させますので——」

「今は室が塞がつてゐるかね？」

「いえ、一人も居りません。運がありませんでねえ。」

話半ばに、向うから急ぎ足で來るゼームスを見つけた。

「旦那様。」と、彼は言つた。「汽車は五分間の後に發つことになつてをります。それに遲れると、また三十分待たねばなりませんが――」

私はその時、此の狸婆の顏に、幽かな笑ひの浮ぶのを見て取つた。はゝあ、確にボウエルを隱まつてゐる。恐らくボウエル以上の大物がゐるな――と私は感づいた。だが、いづれにしろ、私は先づゼンダに行かねばならぬ。その上、晝日中他人の家へ飛び込んで、ストレルソーの物笑ひの種にもなりたくもなかつた。ゼームスは私を急きたてるやうに、停車場の方を見つめてゐる。私も仕方なく足をそちらへ向けた。其の瞬間、家の中からは樂しさうな笑ひが漏れて來た。私は驚ろいて屹と其方を振り向いた。狸婆は眉を寄せて、しかめ面をしながら脣を噛んでゐた。が、忽ちさり氣ない表情に變つた。然し、今度は私も其の笑聲には瞞まされなかつた。また、婆さんも私に悟られた事を感づいたに違ひない。けれども、今はゼームスの手前もあり、前途を急ぐ私でもあつたので、ゼンダの樣子次第で此の家を襲ふことにしようと決心した。それでゼームスの誘ひに應じて、直ちに列車へ乘り込んだ。私の歸りを待つてゐた馭者は、恐らく待ちあぐんで家へ歸つたことであらう。私もつい失念して、後になつても其の事を問ひ質さなかつた。定めし、逃げた前の召使ひを追跡する姿を見て、馭者は滑稽だと思つてゐたに違ひない。事情を知つてゐる人には興味ある光景だつたらうとも思はれるけれど。

私は三時過ぎにゼンダの驛に着き、四時前に城に着いた。私は親切な、優しい言葉を女王から受けようなぞとは夢にも思つてはゐなかつた。誰にせよ、女王を一と目見、その聲を聞いたなら、身を獻げずには居られなくなるのに、私は大事な手紙を失つて、感激の涙に咽びながらサブトの居室へ入つて行つた。

にも不拘、此の優諚に接し、彼はベルネンスタインと向ひ合つてゐた。私は彼から色々の話を聞いて、果して私の觀察通り、ルパートがホルフ婆さんの家にゐる事を知つて雀躍りした。私がその話をする隙もなく、彼等は巧みにリッシエハイムへ送る途中脫走された事を物語つてくれた。私はルドルフ・ラッセンダルが、單身ケーニヒストラッスの虎穴に投じたと聞くや、茫然として言ひ知れぬ恐怖に捉へられた。

「あそこには三人ゐるんだ。ルパートと、リッシエンハイムと、ボウエルとだ。」と私は言つた。

「だが、ルパートの事は分らん。」とサブトが私を宥めた。「若しリッシエンハイムが間に合ふやうに到着したら、ルパートも外出しないだらうけれど……。彼奴は此處の城へやつて來るかも知れない。だから我々は萬全の策を講ずるに如くはない。ルドルフはストレルソーへ、君と俺は狩小屋へ。そして此處にはベルネンスタインが居つて女王を守るんだ。」

「たつた一人で此處に？」と私は尋ねた。

「さうだ、だが、固める者は勇者だ！」と、大佐は青年士官ベルネンスタインの肩を叩いた。「我々は四時間以上も城を空けねばならぬ。王樣の方は、其の間別に御心配はないやうにしてある。ベルネン

スタインが生命がけで我々の戻るまで守つてゐて呉れるんだ。ね、中尉、大丈夫だらう？」

元來、私は石橋を叩いて渡る方で、何んな仕事をする時でも、萬一の不幸の場合ばかりを考へる癖がある。だが、此の場合サブトの策以上の良策あるべしとも思はれなかつた。而かも私にはラッセンダルの事が氣がかりで仕方がなかつた。

兎角してゐるうちに、時は一時間二時間と經過して行つた。その間に我々は充分腹ごしらへをしてまた一同椅子に腰かけて煙草を吹かした。傍らにはゼームスがゐて給仕をしてくれたので、我々は何等心おきなく話をする事が出來た。彼が落ちついてゐるやうな所を見るのは、何かしら我々の心をも愉快にしてくれた。「王樣も、今にお歸りになるだらう。」と、サブトは大時代の古時計を見ながら言つた。「王樣は晝のお疲れで、すぐお寢みになるだらう。さうすると九時には身體が空くだらうネ。ブリッ！　うまくルバートが狩小屋に來るといゝがなア。」

六時の時計が鳴つた。が、王樣はまだお歸りはなかつた。數分間經つてから、女王からの使ひが見えて、一同に離宮前の高臺に來てくれとの事であつた。その高臺からは、王樣が馬に乘つてお歸りになる筈の道が一眸の中に見渡されるのであつたが、女王は王樣の歸りの遲いのを心配して、其の邊を往きつ戻りつして居られた。かうした場合には、いつもならば何でもない事でも、大袈裟に考へられたり、不吉な豫感を抱かせたりするものである。今、我々も女王と同じ心配を抱いて、王樣には何か災難があつたのではなからうか、それとも、リッシェンハイムが王樣に巡り會つたのではなからうかルバートが襲つたのではなからうかと氣をもんだ。その反對に、王樣は獲物が多過ぎて、困つて居られるのかも分らないのだつた。

「でも、まだお歸りがないなんて、不思議ですねえ。」と、女王は獨り言ながら小手をかざして、彼方の黑い森影につゞいた道に添うて目を走らせた。もう黃昏どきだつたけれども、まだそう暗くはなつてゐなかつたから、若し王樣の一行が、森を出て野道にかゝられたものとすれば、その姿の見えないはずはなかつたのだ。

王樣は六時になつても、七時、八時になつてもお歸りがなかつた。我々は口も利かず、全く沈默に滅入つてしまつた。サブトはもう叱言も言はなかつた。女王は非常に寒くなつたので、毛皮の外套にくるまつて、椅子に腰かけてみたり、その邊を行きつ戻りつしてみたりされた。サブトの顏に現はれた深い憂愁は、矢張り我々と同じやうに、心の混亂してゐる事を示すものだつた。

だが、此の刹那、私は森の方から起る馬蹄の響きを聞いた。同時にベルネンスタインが叫んだ。「あゝ、お歸りだ！」馬蹄の響は刻一刻近づく。やがて三人の姿が見え出した。

王樣のお伴を承はつた三人は、愉快さうに歌ひながら、馬を走らせて來る。それを聞くなり、別に何事もなかつたのだな、と、我々は安心の胸を撫で下した。しかし、それでは何故、王樣も一緒に歸つてはおいでにならないのだらう？

やがて、獵人頭のシモンが、綠と金色の美しい正服を着けて、身體をゆすぶりながら近づき、女王

に恭しく一禮した。

「おゝ、シモンか？　陛下は何處においでになります？」と、女王は力めて微笑しながらたづねられた。

「陛下……は、王樣は、貴方さまへお言傳を賜はりました。」

「お言傳……？」と心持ち眉をピク〳〵とさせて、女王は訊いた。「それを、早くお話しなさい。」

「はい、只今申上げまする。王樣に於かせられましては、素晴らしい獲物でございました。私も幸ひそれに劣らぬ程の手柄でございましたので——」

「おい〳〵シモン。」と、サブトが彼の肩を叩きながら、話を遮ぎつた。「第一に王樣のお音信からしてくれたまへ。」

「あゝ、さうでしたな。大佐殿。」と、シモンは言つた。「それはさて置き、陛下、王樣は素晴らしい當りでございました。私達一行は十一時に、一頭の猪を狩り出しまして——」

「シモン、それが陛下からのお音信ですか？」と、女王は全く可笑しさうに尋ねた。

「いゝえどういたしまして……。」

「では、それから早く言へ！」とサブトは聲を荒らげた。

「はい、王樣は非常にお疲れでございます。それに獲物は狩小屋の近くで殺したものでございますから、王樣はそれを小屋に運ばせて、明日始末をしに參れとの御諚でございます。で、私達だけ戻つて參りました。王樣には、ハーバートと私の母と一緒にお泊りになりました。陛下、あのハーバートは非常に器用な男でして、私の母が料理法を教へましたから——」

「何處に王樣がお泊りになつたのだ？」と、サブトは唸つた。

「何處つて、狩小屋ですよ。陛下は今晩そこにお泊りになつて、明朝ハーバートとお歸りになります。お言傳と申すのはそれでございますので——」

漸くお言傳だ。それにしても酷く氣をもませたものである。

シモンが引下ると、一座はしばし沈默した。

それから私が口を切つた。

サブトは一寸笑つた。

「大丈夫だよ。我々も彼奴が狩小屋に行くかも知れんと言つたのだが——、多分行くに違ひない！」

「若し彼奴が行つたら——」と、私はまた繰り返した。

女王は座を立つて、我々の方へ手を差し伸べた。

「あゝ皆さん……」と、彼女は言つた。

「ベルネンスタイン、君は豫定通りこゝに殘るのだ。それから五分間以内に、フリッと私の馬を用意してくれ。」と、サブトは言つた。

ベルネンスタインはサッと身を飜して、高臺を下つて、馬小屋に走つた。

「陛下、豫定に變更はございませぬ。」とサブトは言つた。「只、我々はルバートより先に到着しなければなりません。」

私は時計を出して見た。九時を過ぐる事二十分。シモンの長談議は十五分を空費したのだ。

「さあ、馬が來た。」と、サブトは叫んだ。彼は女王の手をとつて、白髪交りの口髭のある脣にあてた。そして、聞きとれぬ程の微かな聲で、「陛下も御無事で……」と言つた。女王の眼には涙が光つてゐた。私も同じく彼女の手にキスをした。そして二人は馬に乘つて、小屋を指して出發した。

「間に合ふかナ？」と、私は言つた。

「難しい。だが全力を盡して見るのだ。」と、サブト大佐は答へた。

突然、我等の背後に疾驅する馬蹄の響きが起つた。振り返れば正しく我々を追跡してゐるのだ。蹄の音は次第に近づき馬上の騎者は、息をもつかずに追うて來る。

「兎に角樣子を見よう。」と、サブトは馬の手綱を控へた。

その間に、追手は我々に接近した。

「ゼームス？」と私は叫んだ。

「はい。」と、答へたのは確かにルドルフ・ラッセンダルの僕である。

「一體何事だ？」と、サブトが聞く。

「はい、私はフリッ伯爵に從ふために參りましたので——」

「ゼームス、俺は何も命令はしなかつたがな。」

「いえ、主人ラッセンダルの命令で、あなた樣から言はれぬ限り、お側を離れるなとのことでした。それで、參つてございます。」

「おい、その馬はどうしたのだ？」とサブトが叫んだ。

「はい、私の見たところ、馬小屋での逸物でした。これなら大丈夫追ひつける自信がございました。」

サブトは口髭を引つぱつて、叱言を言つたが、終ひには笑つてしまつた。

「困つた奴だな。」と、彼は言つた。「それは俺の馬だよ。」

「あゝ左樣でしたか。」と、ゼームスは眞面目に答へた。

暫し皆沈默した。が、またサブトが笑ひ出した。

「サア前進！」と、彼は叫んだ。そして、我等三騎轡を並べて、森の中へ突進した。

第八章　獵犬

今にして其の日の出來事を回顧する時、一切の事は順序を追うて、明瞭に思ひ描く事も出來れば、また我々の巧妙な計略が不圖した偶然の機會から、こんな結果になつた事もハッキリする。若しあの時、王樣が狩小屋にお出かけにならなかつたら、我々の計畫は豫定通りに遂行出來なかつたかも知れない。或ひはまた、リッシエンハイムが、ルバートに警告する事が出來たのなら、我々は城内に留ま

つてゐたであらう。運命と云ふ奴は兎角狂ひたがるものである。王様は身體が弱つていらしたにも拘はらず、狩小屋におでかけになつたし、リッシエンハイムは從兄に警告しなかつたと言ふ始末になつてしまつた。私がストレルソーを出發した時、まだストレルソーにゐたルバートと、四時半過ぎにストレルソーへ着いたリッシエンハイムとが、行き違ひになつてしまつたのは、全く一寸の手違ひであつた。リッシエンハイムは途中の停車場から汽車に乘つてみたが、ルドルフ・ラッセンダルの方はこれとは反對に、人に顏を見られるのが嫌さに、汽車にも乘らなかつた。そして夜になつてからストレルソーへ着かうとしてゐた。然し、リッシエンハイムがルバートに警告しなかつたので、彼がケーニヒストラッス十九番地に行つて見た時は、早くもルバートが出發した後だつた。ルバートは私の出發した後から、直ぐ出發したのに相違ない。彼は約束の時間に間に合ふやうに狩小屋へ行くつもりであつたのだ。彼は何の憚るところもなく、ケーニヒストラッスの家から停車場へ行つてホフボウ行きの切符を買ひ求め、四時の汽車に乘り込んで、五時半には目的地へ着いた。途中で、彼はリッシエンハイムの乘つた列車と摺れ違つたのに違ひない。けれども二人は互ひにそれを知らなかつた。リッシエンハイムはストレルソーに着くと直ぐ、赤帽からルバートの出發を聞かされた。其の赤帽はルバートを知つてゐたので、リッシエンハイムに從兄の歸國の喜びを述べようとしたのだつたらしい。が、それを聞くや、リッシエンハイムは茫然として答ふるところを知らなかつた。彼は氣も混亂して、大急ぎでケーニヒストラッスの例の隱れ家へ來てみると、ホルフ婆さんは、たしかにルバートが出發した

と言つた。それを聞いて、彼は暫く狐疑逡巡してゐた。ルバートに殉ずる意味から言へば、直ちに彼の後を追うて自分も虎穴に飛び込まねばならぬ。然し、今から跡を追うたところで時既に遲い。まして怖ぢ氣のついた彼は、遂にストレルソーに踏み留まつて、狩小屋に於けるルバートの首尾を待つ事に決心した。若しルバートが斃れたら敵と仲直りをすればよし、又、ルバートが危地を脫して生還し得たならば、再びストレルソーで第二の陰謀に加擔すればよい。そしてルバートの助太刀に行かない口實としては、ベルネンスタインから受けた傷のために、片腕は全然役に立たないので、たとへ助太刀に行つたところで、大した働きも出來まいと言へばいゝと考へた。

以上述べた事は、今になつて綜合して考へて判つた我々には、一切は五里霧中にあつたのだ。我々は只想像したり、考へ込んだり、希望したり、心配するばかりであつた。たゞ我々の知つてゐる事はと言へば、リッシエンハイムがストレルソーの都をさして逃走した事、午後三時にはルバートはまだ都にゐた、と言ふ事だけであつた。二人はうまく落ち合つたかも知れない。我々の行動は、二人は行き違つたものとして、ルバートが狩小屋に來るものと覺悟してかゝらなければならなかつた。いや、或ひはもうルバートは、我々よりも一と足先きに、狩小屋に着いてゐるのかも知れない……と考へると、心の駒を急きたてるより外はなかつた。

さて、我々は馬の脾腹に拍車を當てながら、無二無三に疾走した。一度などは、ゼームスの馬が暗の中に躓いて、彼はしたゝか馬から投げ落された。私もあまたゝび低い木の枝のために、身を鞍から

跳ねとばされさうになつたが、本當に落ちたら卽死するか、氣絕したに相違ない。サブトだけは、我我の危險も落馬も顧りみず、先頭に立つて、鞍にひたと身をつけ、馬首を眞直に立てたまゝ、鞍上人なき如く疾驅した。その後に轡を竝べて續くは私とゼームスのたゞ二人、何にも言はず語らずに、默默として馬を驅つた。

突然、サブトが前方を指差した。狩小屋が見える。それは四分の一哩ほどの前方に、ぼんやり霞んでゐる。サブトは手綱を引いて馬を駐めた。我々二人も、それに倣つて、馬から降りた。

我等は馬を側の木に繫ぎ、足早に進んだ。其の時の案では、まづサブトが王樣のお伽をしに、女王の心遣ひで寄こされたやうな風をして小屋に入る手筈だつた。若しルバートが其處へ來て、既に歸つた後ならば、それは王樣の態度でも分らう。若しまだ來た形跡がない時は、私とゼームスが戶外に立つて、彼の行手を扼する筈だ。然し若しルバートが今、王樣と對談中ではあるまいかといふ心配があつた。その場合はルバートを其の場に斃して王樣にその手紙の僞造なることを信じさせるより外に策はなかつた。

我々が小屋から五十碼ばかり手前に來た時、サブトは突然地上に腹這ひに轉がつた。

「マッチを貸してくれ。」と、彼は低い聲で言つた。

ゼームスが火をつけたが、風のない晩だつたから明るく灯つた。その燈りで見ると、そこには小屋の方から續いてゐる、まだ新らしい馬蹄の跡がある。我々はまたマッチを摺つて、その跡を小屋から

二十碼ばかり離れてゐる一本の樹のところまで進んだ。此處で馬蹄の跡は止まつて、その先には人の往來した足跡が、柔かい立土の中にしるされてゐる。確かにそこから小屋へ、小屋からそこへ往來したのだ。樹の右手には、別な馬蹄の跡があつて、矢張り樹のところで駐まつてゐる。察するに一人の人間が、右手の方から馬で來て、下りると徒歩で小屋の間を往來し、また馬に乘つて、今我々の追かけて來た蹄の跡の方面へ去つたに違ひない。

「誰か他の者かも知れないな。」と、自分が言つた。さうは言つたものゝ、三人の心中には、ルバートが來たことを推察してゐた。

ゼームスと私はサブトに尾いて、小屋の入口まで近づいた。サブトは劍を拔いた。ゼームスと私は、短銃を檢らべる。小屋の中には一つの燈もなく、戶は閉められてゐた。ヒツソリとした靜寂。サブトはコツ〳〵と戶を叩いたが、中からは何の答へもない。彼は把手を握つてそれを廻した。戶が開かれると、廊下が暗の中に口を開いて、人の氣配とてもない。

「君は此處にゐてくれ。」と、サブトは囁いた。「中に這入つて見るから、マッチをくれ。」

ゼームスは言はれるまゝにマッチを渡した。サブトはそれを持つて中へ入つた。一、二碼のうちは彼の姿は見えたが、それからはぼんやりなつて、遂には全く見えぬ。靜まり返つた中に、自分の呼吸の彈む音だけが聞える。だが、次の瞬間、抑へつけた叫び聲と、人の倒れる音と、劍が廊下の石疊に當る音がした。戶外の二人は互ひに顏を見合せた。だが、小屋の中では別に騷ぐ樣子もない。そし

てマッチを摺る音がして、サブトはすぐ戸口に姿を現した。
「どうしたのだ？」と、低く私が訊ねた。
「轉んだ。」と、サブトが答へた。
「何に躓づいたのだ？」
「行つて見よう。ゼームス、お前は此處にゐろ。」
私は十呎位の間隔を置いて、サブトに尾いて廊下を進んだ。
「何處かにランプはないかな？」と、私が尋ねる。
「マッチで判るよ。」と、彼は答へた。「こゝだ。これに躓づいたのだよ。」
マッチの摺られぬ間に、早くも私は廊下の中に横つてゐる、黒い人間の體を認めた。
「死體だ！」と、私は叫んだ。
「いや〳〵。」と、サブトはマッチを摺りながら言つた。「死んだ犬だよ。」
私は膝まづきながら、思はず不審の聲を立てた。同時にサブトも吃いた。「あ、ランプがある。」彼は棚承の上にある小さい石油ランプをとつて、それに火を入れて、死體の上に翳した。
「獵犬のボリスだ。」と、私は周圍を憚つて低く言つた。
私はよくその犬を知つてゐた。それは王様のお氣に入りの犬で、何時でも狩場へお伴して來たものだ。王様の言葉はよく聞き分けたが、他の人に對しては怒りつぽい犬だつた。それが、今こゝにかうして死んでゐるのだ。サブトは優しく、その頭に手を置いて、額を貫通した彈丸の跡を示した。私は頷づきながら、右肩に他の彈丸傷を見つけた。
「これを見たまへ。」と、サブトが言つた。「これに噛みついたんだな。」
私は彼の手の指すまゝに、その口を見ると、そこには角ボタンのついた、鼠色の布端がある。私はそれを摑んで引いて見たが容易に抜けない。サブトが劍を抜いて、その先で齒をこぢ開けたので、漸く取ることが出來た。
「それをポケットに入れたまへ。」といつて、彼は片手にランプ、片手に抜いたまゝの劍を握つて、犬の死體を越えて進む。私もその後に續いた。
二人は一つの室の前に來た。その室は、嘗つてルドルフ・ラッセンダルが、初めてルリタニアに來た日、我々と食事したところで、彼はそこから王様として、ストレルソーに乘込んだのだつた。その右手には王様の寢室があり、その向うには臺所や物置が續いてゐた。侍從武官の寢室は、食堂と向ひ合つてゐた。
「中を檢らべる必要があるね。」と、サブトは言つた。其の時、右手の廊下から、低い唸き聲がして、人が床の上を這ひずり廻るやうな音がした。サブトはそちらへランプを翳したが、すぐ我々は林務官のハーバートが、顏は青ざめ、兩手で半身を支へ、足を伸ばし、床に腹をつけたまゝの姿でゐるのを發見した。

サブトは彼に近寄つて言つた。「一體何うしたんだ？」

「私はやられました。」と、彼は呟いた。「見事にぶち抜かれました。腹をやられたのです。あゝ――」

彼はガックリ頭を床に下した。

私は走り寄つて彼を引き起した。

「譯を語れ。」と、サブトは短かい力の籠つた聲をした。私は成るたけ彼の身體を樂なやうにしてやつた。

彼は苦しさうな聲で、しどろもどろに語り出した。ふと物音がするので振り返ると、我々を心配して、ゼームスがやつて來たのだ。サブトはそれに氣も附かず、ひたすらその重傷者の言葉に聞き入つた。その話と言ふのは……

その夜、王樣は餘り食事も進まず、寢室に引き込んで、すぐベットの上に横になられたまゝ、着換へもせず寢込んでしまはれた。ハーバートは臺所で、食事を片づけてゐたが、その仕事が終つた頃、不意に自分の側に立つてゐる一人の男を見つけた。まだ王樣に召抱へられて間もない彼は、その不意の客を知らなかつた。その男は中肉中背で、苦み走つた立派な男だつた。身には皮の獵衣を纏ひ、帶皮には短銃を用意してゐた。一方の手を帶皮にかけ、他の手には小さな箱を持つてゐた。

「王樣に俺が來たと取次いでくれ、さういへば解る筈だ。」と、その見知らぬ人間が言つた。客はまた、

「約束があるんだ。私が來たと言へばいゝのだ。」彼はテーブルの椅子に腰をかけて、片足をぶら〳〵させてゐる。その命令するやうな態度に、ハーバートは壓迫を感じて、客を睨みつけながら王樣の寢室へ行かうとすると、また呼びかけて言つた。

「王樣が何か聞かれたら、私が小箱と手紙を持つて來たと言つてくれ。」

ハーバートは會釋して、寢室へ行つた。王樣はぐつすり眠つて居られたが、ハーバートはまたギクリした。彼はれても、小箱や手紙のことも知らないらしかつた。それを見て、ハーバートはまたギクリした。彼は低聲になつて、客は短銃を持つてゐることを知らしから飛び起きた。すると寢床の下に蹲くまつてゐた大きな獵犬が、のそりと現はれた。そして、王樣にすり寄つた。然し、忽ち見慣れぬ人間を見つけ、耳を動かして唸り聲を立てながら、王樣の顏を覗つてゐる。

王樣は、流石ルバートを見た刹那、思はずたぢ〳〵と後に退つて叫ばれた。

「ヤツ、お前か！」

獵犬は主人のこの有樣を悟つて、荒々しく唸り出した。

「陛下、あなたはお約束なさいましたね？」と、ルバートは微笑を浮べて一禮した。恐らく、彼は王の驚きを見て、心中快哉を叫んだ事だらう。

「そんな覺えはない。」と、言つてから王樣は、「何のために、此處へ參つた？」

「覺えがありませぬ？」と、ルバートは叫んだ。咄嗟に、さては謀られたかと手は帶皮にかゝつて、短銃は半ば引き出される。驚きの聲を擧げたのはハーバート、身を以つて、王樣をかばふ。あつけに取られたルバートは、ニッと微笑しながら、一歩前に出た。

「退れ！」と、王樣は叱咤した。

ルバートは左手の小箱に氣づいて、かう言つた。

「陛下、さあこれを御覽下さい。その後でお話しをいたしませう。」彼はその手を差し出した。

然し、ハーバートは躊躇した。彼が一寸でも動けば、王の楯になつた自分の身に隙が出る。ルバートの方でも氣が急いた。若し謀られたものならば、愚圖々々してゐればゐる程、危險が及ぶ。彼は嘲笑つて叫んだ。

「さあ、此方に來るのが恐いなら、かうするから受取れ！」と、彼はその小箱をポンと投げた。

この傲慢な振舞ひに、ボリスはウオーッと一聲、ルバートの咽喉笛目がけて飛びかゝつた。ルバートはキャッと驚いて、いきなり帶皮の短銃取るより早く引き金を引いた。彈丸は飛んで、ボリスの肩を擊つたが、犬はルバートの胸許にどしんと體を投げつけて、突き倒した。今や、ルバートの投げた小箱などは、全く忘れられてゐる。王は愛犬の傷けられたのを見て、烈火の如く怒り、ルバートを突き拔けて、次の室に駈け込んだ。ハーバートもその後につゞく。ルバートは素早く犬を振り切つて、戸口に逃れようとする途端、猪槍を持つたハーバートに嫌と言ふ程突き當つた。王樣は二連發の獵

銃を持つて來られた。ルバートは左手を擧げて無抵抗を示し話を聞いて下さいと賴んだが、王樣は耳も藉さずに銃に狙を定める樣子。ルバートは身を飜して、扉の蔭にかくれた。轟然！ 彈丸は飛んだが、無念にも外れて壁を貫く。ハーバートはすぐに槍を擬したが、ルバートは何の逡巡もなく發砲した。ハ！バートは致命の重傷に、バッタリそこに斃れてしまつた。王樣の銃はまたもや肩に當てられてゐる。

「間拔け奴！」と、ルバートは唸つた。「擊てるものなら擊つて見ろ！」

銃とピストルとは同時に鳴つた。度胸を据ゑたルバートの彈丸は狙ひ過またずに命中したが、王樣のは再びそれた。ルバートは眉一つ動かさずに王樣の仆れた姿を見守つてゐた。

ルバートは室内へ這入つて行つた。が、室にはボリスがゐた。犬は跛を引きながらキャン〳〵泣いてゐたが、再びルバートを見るや怒りの唸りを擧げて、ルバートの後に尾いて行く。ハーバートは、頭を上げてその物音に聞き入つた。犬の怒號、ルバートの罵聲、そして格鬪の物音。犬は我々が發見した布端を嚙み取つた。次の瞬間、再び銃聲が響き彼の笑ひが洩れて、戸をバタンと閉めて歸つて行く音がした。ハーバートはルバートの逃げ去つたのを知つて、ホッとした。が、そのまゝ力盡きて今我々のゐる處へ打ち伏してしまつたのだつた。

私はハーバートの話を聞きながら、釘づけにされたやうに身動きもしなかつた。ゼームスは、私の腕に手をかけて、聞き入つてゐた。話が終ると、ハーバートは渇を覺えて、幾度も〳〵脣を動かし

たり、舌をなめずつた。サブトは幽靈のやうに青ざめて、顏には一層深い皺が刻まれてゐる。ふと二人の視線はかち合つた。が、默然として誰も口を開かない。言葉にこそ出さね、二人の眼はお互ひの心を讀んでゐたのだ。

「これも皆、我々の仕業だ。自ら蒔いた種を刈つてゐるのだ。」と、二人の眼は語つてゐた。私は今でも、我々のために不慮の最期を遂げ給うた王樣の事を考へるに忍びない。

だが、その時はまだ王樣が死なれたとも思へなかつた。私はサブトの腕を引つ摑んだ。彼は何事だといふ目をして、私を見た。

「王樣は？」と、私は嗄れた聲で囁いた。

「さうだ、王樣だ。」と、彼も言下に應じた。

我々は周圍に氣を配りながら、食堂のはうへ進んだ。私は思はずサブトに摑まつた。彼はサツと扉を押し開いた。火藥の香がプンと鼻を打つ。煙はまだ濛々とシャンデリアの周圍に漂うて光りは薄暗い。今度はゼームスがランプを持つて、二人の後からついて來たが、王樣の姿は此處には見えぬ。突然我々は希望を感じた。それでは、殺されなかつたのだ！　私は元氣づいて、次の奥の室へ走つた。こゝも光りが暗いので、ランプを照して見た。サブトとゼームスも側に寄つて來て、私の肩越しに覗き込んだ。

王樣は俯伏せになつて床に斃れてゐた。王樣は最期の安息所を求めて、そこへ匐つて行つたものと

見える。我々は暫くその姿を見守つてゐた。寂として沈默は深まるばかりである。やがて我々は死そのものの王座に近寄るやうな姿で、遲々として王に歩み寄つた。私は膝まづいて、王の首を抱き起した。血が脣を染めて、今は空しくその流れを止めたばかりである。あゝ、王樣はかくして逝かれたのだ。

私はサブトの手を肩に感じて振向いた。見ると、王樣は血に塗みれた手に、私がウインテンベルグへ携へて行き、今晩ルパートが持つて來た、例の小箱を固く握つて居られたではないか。あゝ、王樣は最期の息を引き取られる時まで、安らかな憩ひの代りに、この小箱をとつた。私はまだ溫い手を解いて、その小箱をとつた。

サブトは身を屈めて、低く尋ねた。

「開けてあるか？」

絲はもとのまゝで、封蠟も切つてはなかつた。知らずに死んで行かれたと思つた時、不圖、私は自分の目を手で蓋うてしまつた。涙が頰を濡らしてゐたのだ。

「もとのまゝだ。」と、私が答へる。

「さうか……有難い！」

と、サブトは言つた。それは靜かな聲であつた。

第九章　意外な報告

私は、ルバートの數ある罪惡の中で、王様を殺した事を必ずしも最大の罪とは考へてゐない。これは、明かに大逆無道の行爲ではあるが、止むを得ぬ事情の爲めに、その兇行を敢てしたことを考へると、氣まぐれな運命こそ先づ責められるべきである。その氣まぐれな運命が、我々を遲刻させ、彼にこの兇行を演じさせたのである。彼は初めから王様に危害を加へる意志はなかつたのだ。

さて私達が王様の死を發見してから、一時間以上經過した。時刻は將に眞夜中に近かつた。萬事上首尾に行つてゐたら、今頃はゼンダ城へ歸る道を餘程進んでゐたゞらう。ルバートは、今頃は數哩の彼方に逃げ延びた頃である。ラッセンダルは、既にストレルソーで敵の一味を引つとらへたかも知れぬ。

「これから如何しよう？」と、私は戸口の彼方の死體を指しながら尋ねた。

サプトは、またもう一度口を歪めて、手を刀の柄にかけたまゝ、

「どうともしないのだ。」と言つた。「手紙を奪ひ返さぬ間は、どうにも出來ん。」

「だが、そんなことは出來ない相談だ。」と、私は叫んだ。

「何故、出來ないんだ？」と、彼は考へ深さうに答へた。「不可能ぢやないのだ。やれるのだ。だが、我々は專心ルバートを捕へることに努めよう。その間は俺が大丈夫、事件を祕密にすることを引き受ける。」

「仰有る通りです。」と、ゼームスがサプトの相槌を打つた。

「兎に角、手紙を奪還するのが大切だ。そして……」

「そして、どうするのだね。」

三人は凝首して、相談した。私とサプトは椅子にすわり、ゼームスはサプトの椅子に寄りかゝつてゐた。

ランプの石油は盡きやうとして、光は暗くなつて來た。時々可哀想に、ハーバートは低い呻き聲を立てゝゐたが、それは我々の手ではどうにも出來なかつた。それに私達の注意は兎角彼を忘れがちだつた。

「女王にはゼンダに留つて頂いて、王様は一二日御逗留を御延期になつたと申上げるのだ。で、フリッ、君は直ぐ城に歸つて貰ふのだが、歸つたらベルネンスタインと共に、一刻も早くストレルソーへ飛んで、ルドルフ・ラッセンダルに會ふのだ。そして君達三人でルバートの後を追つかけて、手紙を取り戻して貰ひたい。若しルバートがストレルソーにゐなかつたら、リッシエンハイムを捕へて、ルバートの居所を白狀させるのだ。若しルバートがゐたら、君とルドルフだ、俺から忠告せんでも、どうするかは判つてゐやう。」

「そして、君は？」

「ゼームスと俺は、この小屋に殘るのだ。人が來たら、中へ入れないで。」
「だが、死體をどうする？」
「君が行つたら、二人で間に合せの穴を掘るつもりだ。二つ要るな。」と、彼はハーバートの方へ、拇指を立てゝ言つた。「いや、三つだ——戰友ボリスも、人日を憚つて貰はんといかん。」
「王樣を埋めるのか？」
「いや、餘り深くは埋めないで、又引き出せる程度に埋めるのだ。それとも君に良策があるのか？」
私には別に策はなかつた。サブトの策も餘り感心しなかつたが、この場合仕方がなかつた。かくて、計畫は一決した。王樣のために、早速酒倉の中に穴が掘られた。ハーバートが絕命したなら、我々はそれを小屋の背戸に埋めるつもりであつた。ボリスの安息所としては、我々の馬を繫いだ木の下を選んだ。もう用事はない。私は立ち上がつた。その時、ハーバートが悲しげに私を呼ぶ聲が聞えた。彼は兼ねてから、私をよく知つてゐたので、今私に側に坐つてくれと言つてゐるのだ。サブトは私が一刻も早く歸城することを望んでゐたのだが、どうしてこの最後の願ひを無下に斥けることが出來ようぞ。彼の臨終は近づいてゐたのだ。私はその側に坐つた。彼の最期は見るも立派なものだつた。私は彼の瞼を閉ぢてやつた。
かくて、私が別れを告げて馬に乘つたのは、已に朝の五時近くであつた。二人も各自の馬を小屋の後にある馬小屋に入れる。私は彼等に手を打ち振つて、馬を走らせた。夜はほのぼのと曉方近く、大

氣は新鮮で清らかである。新らしい太陽の光は、新しい希望を與へてくれる。恐怖や心配は、その光の前に影を消した。身體は自づと武者震ひに戰く。
城が見えて來た。馬は颯爽として線の野路を驅けた。私は思はず歡びの聲を擧げたが、次の瞬間、私は驚きの叫びを發して鞍の上に身を伸ばした。城頭の旗竿は裸のまゝである。昨夜風に飜つてゐた國旗は既に取り去られてゐる。城內に王樣か女王がおいでになる限り、それが揭揚されるのは永久不變の習慣である。それは最早ルドルフ五世のために飜る事がないにせよ、女王フラビアのゐる限り、高く揭げらるべきものではなからうか？　私は鞍を握りしめ、馬に拍車を蹴當てゝ無二無三に馬を走らせた。我々は今、ほんの今、運命の苦い杯を嘗めて來たばかりなのに、再び其の一擊を受けねばならないのであらうか？
私は十五分ばかりで城門に達した。召使が走り出て迎へてくれたので、私は勢よく馬から飛び降りた。手套を脫ぎ、靴を兩足で脫ぎながら、馬丁に馬の世話を命じて、召使に言つた。
「女王陛下の御召替への濟み次第、私が拜謁を願ひ出たと申し上げてくれ。私は王樣からお言傳を承つて來たのだ。」
彼は稍當惑した顏附をしてゐたが、をりよく王樣の召使頭ヘルマンが城門のところに差しかゝつてゐた。
「伯爵さま、大佐殿は貴方と御一緒ではございませんでしたか？」と彼は尋ねた。
「いや、大佐は王樣と御一緒に、狩小屋に殘られたのだ。」と、私は胸中の不安を押し鎭めて、如何に

も事もなげに言つた。「私は女王陛下へお言傳をしに參つたんだが、何時拜謁出來るか聞いてくれないか、ヘルマン？」

「陛下はお留守です。」と彼は言つた。「女王陛下はお召替へがすみますと、五時にはお室をお出ましになり、ベルネンスタイン中尉をお呼びになりまして、城を御出發なさると言ふ事でした。御承知の通り、食堂列車は六時に參りますのでな。」

ヘルマンは一寸口を切つて、時計を出して見た。

「今頃は、恰度汽車が停車場を出た頃です。」

「何方へお出かけになつたのかな？」と、私は尋ねた。

「ストレルソーへです。ベルネンスタイン中尉の御警衞で、侍女一人だけお召し連れになりました。今朝、城内は一騷ぎでしたよ。いきなり起される、それ馬車の御用意だ、やれ停車場へのお達しだ、やれ……」

「何にも理由は仰せ出されないのか？」

「左樣、何にも承りません。陛下は私に大佐殿宛てのお手紙をお預けになりましたが、大佐殿がお歸りになつたらお渡ししろとのお言葉でした。それは大佐殿から王樣へお傳へする事になつてゐる、大事なお手紙ださうですが、直接大佐殿にお渡しせよと申渡されました。伯爵さま、貴方は國旗が引き下ろされてゐるのを御氣づきになりませんでしたか？」

「餘計な事まで言はなくてもいゝ。其の手紙を渡してくれ。」

其のサブト宛ての手紙には、女王御出發の理由が認めてあるかも知れない。私は時を移さず、これをサブトに持つて行きたいと考へた。

「手紙をと仰せられるのですか？、失禮ですが貴方は大佐殿ではありますまい！」

「如何にも。」と、私も微笑みながら言つた。「私は大佐ではないが、これから大佐の處へ行くのだ。私は女王にお目にかゝつて戻るやう、堅く王樣に命ぜられて來た。が、女王御不在とあれば早速立ち戻らねばなるまい。さア、手紙をくれい！」

「いや、お渡し申す譯には參りません。陛下のお言葉は嚴めしうございました。」

「愚にもつかぬ！　大佐が來ないと分つてゐたら、私が賴まれたに違ひないのだ。」

馬丁も召使も去つて、ヘルマンがゐたゞけであつた。

「渡せ！」と私が迫ると、彼は私の樣子に驚いて後退りしながら、上衣の胸を手で押へた。その態度で手紙のあり場を知つた私は、矢庭に彼に躍りかゝつて、片手で咽喉を締めつけた。そしてポケットを探ぐつて、手紙を奪つて了つた。そして、二枚の金貨を出して、彼に握らした。

「默つてゐるのだよ。」

私は馬小屋に走つた。五六分間後に、私は又新手の馬に乘つて、城を出て了つた。

私が狩小屋へ着いた時、丁度ボリスの死骸が埋められてゐるところであつた。ゼームスは鋤で土を

ならしてゐた。サブトは側に立つてパイプを咬へて
私は鞍から飛び下りて、急いで委細を物語つた。サブトは手紙を引つ摑んでゐる。私は額の汗をぬぐ
ひながら空腹を覺えた。
「フリッ、女王はルドルフの後を追はれたんだ。」と、サブトは讀み續けながら言つた。そしてやがて
それを私に差し出した。
手紙は充分同情のもてる、感動的なものであつた。彼女はゼ
ンダに踏み止まらうとしたが、ルドルフに逢ひたさにストレルソーへ行くことを、正直に言へば、愚の極みであつた。彼女はぜ
貰ひたいと記してあつた。我々には、彼女が行つた理由よりも、既に行つてしまつたといふ事實が、
氣懸りになつて來た。我々は小屋に戻つて、ゼームスの心遣ひで朝食をしたゝめた。實際私は非常に
空腹を覺えて、へと〳〵になつてゐた。我々は食べながら、相談した。そして、私がまたストレルソ
ーに行くことになつた。
「一日で片をつけねばならん。」と、彼が言つた。「何時までも王樣の死を祕めて置く事は出來ない。
どうか、フリッ、今度こそあの青二才をやつつけて、手紙を奪ひ返して貰ひたい。」
二人の話は決まつて、愈々私は出發した。私は朝の九時に小屋を出た。そして、ホフボウを差して
馬を走らせ、そこで汽車を待つつもりであつた。サブトはラッセンダルに、もつと我々に助力してく
れるか、それとも手を引くつもりかどうか、その意向を確めるやうにと私に賴んだ。私は十時にホフ

ボウに着いた。が、汽車は一時間後でなければないので、私は空しく待たねばならなかつた。
「馬を飛ばさうか！」とも考へた、が、それとて、汽車よりは遲れることが判り切つてゐた。私は待
つより他に途はなかつた。私はいら〳〵して、煙草をふかしたり、歩いたり、坐つたり、又立つたり
して、少しも落着かなかつた。こんな寒驛では臨時列車を出す譯にも行かなかつた。
愈々汽車に乘つた。一時間ばかりして、ストレルソーの遠景を望む地點に來て、やれ〳〵と思つた
のも束の間、汽車は二三十分停車して了つた。また動き出したものゝ、ぢつと車內に坐つてゐること
は、全く氣も狂はんばかり辛かつた。漸くストソルレー驛に到着した。私は非常な努力で氣を落着け
て、座席にゆつたり背をもたせて、赤帽が車の扉を開くのを待つてゐた。私は騰揚に、馬車を言ひつ
けてその後から改札口を出た。馬車の扉を開いてゐる赤帽に、私は心附けを與へて、踏み臺に足をか
けた。
「宮城まで行くんだ！」と私は言つた。「急ぐんだ！　今の大馬鹿汽車のお蔭で、すつかり暇取つてし
まつた。
「ヘイ〳〵、直ぐ着きます。」と馭者が答へた。
私は車の中にとび込んだ。然し此の時、プラットフォームから手を擧げて、此方へ急いで來る一人
の男が目に留つた。馭者もそれと知つて待つてゐる。私もそれを振り切つて驅け出す譯に行かなかつ
た。それは妻の從兄のアントン・フォン・ストロジンであつた。挨拶する暇も惜んで急いだら、惡く

怪しまれるかも知れないと案じたからである。彼は私の側へ寄つて來て、如何にもストレルソーの流行の魁です、と言はまほし氣に、銀鼠の皮の手套をはめた、華奢な手を差し出した。

「フリッさん。僕は宮仕への身でないのを仕合せだと思つてゐるんです。」と、彼は言つた。「貴方のやうに多忙では、迚も助かりませんからね……。ゼンダには、ざつと一月おいでになつたやうでしたね？」

「女王が、今日突然氣紛れを起してね。」と私は笑ひながら答へた。「貴方も詳しく御存じでせうが、女は皆移り氣ですからね。」

「え、。私は貴方は直ぐにお歸りになる事と思つてゐましたよ。」と彼は言つた。「ですが、女王がお歸りになつたのは初耳ですね。」

「ほう……初耳？　それでよく私の歸りが分つてゐましたね？」

今度は向うが吃驚して、目を大きくした。「おや、私はまた、貴方も御用か何かでゼンダへいらつしたんだと思つてゐましたから、貴方も御一緒にお歸りだらうと踏んでゐたんです。では、貴方は陛下に扈從なさらなかつたんですか？」

「女王陛下にですか？　いや、今度は違ひますよ。」

「いや、王樣にですよ。」

「あ、王樣と言ふと……」と、私は思はず身を進めた。「今かうして參つたのも、實は王樣の御用ですがね。」

「さうでせう。」と彼は言つた。「王樣が此方にいらつしやる以上、貴方もお歸りになるべきだと思つてゐましたよ。」

それを聞いて、私は一方ならず吃驚した。「王樣が此方にですつて……？」と、私は相手の腕を押へた。

「え、、貴方は御存じなかつたんですか？　王樣は事實此方へお歸りになつたのですよ。」

私は開いた口が塞らなかつた。彼の事は忘れて、いきなり馭者に叫びかけた。

「宮城へ！　構はんから、どし〳〵驅けさせい！」

不審げにポカンとしたアントンを尻目に、馬車は矢を射るやうに走り出す。私は氣も顚倒せんばかりに驚ろいて、クッションに寄りかゝつた。王樣は既に狩小屋で死なれた筈なのに、此の都に王樣がおいでになるとは何事だ。何んで左樣な事が有り得ようぞ！

勿論、私には直ぐ眞相が分つて來た。だが、それによつて私の心は安まらなかつた。ルドルフ・ラッセンダルが、此處で誰かに見つかつて王樣と思ひ込まれてしまつたのだ。

それでは、それと知つて何故私の心は安まらないのであらう？

然し私の知らない中に、事實は想像以上に惡くなつてゐたのだ。ルドルフが王樣と思ひ違へられたのは、單に、道行く人に思はれたとか、いゝ加減の噂とか、或ひは二三の人が王樣だと確信したのと

は全然異つて、もつと決定的な理由があつたのだ。彼は其の日、澤山の市民を前にして、女王フラビアも立ち會ひの上で、自ら王様だと名乗つたのであつた。而かも、彼もフラビアも、王様の死を露いささかも知つてはゐなかつたのだ。何うした運命の狂ひから、二人がかう言ふ危險な策を弄するやうになつたのか、それを次ぎに述べねばならない。

第十章　王の出現

ラッセンダルは、王様が狩小屋で横死された夜の九時頃、途中無事にストレルソーに到着した。彼はもつと早く着かうと思へば着けたのだが、人目を憚る必要上、暗くなつてからでないと町へ入る事が出來なかつたのである。ストレルソーへ入る關門は、ミハエル太公の時代と同じやうに、日沒になつても閉鎖されなかつたので、ルドルフは何の苦もなく其處を通過する事が出來た。その夜は、ゼンダ地方が快晴だつたのに引かへて、ストレルソーは烈しい暴風雨の闇であつたから、街路には人影一つ見えなかつた。從つてルドルフは、少しも人目を惹かないで私の家まで辿り着く事が出來た。ところで、早くも危險は其處に孕まれてゐた、と云ふのは、私の家の召使達は誰も此の事件の秘密を知つてはゐなかつた。只一人、女王フラビアの信任を受けてゐた妻のヘルガだけは、以前からルドルフをよく知つてゐたが、其の妻さへも今度の事件は何にも知つてはゐなかつたものだ。それでルドルフが來やうとは、夢にも思ひもうけぬ事であつた。

ルドルフは雨の飛沫を避けるために、襟巻で顏を包み、上衣の襟を耳まで立てた。烈しく吹きつける風は、自然に帽子を目深に壓しつけて、吹き飛ばさない用心をしてくれた。彼はかうしてすつぽりと顏をかくし、私の家の前に馬を止め、下りてベルを押した。召使頭が取次に出て來ると、ルドルフは襟巻にかすれた嗄れ聲で、伯爵夫人にお目にかゝりたいと云つた。

妻のヘルガは急いで階段をかけ降りて、玄關の戸を細目に開けてみた。外に立つてゐるのがラッセンダルだと云ふ事は、一目で分つた。

「まア、貴方でしたの？」と妻は叫んだ。「召使が氣が利きませんので、雨の中にお立たせしてすみませんでした。さア、お入り下さい。あゝさう〳〵、お馬がございましたのね？」

妻は召使頭に向つて、

「お馬を厩に連れて行つて頂戴！」

召使頭は不精々々に、情ない顏つきをして、外の暴風雨の中へ出て行つた。ルドルフは素早く中へ入つて、ヘルガと向ひ合つた。彼女は脣に指を當てゝ、何にも言ふなと相圖したまま、ルドルフを小さな部屋に案内した。そこは平生私の執務所になつてゐる處で、往來に面してゐた。雨は大きな硝子窓に飛沫をあげてゐる。ルドルフは微笑みながら會釋して、妻の手に接吻した。

「貴方、如何して此處へいらつしやいましたの？　何か事件でもございますの？」と妻が訊いた。

ルドルフは簡單に一切の事を說明した。そして妻は、夫の私が狩小屋で、あの兇暴なルパートと逢

ふのだと聞かされても、健氣にも平氣な顏をしてゐた。

「私は此處から出かけて行つて、又歸つて來ますが、人目にかゝらぬやうに出來ますか？」とルドルフが訊いた。

「女關の戸は、晩になると閉めてしまふのです。それに、鍵はフリッと召使だけしか持つて居りませんの……」

ラッセンダルの視線は窓に走つた。

「私は身輕ですから、あの窓から出入りしませうか。あの召使頭の手を煩はさぬやうにしませう。兎角、下郎は口のさがなきものと言ひますからね。」

「えゝ、では私、今晩一晩此の室に起きてゐて、誰も入れない事にいたしますわ。」

「若し私が仕事を仕損じて、敵に騷ぎ出されたら此處へ逃げ込んで來ますからね。」

「お仕事と申しますと……？」と、彼女はギクリとして尋ねた。

「なアに、何でもない事です。兎に角女王さまの爲めにする仕事なんです。」

「陛下のお爲めでしたら、私だつて、フリッだつて何でもいたしますわ。」

ルドルフは妻の手を堅く握りしめて、につこりしながら、

「それから、遠慮なく申上げますが、乾いた着物と夕飯を戴きたいものですね。それから先刻仰有つた通り、此處へは貴女以外に誰も寄越さないで下さいまし。」

彼がかう言つた時、召使頭が來て、戸の把手を廻した。妻はそこにかけ寄つて戸を開けて、何か冷肉があつたら持つて來てくれと吩咐けた。其の間、ルドルフは背中を彼に向けて、顏を見られないやうに用心した。

召使頭の去つた後で、ルドルフは妻に伴れられて、私の更衣室に行き、そこで乾いた服に着替へた。其の間に妻は以前の室に引返して、夕食の用意の出來たのを確かめた上、寢室の用意を命じ、召使を先に寢せつけた。ルドルフは妻の度胸を賞めながら、室に歸つて來た。ルドルフは急いで食事を濟した後で、煙草を喫しながら、二人で談合した。やがて、十二時を打つた時、ルドルフは初めて座を立つて、ランプの心を細くした。彼は靜かに鎧戸を押しあけ、窓を上げて、外を覗つた。

「私が出たら、またもとのやうに閉めて下さい。」と、彼は低い聲で言つた。「歸つて來たら、ノックしますから、その時はどうぞ開けて下さい。」

「どうぞ御用心なさいまし。」と、妻は彼の手をとつて、囁いた。

彼は大丈夫と頷いて、窓に足をかけ、耳を澄ました。暴風は依然猛威を振つて、街上には人一人見えない。彼はポンと鋪道の上に飛び降りて、またスッポリ顏を包んだ、妻は、大跨に歩いてゆく彼の脊の高い姿が、向うの町角に隱れるまで見送つてゐた。それから窓の鎧戸を閉めた。

さて、ルドルフの目にも、妻の目にも、人一人ゐないと思はれた街路には、ルドルフが私の家へ來た時から、出て行くまでの一部始終を見てゐた人間がゐたのだ。そも〳〵私の家の構造は、客間と食

堂にはそれ〳〵の出窓がついてゐて、家の兩側に出張つてゐる。從つて其の出窓にある壁は陰影を形づくつてゐる譯であつた。つまり其の暗がりに一人の男が潛んでゐて、一切の出來事を覗つてゐたのだ。其の男が他の場所にゐたのなら、ルドルフに見つからぬ筈はなかつたのだが、流石にそんな所に間者ありとは誰も知らなかつた。我々一味の誰かゞストレルソーに來るとすれば、先づ第一番に私の家へ來る位の事は、子供にでも考へつく事であつた。況んや、ルバートがこれを忘れる筈はなかつた。一度王樣を見た事はあつたが、まだラッセンダルを見知つてゐなかつた間者には、私の家を訪づれた來客が誰であるか突き止める事が出來なかつたのだ。時ならぬ時に來て、時ならぬ時私かに出て行く大男を、勿論間者は追跡した。其の男は、ルドルフが街角を曲り、妻が窓を閉めてから、初めて暗がりから這ひ出し、嵐の中に聞えるルドルフの跫音を尾け始めた。二人は大儀さうに巡回してゐる巡査の外は誰にも行き會はなかつた。然し其の巡査も、殆どゐないも同然だつた。彼等は通行人に氣をつけるよりも、塀の下に隱れて、雨の當らない場所でも見つける方が氣が利いてゐると云ふやうな風であつた。二人は何の邪魔もなく、歩き續けた。今ルドルフはケーニヒストラッスの街道に折れ曲つた。先刻妻が窓を閉めるまで歩き出す事の出來なかつたボウエル（尾行者はボウエルであつた）は、百碼位後れてゐたが、これを見て急に足を早めた。二人の間は七十碼位になつた。風の音、雨の音があるから、大丈夫氣付かれまいと、彼は考へたのだらう。

だが、それは都育ちのボウエルの考へ方だつた。ルドルフは田舍に生れて山間の僻地に育つたお蔭

で、耳は人一倍敏かつた。然し彼は依然として足も緩めず、止めもしなかつた。下手にそんな事をすれば、此方が感附いた事を相手に知らせる事になるのだ。が、十九番地に來ると、彼は道を其の家のある側に横切つて、一寸足を弛めた。後から來るボウエルも足を弛めた。ルドルフに追ひつかうともしなかつた。こんな晩に物好きに外を歩き廻る者があたにせよ、其れを尾行して同じやうに歩き廻るには、單なる物好き以外に、何かそれ相當な理由がなければならぬ。かう考へて、いろ〳〵頭をひねつてみたけれど、ルドルフには一向その理由が分らなかつた。

彼は不圖思ひついて、ピタリと歩道に足を止めてしまつた。尾行して來るのはルバートであらうか？　ルバートのやり兼ねない事ではないか？　間もなくルドルフは、くるりと踵を返して、今來た道を引返した。手はポケットの中のピストルにかゝつてゐた。

ボウエルはルドルフの近づくのを見て、さては感づかれたナ、と思つたに違ひない。早速彼は肩をすくめ、口笛を吹いて、スタ〳〵と足を早めた。ルバートには此の男の見當が少しも判らなかつた。ボウエルは靜かに口笛を吹きながら、ドロ〳〵の泥濘を無頓着に蹴散らして、終に近づいて來た。そしてルドルフの立つてゐる直ぐ前まで來た。此奴が失禮にも人の後を尾けて來たんだナと考へたルドルフは、どんな奴だか明瞭見てやれと云ふ氣になつた。そして顏に卷きつけた襟卷を少しずらした。

いた聲で話しかけた。彼は突然ボウエルの方へ歩き出して落ち着

「君、こんな晩に、夜遲くまで歩き廻るなんて、物好きだね。」

ボウエルは思ひがけなく呼び止められて驚いたが、
「旦那、宿なし犬にや、夜中だらうが、宵の口だらうが變りありませんよ。」
彼はかう言つて立止りながら、正直さうな鈍感な態度で顔を上げた。
「家がない！」とルドルフは同情するやうに叫んだ。「宿がない！　それは困るだらう。僕がい、處へ案内してやるから來給へ。ゆつくり休めるよ。」
ルドルフに捉つた彼は、大人と子供のやうなものだつた。彼はルドルフの言ふなりになつて、腕組みしてケーニヒストラッスの街道を歩き出した。ボウエルはもう口笛を吹く元氣もなくなつてゐたが今度はルドルフの方が何時の間にか、靜かに愉快さうな調子で、鼻歌をうなり出した。そして、ボウエルの組んだ腕に、指で拍子をとつてゐた。やがて彼は道を横切つて彼方側に渡つた。ボウエルは何となくそちら側に行くのが厭な風で、足も進まなかつたが、反抗も出來なかつた。
「君は僕の行くところなら、何處へでもついて行くナ。」と、ルドルフは元氣づけるやうに言つた。
歩き續けてゐる間に、二人はやがてケーニヒストッスの街端れへ來た。ルドルフは、店頭を覗き始めて。
「何て暗いんだらう。」と、彼は言つた。「君、十九番地を見つけてくれないか？」
この言葉は强か利いた。バウエルは捉へられた腕を震はしてゐた。
「十九番地ですか？」と、彼は吃くやうに言つた。

「あゝ、十九番地だ。そこへ行かう。」
「あゝ、これがさうらしい」と、ホルフ婆さんの小さい店先へ來た時、ルドルフは滿足さうに言つた。「おい、扉の上にあるのが、一といふ字と九といふ字ぢやないか？　あゝ、ホルフ！　さうだ。さあ、ベルを鳴らしてくれ。僕の手は塞がつてゐるのだ」
如何にもルドルフの兩手は塞がつてゐた。片方の手からは、今までの馴々しさが消えて、固くボウエルの腕を摑み、他の一方の方には、今まで隱してゐたピストルが握られてゐるのだ。
「ベルなんぞ、ありやしませんよ。」と、彼は澁面を作つて答へた。
「あゝさうか。ぢやノックでもするんだらう？」
「多分さうなんでせう。」
「おい、それとも何か他の相圖でもするのか？」
「わつちには判りませんよ。」と、ボウエルは唸る。
ルドルフは微笑した。
「僕は愚圖々々してゐるのは厭なんだ。で、若し二分間以內にこの戸が開かなかつたら、仕方がないからヅドンと一發やつて、こゝの主人の目を覺ますのだ。分つたか。」
再びピストルが擬される。
流石のボウエルも屈服せぬ譯には行かなかつた。彼は手を擧げて、その拳で一つドンと大きく打つ

て、續けざまにコツ〳〵と靜かに五つ叩いた。ボウエルの來るのが解つてゐたと見えて、内では跫音もせずに、鎖の外される音が聞える。それから閂を引く音がした。それがすつかり引かれたところで、扉の裂目が開いた。その刹那、ルドルフの手はボウエルから離れた。彼は素早く猿臂を延ばして、ボウエルの襟首を摑み、道路へどうと突き飛ばして了つた。足場のよろめいたボウエルは、泥の中に腹匐ひになる。ルドルフは飛鳥の如く飛び込んで、忽ち戸を閉め、閂を固く下ろしてしまつた。次の瞬間、ルドルフの手はピストルの臺尻にかゝつた。

然し其の前は現はれたはルバートにあらず、リッシエンハイムにもあらず、將又ホルフ婆さんでもなかつた。意外にも脊の高い、美しい、さびしげな顏の娘が、ランプを持つて現はれたのだ。彼はその娘を知つてゐなかつたが、それはホルフ婆さんの末娘のローザであつた。

彼女は彼を見た時、ランプを取り落さんばかりに驚いた。襟巻は取り除けられて、彼の顏はすつかり見えるやうになつてゐたのだ。彼女の眼には、驚きと、喜びと、昂奮が閃めいた。

「まあ、王樣！」と、彼女はびつくりして囁いた。

「聲がないので變なのかナ？」と、ルドルフは自分の顎を指して訊ねた。

それを聞いて、彼女も疑ひを晴らし、喜びの色を輝かした。

「私——王樣なら何處にいらしてもお見分け出來ますわ。」

「では予のために斷いてくれるか？」

「え、命まで差上げますわ。」

「いや、いや、命まではいらぬが……お前はいゝ娘ぢや。時に、こゝは誰の家か？」

「お母さんのでございます。」

「ほう、左樣か。で、お母さんは誰か下宿させてをらぬかナ？」

ローザは、彼の言葉に當惑したやうな樣子を見たが、

「ルザウ・ツッシエンハイム伯爵です。」

「伯爵は今どうしてゐる？」

「腕の傷が痛むので、呻吟つて床に寢てをります。」

「その外には？」

彼女は周圍を用心深く見廻した後で、低い聲で答へた。

「いゝえ。今はをりません——誰も、他には。」

「實は予は友達を探してゐるのぢや。」と、ルドルフは言つた。「その友にだけ會ひたいのだが……」

「と仰せられますと……」

「ほう、お前は予が會ひたいといふ友人を知つてゐるか。」

「え、ですけれど、その方はをりません。王樣に逢ひに出かけましたから……」

「予に會ひに、で、どうしてお前は、それを知つてゐるのぢや？」
「ボウエルが聞かせてくれましたの。」
「あゝ、ボウエル！　で、そのボウエルとは一體誰なのぢや？」
「今戸をノックした人でございます。あなた樣は何故ボウエルを中へお入れになりませんの？」
「お前と二人だけで話したかつたのぢや。そして、ルバートは何處へ參つたのかな？」
「伯爵は狩小屋でお會ひになるお約束で參りましたのですが、あゝ、さう〳〵。リッシエンハイム伯爵は、お歸りになつて、御從兄がお出掛けと知つて、非常に困つてをられました。」
「あゝそれで解つた。リッシエンハイムへ持たせてやつたよりが、ルバートの間に合はなかつたと見える。お前はルバート伯が何時歸るか知らんのか？」と、尋ねた。
「朝早く——七時か八時頃と存じます。」
ルドルフは彼女の側へ近寄つてポケットから金貨を二枚取り出した。
「穴でも開けて、首に飾るがよい。」
「恐れ入ります。」と、彼女は一生懸命手を差し出した。
「十一時に予が來て、ボウエルのやうにノックしたら、扉を開けてくれ。」
「えゝ、お待ちいたしますわ。」
「今晩予の來たことを、誰にも言ふなよ。その約束が出來るかナ？」

「でもお母さんには？」
「いやいや、いかん。」
「リッシエンハイム伯爵にも？」
「あゝ、彼に言ふのは一番いけない。」
「御命令通りいたします。でも——でも、ボウエルが知つてをりますわ。」
「よし〳〵、ボウエルは予が何とかしよう。」
彼はかう言ひ終つて、戸の方へ向き返つた。そして扉を開け、素早く外に出て、背後の扉を閉め、耳を澄まし、暗がりの中に目を光らした。

第十一章　亂鬪の巷

夜は段々明けかゝつて、黎明の幽かな光が見えて來た。やがて街路は活氣を呈し、人々は其處を右往左往するのだらう。日中の明るみに顏を曝したくないルドルフ・ラッセンダルは、賑かにならぬ中に身を隱さねばならなかつた。萬一誰かに顏を見られやうものなら、王樣はストレルソーへお歸りになつたと言ふ噂が立つて、忽ち世間に騷ぎ出されるに違ひない。然しラッセンダルには、まだ多少は時間の餘裕があつたので、此の間にボウエルに泥を吐かせるつもりで、壁の蔭の暗がりに身を潛めて、待ち伏せしてゐた。たとへ、所期の結果は收めら

れないにせよ、ボウエルがリッシエンハイムと連絡する時間を、少しでも遅らすだけの效果はあるに違ひなかつた。彼の考へでは、今にボウエルが自分の動靜を見に來るに違ひないと思はれてゐた。ルドルフはまた襟巻で顏を包んで、强い雨に打たれ、激しい風に吹かれながら、一生懸命辛抱してボウエルを待つてゐた。時間は刻々過ぎてゆくが、靜かな街道にはボウエルの影も、誰の姿も見えなかつた。

それとも……？

ボウエルの方でも、多分ルドルフの出て來る姿を見てゐて、早くゐなくなつてくれゝばよいと思ひながら、覗き見てゐたのかも知れやしない。それとも、拔け目のないボウエルの事だから、ルパートの攻めかけて來るのを待ち構へて、いざとなつたらケーニヒストラッスへ御注進！　と出懸けたのかも知れない。その孰れとも分らないので、ルドルフは萬全の策を採らねばならなかつた。そして、遠い地平の彼方から生れ出る東雲の光を見つめて、もうそろ〳〵フリッの家へ引き上げねばならぬと焦燥しながら待つてゐた。一方ヘルガはまたヘルガで、女らしい數々の心配を考へ出しては、惱みながら、待ち遠しい時間の經つのを堪へてゐた。

ルドルフは絕えず、人影らしいものを物色しながら、彼方此方を見廻つた。暫らくは何の效果もなかつたけれど、やがて、それらしい物を發見した。而かも一人だけではないらしい。彼の立つてゐる、同じ道側を、左手の停車場の方から、朦朧と霞んだ人影が三つ、段々近づいて來る。三人は注意深く、その癖、立止りもせねば躊躇もせず、ひた〳〵と足早に歩いて來る。見つかつては一大事と、ルドルフは早速壁に身を擦り寄せて、ピストルの用意を檢査した。向うから來る三人は、早朝から出かける勞働者か、一晩飮みつゞけた泥醉者のやうにも見えたが、ルドルフは油斷なく身構へてゐた。愈々三人に近づいて來た。彼は瞳を凝らして、一心に其の顏を突きとめようと志した。だが、其の薄暗がりの中では、迚もハッキリ判別はつかぬ。ルドルフはボウエルの顏を見覺えてゐなかつた。けれども、眞中のが確かにそれらしく思はれた。そのても、どうもボウエルと言ひたい所だつた。若しそれが仲間に違ひなく、三人で何か一仕事するつもりなのらしかつた。

兩方の距離が五十ヤード位に縮まつた時、ルドルフはピストルを取り出して、ボウエルと覺しき男に狙ひを定め、いざ、と言ふ場合の用意をして待つた。

ボウエル——果してそれはボウエルであつた——は、まだルドルフが家の中にゐるものと信じて來たのだつた。ルドルフに巡り逢つて、ボウエル側が勝つた場合には、各五クラウンづゝを此の二人の仲間にやる約束だつたのである。

「さア、此の家だ！」と、戸口に立ち止つたボウエルが低聲で二人に言つた。「いいかい。俺が戸を叩くからな、お前たちは其處に待ち構へてゐて、野郎が跳び出して來たら、腦天から叩きつけてやるんだぞ。野郎は六連發を持つてゐるから、下手間誤つくとひどい目に逢はされるぞ！」

「大丈夫だ。ピストルなんか射たないうちに、お陀佛にして了はアな。」と、嗄れ聲で、一人が答へてエヘラ〳〵と笑つた。

「だが、逃かつた後だつたら、如何するんだい、兄貴？」と、もう一人の方が訊いた。

「そこに抜りがあるものか。ちやアンと彼奴の穴を突きとめて居らあね。いゝかい？」とボウエルが答へた。

惡漢二人は戸の兩側に立つて、手にした棒を振り上げた。ボウエルも將に戸を叩かうとする用意をした。

此方はルドルフ・ボウエルが相圖のノックをする間もあらばこそ、壁の影からひらりと跳び出し、三人めがけて突進した。此の思ひがけない突擊に、二人は思はず後へ退く。ルドルフは見事にボウエルの咽喉首を引つ摑んだ。ルドルフにはボウエル如きを締め殺す心など毛頭なかつたのだが、日頃積り積つた憤怒の情は、指にこもつて強く締めた。哀れやボウエル、息苦しさに今はこれまでと覺悟したのか、持つたるナイフを拔り上げて、ルドルフめがけてサツと斬りかゝつた。ルドルフとてもさるもの、ひらりと體を變して、危い切先輕く外らせば、再び氣を取り直したボウエルはナイフを振り廻しながら味方を呼んだ。

「かゝれ〳〵、何をボンヤリしてゐるんだ！」

かく〳〵と勵まされて、一人は前に跳り出た。騷然たる風雨の中で、敵三人を相手に入り亂れて戰うち、もはやピストル射つより外に道はなくなつてしまつた。ルドルフはボウエル目がけて照準を合せる。狙ひに氣づいたボウエルは、仲間の一人を小楯にとつて、逃げを打たうと試みたが、此の時遲くツドンと一發！　ボウエルは呻きを立てゝ地上に倒れた。

頼みに思ふボウエルが此の有樣、殘りの二人は忽ち恐れ、今までの勢何處へやら、可笑しいばかりにドーとなつた。一人は戰く聲を振りしぼつて降參と言ふ。

「旦那、この通りです。お願ひです。」そして悄然として口はアングリと開いたまゝだ。

ルドルフはカラ〳〵と嘲笑つた。

「どうだ、案外骨つぽい相手だらう？」

此の言葉を、相手は解せぬ面持ちで聞いてゐる。殘りの一人も形なしになつて、ボーツとした眼つきをしてゐた。ルドルフはこれ以上何にも言はない。やつと、一人が言つた。

「全く、旦那、二人で十クラウンぢや間尺に合はねえ仕事でさア。」

もう一方は依然として茫然としてゐた。ルドルフは二人に吩咐けた。「早くしろ。巡査でも來たらお前達だつて嬉しかあるまい。びく〳〵しないで、此奴を抱へろ！」

かう言つて、ルドルフは十九番地の戸を叩かうとしたボウエルを此の家へ抛り込むつもりだつたのらしい。

すると、丁度此の時、ボウエルが唸き始めた。ボウエルのやうな者が死んだからつて、何處に悲しむ者もゐない筈なのに、運命の神様と言ふ者は、下らない所に情深くて、こんな者を生かして置きたがるものと見える。先刻ルドルフのピストルに狙はれた時は、危く體を縮したお蔭で、漸く生命拾ひをしてしまつた。尤も、彈丸は小鬢を掠めて飛び去つたので、生命にこそ別狀はなかつたが、驚きのあまり失神してしまつたのである。

ルドルフはボウエルの手を引つ捉へた。こんな男を打ちやつて置いては、何を喋舌り出すか分つたものではない。一體、どうしようかと考へた。すると忽ち、折角の思案も掻き亂されて了つた。かう言ふ聲が聞えたからである。

「騎馬巡査だ！　騎馬巡査だ！」

それは、先刻來、ずつと默つてゐた男の叫び聲だ。

耳をすませば、たしかに馬蹄の響き！

間もなく、停車場の方に騎馬巡査の姿が二つ見えて、見る〳〵うちに近づいて來る。見るなり、一人の惡漢はボウエルをその場に投げ出して、横跳びに街道を曲つて、命から〴〵逃げ出した。つゞく一人も、そのまゝ眞直に韋駄天走り！

ルドルフとて、大事の前の身體、何等疚しい事はないにせよ、今巡査に捕はれる事はいゝ事ではない、と感づいた。

「よし、逃げられるだけは逃げてやらう！」

咄嗟に、彼はケーニヒストラッスの風上の方へ駈け出した。が、間もなく狹い横丁を見つけて、其處へ走り込んだ。そして、一寸立ち止まつて、耳を澄ました。

三人が三方へ逃げ出したのを見て取つた騎馬巡査は、怪しいと思つたのか馬を早めた。間もなく、彼等はボウエルの傍へ驅け寄つた。今まで無我夢中だつたボウエルは、突然自分が獨りぼつちになつてゐるのが瞬に落ちなかつた。勿論、巡査に語る事も出來なかつた。

二人の巡査と、ボウエルの眼前には、墨繪のやうな影を見せて、戸も堅く鎖した十九番地の家がある。其の家にしろ、近所の家にしろ、此の地上に倒れてゐた人間に、直接關係のありさうな物的證據は何に一つも見つからなかつた。そればかりでなく、ボウエルの手に握られた長いナイフを見ると、果して此の人間が被害者なのか否やも、二人の巡査には分らなくなつてしまつた。彼等は全く當惑せざるを得なかつた。同勢僅かに二人である。而も手當を加へなければならぬ怪我人と、三人の逃走者を控へてゐる。巡査は困り果てゝボンヤリ十九番地の家を見上げた。

十九番地の家は暗く、ひつそり靜まり返つてゐて、全く無關心に立つてゐた。勿論、逃走者の影などは見えなかつた。

耳を澄ましても、何の物音もしないのでホツとしたルドルフ・ラッセンダルは、また其のまゝ歩き出した。すると間もなく薄暗い町の空氣を搖がして、けたゝましい呼笛が聞えた。騎馬巡査が應援を

求めてゐるのだ。巡査の一人は停車場に走つて、かくと本署に急を告げたのに違ひない。そして今の呼笛を聞くや、近所の巡査は、すわとばかり犯人（と覺しい者）を追跡するに違ひないのだ。

また暫くして呼笛の音！

ルドルフは思はず駈け出した。道を左にとつて行けば私の家へ行けると思つてゐたが、それらしい道には出なかつた。道は狹くなつて曲り、だん〳〵舊式な建物の竝んだ町の方へと出て行つた。もう夜は明けはなれて、彼方此方に人の影が動き始めた。ルドルフは走るのを止めて了つた。それに息もさう長くはつゞかなかつた。彼は襟巻で首を卷き、頭には帽子を目深に冠つて、何處に行つたら道が聞かれるかと案じながら歩いてゐた。

少し歩いて行く中に、後から又騎馬巡査が飛んで來た。ルドルフを見ると「オイ、待て！」と呼び止めた。

巡査が數碼手前まで來た時、ルドルフは泠然としてかう尋ねた、そして襟卷を顎から取り除けながら。

「何の御用ですか？　お聲が荒かつたやうですが……」

此の逆ねぢを喰つて、巡査は鞍の上からルドルフをぢつと見つめた。ルドルフは毅然として立つてゐた。巡査は尚ほもルドルフを見つめてゐたが、忽ち屹となつて、丁寧な敬禮を捧げた。周章たと見えて、顏は眞赤になつてゐた。

「一體、何故そんな敬禮などなさるんです？」と、ルドルフは聊かムッとして言つた。「最初私を呼び止めて置いて、それから敬禮するなんて、どうも解し兼ねた事ですね。一體如何なすつたのです？」

「私——私は。」と、巡査は吃つた。そして何とか口を切らうと力めて苦しんでゐた。

「陛下！　つい存じませんでしたために——つい……」

ルドルフはつか〳〵と前に進んで、

「私を……何故陛下などと……？」

「だ……だつて——陛下ではございませんか！」

ルドルフは直ぐ側に寄つて、馬首を撫でながら、巡査の顏を見つめながら言つた。

「君は人違ひをしてゐるんですね。僕は王樣ぢやないんですよ。」

「人違ひ……？」と、巡査は狐につまゝれたやうな樣子で口籠つた。

「言ふまでもない事です。が、君は……？」

「陛下には……？」

「陛下のつもりですか、此の僕を？」

「はい、左樣でございます。」

「王樣と、一平民とをごつちやにされては迷惑しますね。そんな事本氣で仰有ると、何にも知らない人間は、本當の王樣がおいでになつたのかと思ひますからね、さうでせう？」

これは變だぞ、と言ひたげな、當惑した微笑が、巡査の口髭を動かしながら覗かれた。

「王樣はストレルソーにおいでにならないんぢやありませんか、君？」とルドルフが言つた。

「さうです。」

「さうですとも。ゼンダにいらつしやるんですからね。」

「は……ゼンダに……？」

「さうなんです。ですから、此方にいらつしやるなんて事は、考へられもしない事なんですよ。」

それで呑みこめたと言ふ巡査の顏。それから晴々とニッコリして、

「全く、出來ない相談ですよ。」

「出來ませんッて。」とルドルフ。

「本當ですなア。」と、巡査はもう一遍につこりした上で、丁寧な敬禮をしてから、今來た道を引返して行つた。此の巡査は、ルドルフがケーニヒストラッスに起つた事件に關係があるなどと言ふ事は、夢にも考へはしなかつたに違ひない。彼はかうして易々と巡査の手から逃れる事が出來たが、焉ぞ知らん、新なる危險が彼を待つてゐやうとは。

さて、彼は早速私の家へ足を向けた。時刻は既に五時を過ぎて、すつかり明るくなつてゐた。屋臺店を出しに行く男女、市場に物を買ひに出懸ける男女が右往左往してゐる。ルドルフは、兵營の前で朝の仕事をしてゐる兵隊等の眼を恐れて、急いで廣場を通り過ぎた。幸ひに氣附かれずに通つて、私の家のある街路に入つた。彼はもう少しで、私の家に着くといふところで、突然馬車がすぐ彼の眼の前に來て、ピタと止まつてしまつたのを見た。馭者が席から下りて、戸を開いた。中から現れたのは二人の女、夜會服を着てゐるところから察して、舞踏會から歸つて來たのらしい。一人は中年、一人は若くて、すつと美しかつた。

年上の女の視線は、ルドルフ・ラッセンダルに落ちた。彼の方でもその女を知つてゐた。彼女は正しく宰相ヘルシングの妻だつた。馬車の止まつたところが、彼の住宅だつた。

「まあ、嬉しい！」と、彼女は娘の手をとつて、聲高く言つた。「ねえ、何といふ幸福でせう、國王陛下ですよ。」

逃げることも出來なかつた。婦人等は會釋をして頭を下げた。ルドルフは一寸帽子に手をかけて、輕く禮を返した。彼は背後に彼等の注視を感じながら、眞直ぐに私の家へ歩いて來た。

彼は人目があるので、今はヘルガと諜合せたやうに、窓から內部へ飛び込むことは、出來なかつた。ルドルフの歸りを待つてゐたヘルガは、この時も鎧戸の蔭に立つて、耳を澄まし、隙間から覗いてゐた。ルドルフの跫音が聞えるや否や、彼女はソッと鎧戸をはづし、窓を開いて靜かに叫んだ。

「大丈夫ですよ！　さあ、お入りなさい！」

かくて、運命の惡戲は行はれた。ヘルシングの妻子に不思議な光景を見られてしまつたのだ。ルドルフは首を廻して、彼等の方を眺めた。

「今はこれまで。」ルドルフはかういつて、身を跳らした。彼は、テーブルに椅つて青ざめて、恐怖に震へてゐるヘルガの方へ進みながら、事もなげに快活な微笑を浮べてゐた。

「見られましたの？」と、彼女は喘ぎながら訊いた。

「えゝ――」と、ルドルフは言ふ。そして可笑さに堪へ切れず、椅子に坐つて笑つてゐる。

だが、すぐまた謹厳になつた。自分は王様でも、ルドルフ・ラッセンダルでもかまひはせぬが、ヘルガまでがあらぬ浮名を立てられると思つたからである。さう思ふと、彼はヘルガに詫びる言葉も知らなかつた。彼はヘルガに向つて、口早やに言つた。

「直ぐ召使を起して下さい。そしてヘルシングを迎へにやるのです。いや、手紙で言つてやりませう。王様は秘密な用件があつて、フリッに逢ひに来たと言ふのです。が、フリッは不在だから、すぐヘルシングに来て欲しいと言つてやるのですよ。」

彼女は不審さうにルドルフを見てゐる。

「そんなに驚く事はありませんよ。」と彼が言つた。「若しヘルシングを丸めこむ事が出来れば、彼の妻子の口留めも出来ますよ。このまゝにしてゐたら、すぐストレルソー中に、フリッの妻が朝の五時に王様を窓から忍び込ませたと言ふ評判が廣がるぢやありませんか？」

「私には、おつしやる事が解りませんわ。」と、氣も混亂したヘルガは、可哀想にかう呟いた。

「いえ、奥さん、お願ひですから私の言ふ通りにして下さい。ほんたうに大事な時なんですよ！」

「……」默つて、彼女は机に向つた。

かうして、ヘルシングのまだ睡むたい耳に、今見て來た驚くべき報告を、宰相夫人が滔々と述べ終つたところへ、王様の召喚状が彼の眼を驚ろかしたのであつた。手紙に曰く、直ちにフリッ・フォン・ターレルハイム邸にゐます王様の許に伺候せよと！

噫！　思へばルドルフ・ラッセンダルをして再びストレルソーの土を踏ましめたのは、實に我等千慮の一失であつた。

第十二章　めぐりあひ

宰相ヘルシングは、取るものも取り敢へず早速六時前に私の家に駈けつけた。

彼の名刺が通ぜられた時、ルドルフは入湯をすまして二階で食事をしてゐた。ヘルガはヘルガで、ルドルフが來るまで、どんなにしてヘルシングに應待しようかと、自分一人で何回もその練習をしてゐたのだ。愈々彼女はヘルシングに會ふと、どんなにしてお詫びしていゝか解らないと言ひながら、私の不在の辯解を繰り返し〳〵語つた。そして、自分の夫に王様がどんな用事があるのか、少しも推察出來ない風に裝うた。さうして、彼女は從順の美徳をもつた。貞淑な妻らしく振舞ひ、たとへ自分の口出しすべきことでないにせよ、それが何であるか位にも、氣附かなかつたことを、心から濟まない風にしてゐた。

「私、ちつとも存じませんのです。」と、彼女は言つた。
「只、フリッから手紙が參りまして、五時に王樣とお會ひする筈になつてゐるのだが、その時王樣は家の召使等に見られることをお憚りになるのだから、窓から二人が這入られるやうにして置け、といふことを報らして貰つたゞけですの。」
そこへ王樣になつたルドルフが來て、下へ降りてヘルシングに丁寧な挨拶をした。あの時分は全く多事多端で、全く悲劇と喜劇とが妙に混ちやになつてゐた。私は今になつても、その時ルドルフが、生眞面目に口を結んで、ヂッ——と瞬きもせずにゐた樣子を思ひ描くと、微笑せずにはゐられない。（思ふに、甚だ危險なその役を、彼は享樂してゐたのだ。）ルドルフはさうした樣子で、薄暗い室の片隅に、老宰相と椅子を竝べながら、或る事件があつて此處へ來たが、仔細は今打ち明ける譯に行かない。が、少くも明日になれば、最も聰明練達な元勳達に諮問する筈であるから、その時まで自分を信じて貰ひたいと、老宰相の忠義心に訴へたのだ。ヘルシングは老眼鏡の奥でまばたきながら、事實には少しも觸れない、その長い話を、ヂッと熱心に聞き、一杯喰はされるとも知らずに、ルドルフから急性に促し立てられてゐた。
ヘルシングは感激して、陛下の御意のまゝに從ひますると言つた。そして妻子や下僕に對しては、私同樣口を愼ませるやうにいたしますと、堅く誓つた。
「おい、そちは全く幸福ぢやなあ。」と、ルドルフは、金殿玉樓に住む自分よりも幸福だといふことをほのめかして、かう言つた。これを聞いて、ヘルシングは醉く得意になつた。彼は一刻も早く家へ歸つて、王樣がさう言つて賞めて下されたと、妻に話したがつてゐた。
もうルドルフはヘルシングに用はなかつた。だが、彼の機嫌を惡くしてはいけないと考へて、もう少しゐて貰ひたいと、お世辭を言つた。そしてヘルガに向つては、自分のお室に退つて、一二時間お休みなさるがよい、と言つた。ヘルガは非常に疲れてゐたので、召使に向つて、急用でお呼びにならない限り二人のお客樣のお室に近づいてはいけないと、堅く言ひふくめて自分の室に入つた。
私の家でこんな事が起つてゐる時、女王フラビアとベルネンスタイン中尉とは、ストレルソーへ來る途中であつた。サブトがゼンダに殘つてゐたら、恐らくは二人を引き止めてストレルソーへはやらなかつたに違ひない。悲しい哉、副官ベルネンスタインにはサブト程の力がなかつた。彼れはフラビアの斷乎たる決心を知り、可憐な願ひをきくと、これをもつともな事と考へて、女王に從つてしまつた。三年ほど前、ルドルフと別れてから此の方、女王は自制心をひきしめて生きて來た。何時も自我を押へて、一度も、一瞬も、自己の感情のまゝに生きた事はなかつたのであつた。それぱかりではない、さうしようと、考へたことさへもなかつた。どうして彼女に、それが忍べたのであらうか？　男でさうした生き方をなし得た者があるか、否かは、大いに疑はしいが、女性には屢〻さうした忍從の生活を送つた者のある事は確かである。ところが、突然、思ひがけなくルドルフが來て、それに引き續いて起つた色々の出來事は、すつかり彼女の自制心を打ち碎いてしまつた。且つ彼女のルドルフを

思ふ心は、感情を極度に昂奮させて、ルドルフに逢ふことより他には、何も考へることも出來なくしてしまひ、又ひたすら彼の身の上ばかりを案じさせたのだ。ストレルソーへ向ふ途中も、彼女の語ること〳〵言つては、只ルドルフの身の上を心配してゐることばかりで、自分の危險も、また自分のために働いてゐる我々の身の上なども悉く忘れてゐた。彼女は、つまらない口實を作つて、お附きの女官を彼方に去らせ、只ベルネンスタインを側に置いたきりだつた。そして、出來るだけ早く、ルドルフに逢はしてくれと言つて、散々ベルネンスタインを手古摺らした。今思ふと、それは無理もなかつたらうと思ふのだ。彼女にとつて、すべての歡喜であつたルドルフが、人もあらうにあの兇惡無慘なヘンツオウ伯と戰ふために行つたのだ。ルドルフが、さながら死者のやうになつて、彼女の夢に現はれたところで何の不思議があり得よう？　而かも彼女は、ルドルフが、異口同音に人々から王樣になつてくれと、歎願されてゐることも信じたがつてゐた。これも、彼女の愛が王冠を戴くルドルフを幻影に描かせたと見れば見られやう。

ストレルソーへ着くと、疑念を抱かせるやうな態度をしてはいけない、といふベルネンスタインの言葉に從つて、フラビアは幾分落着いた樣子をしてゐた。

だが、ベルネンスタインは、一度宮城に還啓して、フリツの妻を訪ねるといつてお出懸けになるがよいと彼女を說いた。彼女は八時に宮城へ着いて、一杯のチヨコレートを飲むと直ぐ、馬車の用意を命じた。私の家へ來る時はベルネンスタイン一人だけが扈從したが、彼とて今は、女王と同じやうに興奮してゐた。

女王は、只管ルドルフの事のみ思ひ煩うて、狩小屋の首尾など、少しも氣にしてゐないやうに思はれた。然しベルネンスタインは、サブトや私の歸りを待ちに待つてゐたが、何時まで經つても歸つて來ないので、何か不吉な事でも……と心配しはじめた。

二人の身の上に、何か不幸が起つたのではあるまいか、それとも二人の到着前、手紙は王樣の手に渡つたのではなからうか？　あれやこれやと心配してゐる時、女王は只簡單にかう答へた。

「ラッセンダルに逢ひさへすれば、われ〳〵の執るべき態度を極めてくれますよ。逢ひさへすれば……」と。

やがて午前九時を少し過ぎると、女王の馬車は私の家の戸口に着いた。この時、丁度ヘルシングの妻と娘は、一と寢入りして起きたところと見え、馬車の音を聞いて、窓へ顏を差し出した。その邊の街道にも、もう人々の往來が賑かになつてゐたが、クッションに深々とをさまつてゐる女王を見て、互ひに驚いて囁き合つた。ベルネンスタインは、先に馬車から飛び下りて、女王に手を貸した。彼女は周圍の人々に、急いで輕く會釋を贈つて、玄關に足を運び、自らベルを押した。家の中でも恰度その馬車を見附けたところであつた。妻の侍女は急いで、まだ寢んでゐるヘルガのところへ走つて行つた。ヘルガはすぐ起き上がつて、どんなに急がしい時でも、決して女が忘れない身だしなみをした。それから急いで階段を下りて女王を迎へ——警戒をして置かうとした。だが、それも間に合はなかつ

た。扉は既に開かれてゐた。召使頭と給仕が走つて行つて、女王をお迎へするために急いで開けて了つたのだ。ヘルガが階段の下に立つた時には、家の召使等を從へた女王はルドルフのゐた室へ入りかかつてゐた。その背後には、ヘルメットを手にしたベルネンスタインが立つてゐる。

室の中では、ルドルフと宰相ヘルシングが、まだ相變らず對談中だつた。その室は表の街道からすぐ中が覗かれるので、通行人の目をさけるため、日覆が下ろされてゐたので、室の中は非常に薄暗くなつてゐた。二人にも馬車の轍の音は聞えたが、よもや女王の御來臨とは夢にも想像しなかつた。何の言ひつけもしないのに、いきなり戸が開かれた時は、二人は全く驚いた。體の重い、どちらかと言ふと鈍重なヘルシングは、オイソレと、椅子から立ち上ることも出來なかつた。一方ルドルフは、咄嗟に室を横切つて、戸口に走つた。その時ヘルガも戸口のところへ來て、ベルネンスタインの廣い肩を押しのけた。かくて、彼女はそこに展開した光景を見た。召使等の人目も忘れ、ヘルシングの姿も氣附かぬ女王フラビアは、今は何物をも憚らず、只愛人の無事な姿を見て、張りつめた心に滿足を感じ、駈け寄るルドルフとその戸口でハッと顏を見合せた。そして、ヘルガやベルネンスタイン、いやルドルフさへも、氣附かぬ間に、大きく摑みつくやうにルドルフの手をとつて、我を忘れて叫んだ。

「おゝルドルフ、よく無事であて下すつた！」そしてその脣に男の手をおしあてゝ、激しいキッスをした。

一瞬間、寂として聲もない。召使等は容を正し、宰相は默想し、ヘルガとベルネンスタインは驚愕

したまゝである。ルドルフも又、惑亂してか、或ひは彼女への愛情に應へてか、無言のまゝであつた。間もなく、周圍の靜寂は、女王にも氣附かれた。彼女はルドルフの瞳を見上げ、周圍を見廻して始めてヘルシングを見た。ヘルシングは、室の隅からいとも丁寧な敬禮をしてゐる。彼女はハッとして側を見れば、其處には恭々しく身動もせずに召使等が立つてゐる。彼女は今漸く自分のした事柄に氣が附いた。彼女の呼吸は大きく喘ぎ、常でさへ青白いその顏は一層白く變つて、大理石さながらとなつた。そして顏が凍りついたやうに固くなつたと見る、忽ち眩暈を感じて、前によろめく。危くルドルフの手がそれを支へた。他の者は、其處に立つてゐることさへ忘れてゐたのだ。ルドルフは口邊に、大きな愛と同情の微笑をたゝへて、彼女を身近く引き寄せ、その腰を抱いて、彼女をさゝへてゐる。そして、まだ微笑のまゝで、彼女を見下ろして、皆にも聞きとれるやうな、愛情の籠つた聲で言つた。

「安心するがよい。萬事好都合ぢや。」

ヘルガは驚いて、ベルネンスタインの腕をとつた。彼も、脣を震はせ、眼を輝かしてゐるヘルガの蒼青めた顏を顧みた。眼と眼は互ひに物を言つた。それにキッスをした。

された手を戴いて、

「ベルネンスタイン中尉、滿足に思ふぞ。」とルドルフ・ラッセンダルは言つた。

かうして、その場は無事に濟んでしまつた。

然し危機は刻々と近づいてゐた。ルドルフは、女王を寢椅子に伴れて行つて、數時間の間でいゝから、王樣が來たことを語つてはならぬと、言葉少なに召使達に命じた。召使達も、女王の取亂した樣子から見て、何か重大事件の起つてゐることを察したに違ひない。そして、王樣はストレルソーに還幸せらるべき必要があつたのだが、そのことが人に知れては惡い譯があるのだ、それも、すぐ二三時間も經てば、人に知れても別に差支へはなくなるのだ。と考へた。召使達が委細承知して立ち去つてから、ルドルフはヘルシングに向き直つて、親し氣に其の手を握りながら、是非々々祕密を守つてくれと賴み、更に、後刻重ねて逢ひたい旨を述べた。そこでヘルシングは退去する。彼の後姿を見送つてしまふと、忽ちルドルフはヘルガとベルネンスタインとを呼び返した。ヘルガが女王の側に寄り添つて、何やかやと話をしてゐる間に、ルドルフはベルネンスタインと、相互の情報を交換し合つたラツセルダルは初めて、サブトや私から、何等の情報がない事を知つた。そして急にひどく心配をし始めた。

恰度此のところへ、ホフボウの停車場から打つた私の電報が着いた。戸を叩く音がするから開けてみると、此の電報が差し出された。早速ベルネンスタインが其の封を切る。讀むと、それはヘルガに宛てたもので、かう書いてあつた。

「今、ストレルソーへ行く途中。王樣は本日も狩小屋に御滯在遊ばす。ルバートは來りしが、我等殲着前に避去せり、ストレルソーへ歸りしや否や不明。彼は王に何等復命せず。

「ちやゝ、逃したナツー」と、ベルネンスタインは、深い失望を見せて叫んだ。

「さう早まるな。こゝに、（彼は王樣に何等復命せず）とあるぢやないか。」と、ルドルフは膀ほこつて言つた。

三人は、長椅子に腰をかけてゐる女王を取り圍んで立つてゐた。女王はまた疲れてはゐたが、心は全く落着きを取り返してゐた。ルドルフが自分の名譽のために闘つてくれたり、色々と畫策してくれると考へると、彼女はそれだけで滿足だつた。

「それに、こゝを御覽。」と、ルドルフは續けて言つた。「（本日も王樣は狩小屋に御滯在の御豫定）とあるぢやないか。有難い。我々は今日こそやつつけるのだ。」

「その通り——だが、何處にルバートがゐるでせうナ？」

「ストレルソーにゐるなら、一時間で突き止めるよ。」と、ラッセンダルは、ストレルソーでルバートと逢ふのは、如何にも本望だといはんばかりの態度であつた。「さうだ。彼奴を見事に引つ捕らへるのだ。何の恐れる事があるものか。彼奴を斃すことが出來れば、その時こそ、私は王樣になつたと同じやうに嬉しいのだ、さあ、愈々今日だ！」

彼等は私からの電報を見て、またホツと安心したのだ。その電報では、まだ奥の奥があらうなぞとは、少しも知られなかつたのだ。ルドルフは女王に向つて、

「御心丈夫にお待ち下さい。陛下。」と言つた。

「もう二三時間の辛抱ですよ。」
「そして、その後は？」と、女王が訊ねた。
「その時は、ゆつくり御安心が出來るのです。」と、彼女の上に身を屈めて、柔しく言つた。
「私もあなた樣をお助け出來たと考へただけで嚴滿足するでせう。」
「そして、あなたは？」
「私はこゝを去らねばなりますまい。」
一層身を屈めて、かう囁いたルドルフの聲を、ヘルガは微かに聞いた。彼女とベルネンスタインは、二人を殘して室を出た。

第十三章　從兄弟同志

ケーニヒストラッス街十九番地の店頭に立つて飾窓の鎧戸を外してゐるのは脊の高い美しい娘、ローザである。彼女は大儀さうに仕事をしてゐるが、顏は幽かに紅潮を帶び、瞳は祕やかな昂奮に輝いてゐた。ホテルの婆さんは、計算器に寄りかゝつて、ボウエルの歸つて來ないのをブツ〳〵憤つてゐた。ボウエルが歸らないのも道理、彼は今頃警察附屬の診療所で、二人の醫者から一生懸命手當を受けてゐたのだ。婆さんはこれについては何も御存じがない。只、昨夕ボウエルが、何處かしらへ兎に角樣子を探りに行つたことだけは知つてゐるのだ。そして、誰れを尾けてゐるかも、大抵の想像は

出來たのだ。
「ね、ほんたうに歸つて來ないのかい？」と、彼女は娘のローザに訊ねた。
「えゝ、わたしには、さう思はれたのですけど——」と、娘は答へた。「それに、わたし夜が明けるまで、店でランプを灯けて待つてゐたのよ。」
「十二時間も家を空けて、一言も音信しないなんて、ほんたうにあきれるよ。それにもう、やがて、ルパート伯爵さまがおもどりになるのに、ボウエルが歸らなかつたら、ほんたうにお困りなさるだらうに。」
ローザは默つて返事をしなかつた。彼女は鎧戸をはづして終つて、戸口に立つて、街道を眺めてゐた。時刻は八時を過ぎて、澤山の人が——それも大抵貧乏臭い人々が、街道を賑かに歩いてゐる。身分のいゝ、金のある人間は、もう一二時間もせぬと、街道に姿を見せないのだ。路傍では、その日の食料や農作物を積んで來た百姓の荷車や荷馬車が盛んに商賣をしてゐる。ローザはその人の流れに視線を向けてゐるが、頭の中は昨夜こゝへ來た立派な紳士の事で一杯になつてゐた。
百姓の荷車は列を造つてそろ〳〵動いてゆく。その中に一人二人、店先に車を止めて、野菜は要らないかと、婆さんに尋ねる。だが婆さんは劍もほろゝの挨拶で、いら〳〵しながら彼等を追ひ拂つてしまつた。凝り性もなく三人目の百姓が來て、また同じやうに追ひ拂はれてしまつた。四番目に、蓋ひをした馬車が戸口に止まつた時、ホルフ婆さんは我慢し切れずに叱言を叫んだ。

「何も要らないんだよ。さつさと行つとくれ！」と、金切聲を立てた。
馭者は氣にも留めずに、さつさと席から下りて、車の後に廻つた。
「さあ、旦那着きましたよ。」と、その男が言つた。「ケーニヒストラッスの十九番です。」
中からは欠伸をする聲がして、何んだか脊伸びするやうな吐息が漏れた。眠り足りない人がするやうな吐息であつた。
すると、家の中では、
「あゝ、伯爵様だよ。」
ルバートは、覆布の下から頭を覗かせて、街道の左右を眺め、馭者に二枚の金貨を與へて、下に飛び下り、身輕に街道を横切つて、小店に駈け込んだ。馬車はそのまゝ立ち去つた。
「運よく此の車に逢つたんだよ。」と、ルバートは快く笑つた。「あの馬車のお蔭でうまく人目を避けられたんだ。如何に僕が美男子でも、今のところストレルソーの人達に見せて、喜ばす譯には行かないからなア。それはさうと、小母さん、御機嫌はどうだね。オツとこゝにゐる可愛い方、どうなつた？」彼は今しがた脱いだ手套で、一寸娘の頰をなでた。
「だが、リッシエンハイムは歸つて來てゐやうナ？」と、ルバートは婆さんに言つた。
「えゝ、歸つていらつしやいましたよ。あなた樣がお出懸けになつてから間もなく——あの方は腕を組めて、繃帶をしてゐます。」

「さうか！」と、ルバートは叫んだ。「思つた通りだ！　畜生！　馬鹿や間抜の手を借りずに、一人の手でやれゝばよかつた！——伯爵は何處だ？」
「何處つて、屋根部屋ですよ。お教へするまでもないぢやございませんか。」
「さうだつたナ。で、小母さん、早速何か食はしてくれ。」
「はい〳〵、すぐローザに支度させます。」
そして、リッシエンハイムのゐる屋根裏へ駈け上つた。ローザはルバートに尾いて、高い古い家の、狹いギシ〳〵する階段を登つて屋根裏へ來た。ルバートは階段を上つて、すぐ突き當りの戸を開けて、細長い狹い室に入つた。そのあとから、ローザも何か嬉しさうな微笑を浮べて、その室へ入つて行つた。家具といつては、樫のテーブルと數脚の椅子、窓に近い壁際には、鐵の寢臺が二つあるばかりだ。一つの寢臺は空だつたが、もう一方には、黒い絹布で右腕を吊つた、ルザウ・リッシエンハイムが、夜具につゝまれてゐた。ルバートは、從弟を見て、ニヤ〳〵しながら足を止めた。ローザは戸棚から皿やコップや、その他の食器を取り出した。リッシエンハイムは、跳び起きて、戸口へ走つた。
「どうだつた？　逃げて來たのか？」
「まあ、そんなことだ。」と、彼は氣取つて言つた。そして、室の中央に進み、椅子にどつかと腰を下ろして、帽子をテーブルへ投げ出した。「まあ、逃げたやうなものの、危く死ぬところだつたぜ。」

リッシエンハイムは、顔を赧らめた。

「その譯は……」彼はかう言つてローザの方をチラと眺めた。彼女は冷肉と葡萄酒の壜をテーブルに運んで、ルバートの食事の支度に取りかゝつてゐた。が、密談が始まると見て、外へ出た。

「ね、用事がなけりや、何時までも、あなたのやうな別嬪さんにゐて貰ひたいのだが——實は一寸用があるからね——」と、ルバートは椅子から身を起して、冗談らしく丁寧にローザの前に一揖した。

「わたしだつて、自分に用のない話なんぞ聞きたくはありませんわ。」と、彼女はつんとして答へた。

「まことに立派な、結構な御氣性だね！」

と、ルバートは言つて、ローザに戸を開けてやり、また例の丁寧な一揖をして見せた。

「その手には乗りませんよ。」と、彼女は階段の溜りから、勝ほこつたやうに言つた。「ルバート伯爵様、何とでも仰有いまし。」

「今時の娘には、全くかなはない。」と、ルバートは微笑した。が、そのまゝ戸を閉めてまた澁面をつくつて、足早にテーブルへ來た。「さあ、聞かう。ね、一體どうして君が一杯喰はされたんだ？」

リッシエンハイムがゼンダ城での一件を話してゐる間に、ルバートは朝飯を濟ました。彼は默つて、途中で話を遮つたり、相槌を打つたりはしなかつたが、話がルドルフ・ラッセンダルの事になると、ルバートも流石にビックリした。リッシエンハイムの話がすむ頃には、ルバートも機嫌を直して、微笑してゐた。

「それは、うまい仕掛けだナ。君がその中に陷つたのも無理はない。」

「で、君の方は？　それはどうなんだね？」と、リッシエンハイムは待ち遠しさうに言つた。

「僕か？　聞くまでもないさ。君の僞手紙に釣られて、その通り釣られてやつたのさ。」

「行つたとも。」

「其處にサブトがゐたかい？　それとも誰か他の奴か？」

「サブトなどゐるものか。」

「サブトがゐない？　だが、確かに彼等は君にも罠を掛けてあつたらう？」

「少しもそんな樣子は見えなかつたナ。」と、ルバートは足を重ね、葉卷に火をつけた。

「然し、誰もゐないなんて……？」

「王と、召使と、獵犬とゐたゞけだ。」

「王が小屋にゐたのかい？」

「君のやつたことも、さう惡いことばかりぢやなかつたよ。」

「だが、サブトか、ベルネンスタインか、誰かゞ王に隨いてゐたゞらう？」

「いや、今言つたゞけの外、鼠一匹ゐなかつた。」

「ぢや、君は手紙を王樣に渡したのか？」とリッシエンハイムは昂奮に身を震はして叫んだ。

「渡せなかつた。小箱を投げつけたが、王はそれを開く暇もなかつたらう。思つたやうに、手紙のことを切出さすことも出來なかつたんだ。」

「何故！　……何故出來なかつたのだ？」

ルバートは身を起して、リッシエンハイムの坐つてゐるすぐ前へ來て、立ちながら葉巻の灰を落し、快活に笑ひながら、自分の從弟を見下ろしてゐる。

「解るかい。」と、彼が訊ねた。「僕の上衣が裂けてゐるのが？」

「さう言はれるとさうだね。」

「これはね、犬に齧みつかれたんだ。その上召使が、槍で突かうする。おまけに王樣までが、鐵砲をかつぎ出したんだ。」

「はゝあ。それから？」

「彼奴等に何が出來るものか、それだけの話さ。」

リッシエンハイムは、ビックリ大きな目をして、彼を凝視してゐる。ルバートは冷然と笑つて、相手を見下ろして、

「俺なんか武運長久だ。もう、あの王樣には鐵砲なんか射てる事はあるまい。」

リッシエンハイムは、その物語りを聞いて、びつくりした。一體、彼がこの事件に首を突つ込むやうになつたのも、何といふことなしに、ずる〳〵とルバートに引きずり込まれた形だつた。彼はルバートの殘忍さが、王樣を殺したことを知つて、愕然として竦すところを知らぬのである。彼は突然椅子から飛び上つて叫んだ。

「かうしては居られぬ。逃げよう！」

「いや、泡を喰ふには及ばないよ。此方の風向きはよくなりこそすれ、逃げる必要なんかありやアしない。」

「でも、これが露顯したら――？」リッシエンハイムは途中で、話を切つた。そして、又かう叫んだ。「何故、君はそんなことを聞かしてくれたんだ？　何故此處へなんぞ戻つて來たんだ？」

「何故つて、君、面白い話だからさ。それに何處へ行くたつて、文無しぢやないか。」

「金が要るなら、僕が送つてやつたよ。」

「僕はね、隴を得て蜀を望むのさ。それに事件は落着したつて譯でもないぢやないか。」

「僕はこれ以上お交際は出來ない。」

「おい、君、落膽するのはまだ早いよ。あの善良な王樣は、死んでしまつたが、まだ女王が殘つてゐるし、有難いことには、例の手紙が、此方にあるのだ。」

「僕はもう御免蒙りたい。」

「君はこれが恐ろしんだらう――？」さう言つてルバートは手で首を絞める形をしてみせた。

リッシエンハイムは急に立ち上つて、開け放した窓の側へ飛んで行つた。

「僕は息が塞がりさうだ。」彼は蹙面を作つて、ルバートの視線を避けて、かう低く呟いた。
「ルドルフ・ラッセンダルは何處にゐるのだ？」と、ルバートが訊ねた。「君はそれを知らないのかい？」
「あゝ、僕には何處にゐるのかわからん。」と云つてリッシエンハイムは、不意にルバートの方を振り返つた。
「僕はこの事件から一切手を引くよ。」と、彼は言つた。「すつかり御免蒙りたい。僕はその現場にゐなかつたんだ。王様がそこにゐやうとは、夢にも知らなかつたんだ。從つて、僕には少しも罪はない。確かに、罪などあるべき筈はないのだ。」
「全くその通りさ。」と、ルバートは相槌を打つて室の中を彼方此方歩いてゐる。街には何ら平生と異つた様子も見えぬ。立ち竝ぶ甍の彼方、宮城と兵營の上に聳えた國旗は、風に翩翻として翻つてゐる。彼は時計を取り出した。リッシエンハイムも同じく自分の時計を眺める。時刻は十時十分前である。
ルバートはそれには取り合はずに、平然として從弟を呼んだ。
「リッシエンハイム、まアおもてを見たまへ。」
リッシエンハイムは言はれるまゝに戸外を眺めてゐると、ルバートが又口を切つた。
「どうだい、何か變つたことでもあるやうに見えるかい？」と、訊ねた。

外には數多の男女が遊び歩いてゐた。平和な姿であつた。
「いや、何も見えないよ。」と、リッシエンハイムが、ぶつきら棒に答へた。
「さうだらう。僕にもさう見えるんだ。だが、それは變ぢやないか。一體、昨夕サブトが誰か、あの狩小屋に行かないのかしら——」
「行つたとも、それは保證するよ。」と、リッシエンハイムも、引き込まれて言つた。「それなら王様の死體を發見したはずだ。それに、それに、もう十時ぢやないか。ね、君、どうしてストレルソーで は、王様の死に弔意を表してゐないんだらう？　どうして、あそこに見える王旗は半檣にして、喪を示さないんだらう？　どうも僕には解せないね。」
「僕にも解らん。」と、ルバートは相手の顔をまじ〳〵と見入りながら、呟いた。
ルバートは微笑して、指先で齒をコツ〳〵叩いてゐる。
「ひよつとすると、」と、彼は話を一と切らして、考へ込んでしまつた。リッシエンハイムは敢へて口を挟まうともせず、まだ窓の外に出してゐるルバートの顔を眺めて、ボンヤリ立つてゐる。
「あゝ、事件に關係しなければよかつたんだ。」と、リッシエンハイムは遂々弱音を吐いた。
ルバートはその前に突つ立つた。
「君は後悔してゐるんだね？。」と、ルバートが訊ねた。「まあ、それならそれで、どうとも後悔するぢやないかナ。」彼は話を一と切らして、考へ込んでしまつた。リッシエンハイムは敢へて口を挟まうともせず、まだ窓の外に出してゐるルバートの顔を眺めて、ボンヤリ立つてゐる。
「あゝ、事件に關係しなければよかつたんだ。」と、リッシエンハイムは遂々弱音を吐いた。
ルバートはその前に突つ立つた。
「君は後悔してゐるんだね？。」と、ルバートが訊ねた。「まあ、それならそれで、どうとも後悔する

がいゝさ。いや、王様の許へ行つて、君の悔恨の情を言ふがいゝよ。僕は僕で彼等の仕業を探るのだ。さあ、君は行つて、拝謁を乞ふがいゝ。」

「然し、王様は――」

「今度の拝謁では、昨日のやうな下手はしまい。まあ、僕の話を聞きたまへ。」

ルバートはリッシエンハイムの傍に腰を下ろして、又新らしい計略を授けた。それは、ストレルソーに贋王様があるか、それとも眞實の王様が狩獵に行つて死んだまゝになつてゐるかを探ることであつた。若し、王様の死を祕密にするやうな企てが、一つも見えなかつたら、高飛をして身の安全を計らう――といふのがルバートの案であつた。

説明するルバートの顔には、好奇心と熱意が輝いて來た。彼の弱い性格は、またルバートの大膽さに魅了され、その勇氣に引ずり込まれて、ルバートそつくりの氣持になつてしまつた。

「解つたね。」と、ルバートは念を押して、「君が二時間以内に歸らなかつたら、自分で結論をつけるよ。その時は、てつきりストレルソーに贋王様があると思へばいゝのだ。」

「だが、何處へ行つたら、王様に逢へるだらう？」

「何處つて、先づ王宮だね。それから、フリッ・フォン・ターレンハイムの家さ。だが、フリッの家が臭いよ。」

「ぢや、初端から其處へ行かうかね？」

「いや、それぢや餘り彼方の手を、見通し過ぎるよ。」

「君は此處に待つてゐるかい？」

「あゝ、逃げねばならぬ事情のない限りは。然し、出かける時は置手紙をしておく。それから大事なのは軍用金だ。金つて奴はいくらあつたからつて邪魔にはならないものだ。忘れないで持つて來るんだよ。」

リッシエンハイムは、益々決心を固めた。そして煖爐棚にあつたピストルを取つてポケットに入れた。

「出來るだけ、こんな物は射たない事だね。」とルバートが言ふ。その忠告の聲を肩に聞いて、リッシエンハイムは急ぎ足で入口の戸に進んだ。ルバートは從弟を見送つて、のつそりと窓際に出て外を眺めた。

第十四章　最後の接吻

十九番地の家を出たリッシエンハイムは、急ぎ足にケーニヒストラッスの稍上手まで行つて、一臺の辻馬車を呼び止めようとした途端、誰か自分を呼んでゐるやうな聲を耳にした。あたりを見廻すと、そこにアントン・フォン・ストロフジンが、輕快な四輪馬車を近々と引寄せてゐた。自分は殿者臺に座して、大きな花束を傍に置いてゐた。